

あり。

八月

向日葵、向日葵、百日紅の昨日も今日も、暑さは蟻の数を算へて、麻野、萱原、青薄、刈萱の芽に秋の近きにも、草いきれ尙ほ曇るまで、立蔽ふ早雲恐しく、一里塚に鬼はあらずや、並木の小笠如何ならむ。否、炎天、情あり。常夏、花咲けり。優しさよ、松蔭の清水、柳の井、音に雫に聲ありて、旅人に露を分てば、細瀧の心太、忽ち酢に浮かれて、饅飩、蒟蒻を嘲ける時、冷奴豆腐の蓼はじめて涼しく、爪紅なる蟹の群、納涼の水を打つて出づ。やがてさらさらと渡る山風や、月の影に瓜が踊る。踊子は何ぞぞ。南瓜、冬瓜、青瓢、白瓜、淺瓜、眞桑瓜。

九月

残の暑さ幾日ぞ、又幾日ぞ。然も刈萱の蓑いつしかに露繁く、芭蕉に灌ぐ夜半の雨、やがて晴れて雲白く、芙蓉に晝の葦鳴く時、散るとしもあらず柳の葉、斜に簾を驚かせば、夏瘦せに尙ほ美しきが、轉寢の夢より覺めて、裳を曳く濡縁に、瑠璃の空か、二三輪、朝顔の小く淡く、其の色白き人の脇明を覗きて、帯に新涼の藍を描く。ゆるき扱帯も身に入むや、遠き山、近き水。

待人來れ、初雁の渡るなり。

十月

雲往き雲來り、やがて水の如く晴れぬ。白雲の行衛に紛ふ、蘆間に船あり。粟、蕎麥の色紙鳥、小田、棚田、案山子も遠く夕越えて、宵暗きに舩白し。白銀の柄もて汲りてふ、月の光を湛ふるかと思れば、冷き露の流るゝ也。凝つては薄き霜とならむ。見よ、朝風の浦の渚、潔き素絹を敷きて、山姫の來り描くを待つ處——枝すきたる柳の中より、松の蔦の梢より、染め出す秀嶽の第一峯。其の山嵐里に來れば、色鳥群れて瀧を渡る。うつくしきかな、羽、翼、霧を拂つて錦葉に似たり。

十一月

青碧澄明の天、雲端に古城あり、天守聳立てり。濠の水、菱黒く、石垣に蔦、紅を流す。木の葉落ち落ちて森寂に、風留むで肅殺の氣の充つる處、枝は朱槍を横へ、薄は白劍を伏せ、徑は漆弓を潛め、霜は鏃を研ぐ。峻峰皆將軍、磊巖盡く貔貅たり。然りと雖も、雁金の可懷を射ず、牡鹿の可哀を刺さず。兜は愛憐を籠め、鎧は情懷を抱く。明星と、太白星と、すなはち其の意

品小

氣を照らす時、何事ぞ、徒に銃聲あり。拙き哉、驕奢の獵、一鳥高く逸して、衍笑ふこと三度。

十二月

大根の時雨、干菜の風、鳶も鳥も忙しき空を、行く雲のまゝに見つゝ行けば、霜林一寺を抱きて峯靜に立てるあり。鐘あれども撞かず、經あれども僧なく、柴あれども人を見ず、師走の市へ走りけむ。聲あるはひとり篋にして、巖を刻み、石を削りて、冷き枝の影に光る。誰がための白き珊瑚ぞ。あの山越えて、谷越えて、春の來る階なるべし。されば水筋の緩むあたり、水仙の葉寒く、花暖に薫りしか。刈あとの粟畑に山鳥の姿あらはに、引棄てし豆の殻さらさらと鳴るを見れば、一抹の紅塵、手鞠に似て、軽く巷の上に飛べり。

番茶話

蛙

大正十一年五月

品小

小石川傳通院には、(鳴かぬ蛙)の傳説がある。おなじ蛙の不思議は、確か諸國に言傳へらるゝと記憶する。大抵此には昔の名僧の話が伴つて居て、いづれも讀經の折、誦念の砌に、其の喧嘩さを憎んで、聲を封じたと言ふのである。坊さんは偉い。蛙が居ても、騒がしいぞ、と申されて、鳴かせなかつたのである。其處へ行くと、今時の作家は恥しい——皆が然うではあるまいが——番町の私の居るあたりでは犬が吠えても蛙は鳴かない。一度だつて贅澤な叱言などは言はないばかりか、實は聞きたいのである。勿論叱言を言つたつて、蛙の方ではお約束の(面へ水)だらうけれど、仕事をして居る時の一寸合方にあつても可し、唄に……「池の蛙のひそく話、聞いて寝る夜の……」と言ふ寸法も悪くない。……一體大すぎなのだが、些とも鳴かない。殆どひと聲も聞えないのである。又か、とむかしの名僧のやうに、お叱りさへなかつたら、こゝで、番町の七不思議とか稱へて、其の一つに數へたいくらゐである。が、何も珍しがる事はない。高臺だから此の邊には居ないのらしい。——以前、牛込の矢來の奥に居た頃は、彼處等も高臺で、蛙が鳴いても、たまに一つ二つに過ぎないのが、もの足りなくつて、御苦勞千萬、向島の三めぐりあたり、小梅の臘月と言ふのを、懷中ばかり春寒く瘦腕を組みながら、それでもものんきに歩いた事もあつたつけ。……最う恚う世の中がせつこましく、物價が騰貴したのでは、そんな馬鹿な真似はして居られない。しかし此の時節のあの聲は、私は思ひ切れず好きである。處で——番町も下六の

此邊だからと云つて、石の海月が踊り出したやうな、石燈籠の化けたやうな小旦那たちが皆無だと思はれない。一町ばかり、麴町の電車通りの方へ寄つた立派な角邸を横町へ曲ると、其處の大溝では、くわツ、くわツ、ころ／＼と唄つて居る。しかし、月にしろ、暗夜にしる、唯、おも入れで、立つて聴くと成ると、三めぐり田圃をうろついで、狐に魅まれたと思はれるやうな時代な事では濟まぬ。誰に何と怪しまれようも知れないのである。然らばと言つて、一寸蛙を、承りまする儀でと、一々町内の差配へ断るのでは、木戸錢を拂つて時鳥を見るやうな殺風景に成る。……と言ふ隙に、何の、清水谷まで行けばだけれど、要するに不精なので、家に居ながら聞きたいのが懸値のない處である。

里見淳さんが、まだ本家有島さんに居なすつた、お知己の初の頃であつた。何かの次手に、此話をする、庭の池にはいくらでも鳴いて居る。……そんなに好きなら、ふんづかまへて上げませう。背戸に蓄つて御覽なさい、と一向色氣のなささうな、腕白らしいことを言つて歸んなすつた。——翌日だけ、御免下さい、と書けた聲をして音訪れた人がある。山内（里見氏本姓）から出ましたが、と言ふのを、私が自分で取次いで、は、あ、此れだな、白樺を支那靴と間違へたと言ふ、名物の爺さんは、と領かれたのが、コップに油紙の蓋をしたのに、吃驚したのやら、呆れたのやら、ぎよつとしたのやら、途方もねえ、と言つた面をしたのやら、手を突張つて慌て

たのやら、目ばかりばち／＼して縮んだのやら、五六疋入つたのを届けられた。一筆添つて居る——（お約束の此の連中の、早い處を引つ捉へてお目に掛けます。しかし、どれも面つきが前座らしい。眞打は追つて後より。）——私はいまいなと手を拍つた。いや、まだコップを片手にして居る。うまい、と膝を叩いた。いや、まだ立つたまゝで居る。いや何にしる感心した。

臺所から縁側に出て仰山に覗き込む細君を「これ平民の子はそれだから困る……食べものではないよ。」とたしなめて「何うだい。」と、裸體の音曲師、歌劇の唄ひ子と言ふのを振つて見せて、其處で相談をして水盤の座へ……も些と大業だけれども、まさか缺挿鉢ではない。杜若を一年植たが、あの紫のおいらんは、素人手の明り取ぐらゐな處では次の年は咲かうとしない。葉ばかり残して駈落をした、泥のまゝの土鉢がある。……其へ移して、簀の子で蓋をした。

淳さんの厚意だし、聲を聞いたら聞分けて、一枚づゝ名でもつけようと思ふと、日が暮れてもククとも鳴かない。パチャリと水の音もさせなければ、其の晩はまた寂寞として風さへ吹かない。……馴染なる雀ばかりで夜が明けた。金魚を買つた小兒のやうに、乗しかゝつて、踞んで見ると、逃げたぞ！ 畜生、唯一匹も、影も形もなかつた。

俗に、墓は魔ものと言ふ。嘗て十何匹、行水盥に伏せたのが、一夜の中に形を消したのは現に知つて居る。

雨蛙や青蛙が、そんな離れ業はしなからうと思つたが——勿論、それだけに、蓋も嚴重でなしに隙があればあつたのであらう。

二三日経つて、彈さんに此の話をした。丁ど其日、同じ白樺の社中で、御存じの名歌集『紅玉』の著者木下利玄さんが連立つて見えて居た。——木下さんの方は、彈さんより三四年以前からよく知つて居たが——當日連立つて見えた。早速小音曲師逃亡の話をすると、木下さんの言はるゝには、「大方それは、有島さんの池へ歸つたのでせう。蛙は随分遠くからも舊の土へ歸つて來ます。」と言つて話された。嘗て、木下さんの柏木の邸の、矢張り庭の池の蛙を捉へて、水掻の附元を（紅い絹糸）……と言ふので想像すると——御容色よしの新夫人のお手傳ひがあつたらしい。……其の紅い糸で、脚に印をつけた幾疋かを、遠く淀橋の方の田の水へ放したが、三日め四日め頃から、氣をつけて、もとの池の面を窺ふと、脚に糸を結んだのがちら／＼居る。半月ほどの間には、殆ど放した數だけが、戻つて居て、皆もみぢ袋をはいた娘のやうで可憐だつた、との事であつた。——あとで、何かの書もつて見たのであるが、蛙の名は（かへる）（歸る）の意義ださうである。……此は考證じみて來た。用捨箱、用捨箱としよう。

就て思ふのに、本當か何うかは知らないが、蛙の聲は、随分大きく、高いやうだけれども、餘り遠くでは響かぬらしい。有島さんの池は、さしわたし五十間までは離れて居まい。それなのに、私の家までは聞えない。——でんこでんこの遊びではないが、一町ほど遠い遠うい——角邸から響かないのは無論である。

久しい以前だけれど、大塚の火薬庫わき、いまの電車の車庫のあたりに住んで居た時、恰も春の末の頃、少々待人があつて、其の遠くから來る俣の音を、廣い植木屋の庭に面した、汚い四疊半の眩掛窓に、眩どころか、腰を掛けて、申し上るやうにして、來るのを待つて、俣の音に耳を澄ました事がある。昨夜も今夜も、夜が更けると、コーと響く聲が遙に聞える、それが俣の音らしい。尤も護謨輪などと言ふ贅澤な時代ではない。近づけばカラ／＼と輪が鳴るのだつたが、いつまでも、唯コーと響く。それが離れも離れた、まつすぐに十四五町遠い、丁ど傳通院前あたりと思ふ處に聞えては、波の寄るやうに響いて、颯と又汐のひくやうに消えると、空頼みの胸の汐も寂しく泡に消える時、それを、すだき鳴く蛙の聲と知つて、果敢ない中にも可懐さに、不埒な凡夫は、名僧の功力を忘れて、所謂、（鳴かぬ蛙）の傳説を思ひうかべもしなかつた。……その記憶がある。

それさへ——いま思へば、空吹く風であつたらしい。又思出す事がある。故人谷活東は、紅葉先生の晩年の準門葉で、肺病で胸を疼みつゝ、洒々落落とした江戸ッ兒であつた。（かつきぎゆく三味線箱や時鳥）と言ふ句を仲の町で血とともに吐いた。

此の男だから、今では逸事と稱しても可いから一寸素破ぬくが、柳橋か、何處かの、お玉とか云ふ藝妓に岡惚をして、金がないから、岡惚だけで、夢中に成つて、番傘をまはしながら、雨に濡れて、方々蛙を聞いて歩行いた。——どの蛙も、コタマ！ オタマ！ と鳴く、と言ふのである。同じ男が、或時、小店で遊ぶと、其合方が、夜ふけてから、薄暗い行燈の灯で、幾つも、あらゆるキルクの香を嗅ぐ。……あらゆると言つて、「此が惠比壽ビールの、此が麒麟ビールの、札幌の黒ビール、香竄葡萄、牛久だわよ。甲斐産です。」と、活東の寝た鼻へ押つけて、だらりと結んだ扱帯の間からも出せば、袂にも、懷紙の中にも持つて居て、真に成つて、眞顔で、目を据ゑて嗅ぐのが油を舐めるやうで凄かつたと言ふ……友だちは皆知つて居る。此の話を——或時、淳さんと一所に見えた事のある志賀さんが聞いて、西洋の小説に、狂氣の如く鉛筆を削る奇人があつて、女のとに限らない、何でも他人の持つたのを内證で削らないでは我慢が出来ない。魔的に警察に忍び込んで、署長どのの鉛筆の尖を鋭く針のやうに削つて、ニヤリとしたのがある、と言ふ談話をされた。——不束で恐れ入るが、小作菊本本の蠟燭を弄ぶ宿場女郎は、それから思ひ着いたものである。

書齋の額をねだつた時、紅葉先生が、活東子のために（春星池）と題されたのを覚えて居る。……春星池活東、活東は蠟料にして、字義（オタマジヤクシ）ださうである。

玉 蟲

去年の事である。一雨に、打水に、朝夕濡色の戀しく成る、乾いた七月のはじめであつた。……家内が牛込まで用たしがあつて、午些と過ぎに家を出たが、三時頃歸つて来て、一寸目を圓くして、それは、氣味の悪いほど美しいものを見ましたと言つて、驚いたやうに次の話をした。早いもので、先に彼處に家の建續いて居た事は私たちでも最う忘れて居る、中六番町の通り市ヶ谷見附まで眞直に貫いた広い坂は、昔ながらの帯坂と、三年坂の間にあつて、確かまだ極つた名稱がないかと思ふ。……新坂とか、見附の坂とか、勝手に稱へて間に合はせるが、大きな新しい坂である。此の坂の上から、遙に小石川の高臺の傳通院あたりから、金剛寺坂上、目白へ掛けてまだ餘り手の入らない樹木の鬱然とした底に江戸川の水氣を帯びて薄く粧つたのが眺められる。景色は、四季共に爽やかな且つ奥床しい風情である。雪景色は特に可い。紫の霞、青い霧、もみぢも、花も、月もと數へたい。故々言ふまでもないが、坂の上の一方は二七の通りで、一方は広い町を四谷見附の火の見へ抜ける。——角の青木堂を左に見て、土の眞白に乾いた橋脚の前を……薄い橙色の涼傘——東ね髪のかみさんには似合はないが、暑いから何うも仕方がない——涼傘で薄雲の、しかし雲のない陽を遮つて、いま見附の坂を下りかけると、眞日中で、丁ど人通が途絶

えた。……一人や二人はあつたらうが、場所が広いし、殆ど影もないから寂寞して居た。柄を持つた手許をスツと潜つて、目の前へ、恐らく鼻と並ぶくらゐに衝と鮮かな色彩を見せた蟲がある。深く濃い真緑の翼が晃々と光つて、緋色の線であらうと縫つて、裾が金色に輝きつゝ、目と目を見合ふばかりに宙に立つた。思はず、「あら、あら、あら。」と十八九の聲を立てたさうである。途端に「綺麗だわ」「綺麗だわ」と言ふ幼い聲を揃へて、女の兒が三人ほど、ばらばらと駆け寄つた。「小母さん頂戴な」「其蟲頂戴な」と聞くうちに、蟲は、美しい羽も擴げず、靜かに、鷹揚に、そして軽く縦に姿を捌いて、水馬が細波を駈る如く、ツツツと涼傘を、上へ投げて衝くと思ふと、パツと外へそれて飛ぶ。小兒たちと一所に、あらうと、また言ふ隙に、電柱を空に傳つて、斜上りの高い屋根へ、きら／＼きら／＼と青く光つて輝きつゝ、それより日の光に眩しく消えて、忽ち唯一天を、遙に仰いだと言ふのである。

大きさは一寸二三分、小さな蟬ぐらゐあつた、と言ふ。……しかし其綺麗さは、何うも思ふやうに言あらはせないらしく、じれつたさうに、家内は些と逆上せて居た。但し蒼く成つたのでは厄介だ。私は聞くとともに、直下の三番町と、見附の土手には松並木がある……大方玉蟲であらう、と信じたが、其の美しい蟲は、顔に、其の玉蟲色笹色に、一寸、口紅をさして居たらしく思つて、悚然とした。

すぐ翌日であつた。が此は最う些と時間が遅い。女中が晩の買出しに出掛けたのだから四時頃で——しかし眞夏の事ゆゑ、片蔭が出来たばかり、日盛りと言つても可い。女中の方は、前通りの八百屋へ行くのだつたが、下六番町から、通へ出る藥屋の前で、ふと、左斜の通の向側を見ると、其處へ來掛つた羅の盛装した若い奥さんの、水浅葱に白を重ねた涼しい涼傘をさしたのが、すら／＼と捌く姿を、縫留められたやうに、ハタと立留まつたと思ふと、うしろへ、よろ／＼と退りながら、翳した涼傘の裡で、「あら／＼あらあら。」と言つた。すぐ前の、鉢ものの草花屋、綿屋、續いて下駄屋の前から、小兒が四五人ばら／＼と寄つて取巻いた時、袖へ落すやうに涼傘をはづして、「綺麗だわ、綺麗だわ、綺麗だわ、綺麗だわ。」と魅せられたやうに言ひつゝ、草履をつま立つやうにして、大空を高く、目を据ゑて仰いだのである。通りがかりのものは多勢あつた。女中も、間は離れたが、皆一齊に立留つて、陽を仰いだ——と言ふのである。私は聞いて、其の夫人が、若いうつくしい人だけに、何となく凄かつた。

赤蜻蛉

品 小
一昨年の秋九月——私は不心得で、日記と言ふものを認めた事がないので幾日か日は覺えて居ないが——彼岸前だつただけは確だから、十五日から二十日頃までの事である。蒸暑かつたり、

涼し過ぎたり、不順な陽氣が、昨日も今日もじと／＼と降りくらす霖雨に、時々野分がどつと添つて、あらしのやうな夜など續いたのが、急に朗かに晴れ渡つた朝であつた。自慢にも成らぬが叱人もない。……張合のない例の寢坊が朝飯を済ましたあとだから、午前十時半頃だと思ふ……どん／＼と色氣なく二階へ上つて、やあ、い、お天氣だ、難有い、と御禮を言ひたいほどの心持で、掃除の済んだ冷りとした、東向の縁側へ出ると、向う邸の櫻の葉が玉を洗つたやうに見えて、早やほんのりと薄紅がさして居る。狭い町に目まぐるしい電線も、銀の糸を曳いたやうで、樋竹に掛けた蜘蛛の巣も、今朝ばかりは優しく見えて、青い蜘蛛も綺麗らしい。空は朝顔の瑠璃色であつた。欄干の前を、赤蜻蛉が飛んで居る。私は大すきだ。色も可し、形も可し……と云ふうちにも、此の頃の氣候が何とも言へないのであらう。しかし珍しい。……極暑の砌、見ても咽喉の乾きさうな鹽辛蜻蛉が炎天の屋根瓦にこびりついたのさへ、觸ると熱い窓の敷居に頬杖して視めるほど、庭のない家には、どの蜻蛉も訪れる事が少いのに——よく来たな、と思ふうちに、目の前をスツと飛んで行く。行くと、又一つ飛んで居る。飛んで居るのが向うへ行くと、すぐ来て、又欄干の前を飛んで居る。……飛ぶと云ふより、スツ／＼と軽く柔かに浮いて行く。忽ち心着くと、同じ處ばかりではない。縁側から、町の幅一杯に、青い紗に、眞紅、赤、薄樺の紺を透かしたやうに、一面に飛んで、飛びつゝ、すら／＼と伸して行く。……前へ／＼、行く

のは、北西の市ヶ谷の方で、あとから／＼、来るのは、東南の麴町の大通の方からである。數が知れない。道は濡地の乾くのが、秋の陽炎のやうに薄白く揺れつゝ、ほんのり立つ。低く行くのは、其の影をうけて色が濃い。上に飛ぶのは、陽の光に色が淡い。下行く群は、眞綿の松葉をちらちらと引き、上を行く群は、白銀の針をきら／＼と繖す……際限もなく、それが通る。珊瑚が散つて、不知火を澄切つた水に鏤めたやうである。

私は身を翻して、裏窓の障子を開けた。こゝで、一寸恥を言はねば理の聞えない迷信がある。私は表二階の空を眺めて、その足で直に裏窓を覗くのを不斷から憚るのである。何故と言ふに、それを行つた日に限つて、不思議に雷が鳴るからである。勿論、何も不思議はない。空模様は怪しくつて、何うも、ごろ／＼と来さうだと思ふと、可恐いもの見たさで、悪いと知つた一方は日光、一方は甲州、兩方を、一時に覗かすには居られないからで。——鄰村で空白を磨るほどの音がすればしたで、慌しく起つて、兩方の空を窺はないでは居られない。従つて然う云ふ空合の時には雷鳴があるのだから、いつもはかつぐのに、其の時は、そんな事を言つて居る隙はなかつた。窓を開けると、こゝにも飛ぶ。下屋の屋根瓦の少し上を、すれ／＼に、晃々、ちら／＼と飛んで行く。しかし、表からは、木戸を一つ丁字形に入組んだ細い露地で、家と家と、屋根と屋根と附着いて居る處だから、珊瑚の流れは、壁、廂にしがらんで、堰かるゝと見えて、表欄干から見

たのと較べては、やゝ疎であつた。此の裏は、すぐ四谷見附の火の見櫓を見透すのだが、其の遠く廣いあたりは、日が眩しいのと、樹木に薄霧が掛つたのに紛れて、凡そ、どのくらゐまで飛ぶか、伸すか、そのほどは計られない。が、目の届くほどは、何處までも、無數に飛ぶ。處で、廂だの、屋根だのの蔭で、近い處は、表よりは、色も羽も判然とよく分る。上は大屋根の廂ぐらゐで、下は、然れば丁ど露地裏の共同水道の處に、よその女房さんが踞んで洗濯をして居たが、立つと其の頭ぐらゐ、と思ふ處を、スツ／＼と浮いて通る。

私は下へ下りた。——家内は髪を結ひに出掛けて居る。女中は久しぶりのお天氣で湯殿口に洗濯をする。……其處で、昨日穿いた泥だらけの高足駄を高々と穿いて、此の透通るやうな秋日和には宛然つままれたやうな形で、カラン／＼と戶外へ出た。が、出た咄嗟には幻が消えたやうで一疋も見えぬ。熟と瞳を定めると、其處に此處に、それ彼處に、其の數の夥しさ、下に立つたものは、赤蜻蛉の隧道を潜るのである。往來はあるが、誰も氣がつかないらしい。一つ二つは却つてこぼれて目に着かう。月夜の星は數へられない。慙くまでの赤蜻蛉の大なる群が思ひ立つた場所から志す處へ移らうとするのである。おのづから智慧も力も備はつて、陽の面に、隱形陰體の魔法を使つて、人目にかくれ忍びつゝ、何處へか通つて行くかとも想はれた。先刻、もしも、二階の欄干で、思ひがけず目に着いた唯一匹がないとすると、私は此の幾千萬

とも數の知れない赤蜻蛉のすべてを、全體を、まるで知らないで了つたであらう。後で、近所でも、誰一人此の素ばらしい群の風説をするものもなかつたのを思ふと、渠等は、あらゆる人の目から、ふか思議な角度に外れて、巧に逸し去つたのであらうも知れぬ。

さて足駄を引摺つて、つい、四角へ出て見ると、南寄の方の空に濃い集團が控へて、近づくほど幅を擴げて、一面に群りつゝ、北の方へ伸すのである。が、厚さは雑と塀の上から二階家の大屋根の空と見て、幅の廣さは何のくらゐまで漲つて居るか、殆ど見當が附かない、と言ふうちに、幾千ともなく、急ぎもせず、後れもせず、遮るものを避けながら、一つ一つがおなじやうに、二三寸づゝ、縦横に間をおいて、悠然として流れて通る。櫻の枝にも、電線にも、一寸留まるのもなければ、横にそれようとするものもない。

品 小
引返して、木戸口から露地を覗くと、羽目と羽目との間に成る。こゝには一疋も飛んで居ない。向うの水道端に、いまの女房さんが洗濯をして居る、其の上は青空で、屋根が遮らないから、スツツ晁々と矢ツ張り通るのである。「おかみさん。」私は呼んだ。「御覽なさい大層な蜻蛉です。」「へい。」と大きな返事をする、濡手を流して泳ぐやうに反つて空を視た。顔中をのこらす鼻にして、眩しさにしかめて、「今朝ツから飛んで居ますわ。」と言つた。別に珍しくもなささうに唯ついに通りに、其處等に居る、二三疋だと思ふのであらう。時に、もうやがて正午に成る。

小一時間経つて、家内が髪結さんから歸つて来た。意氣込んで話をすると——道理こそ……三光社の境内は大變な赤蜻蛉で、雨の水溜のある處へ、飛びながらすい／＼と下りるのが一杯で、上を乗越しさうで成らなかつた。それを子供たちが目筈で伏せるのが、「摘草をしたくらゐ筈に澤山。」と言ふのである。三光社の境内は、此の邊で一寸子供公園に成つて居る。私の家からさしわたし二町ばかりはある。此の様子では、其處まで一面の赤蜻蛉だ。何處を志して行くのであらう。餘りの事に、また一度外へ出た。一時を過ぎた。爾時は最う一つも見えなかつた。そして摘草ほど子供にとられたと言ふのを、何だか壇の浦のつまり／＼で、平家の公達が組伏せられ刺殺されるのを聞くやうで可哀であつた。

とに角、此の赤蜻蛉の光景は、何にたとへやうもなかつた。が、同じ年十一月のはじめ、鹽原へ行つて、畑下戸の溪流瀧の下の淵かけて、流の廣い溪河を、織るが如く敷くが如く、もみぢの盡きず、絶えず、流るゝのを見た時と、——鹽の湯の、斷崖の上の欄干に凭れて翹つた折から、夕風颯として、千仞の谷底から、瀧を空狀に、もみぢ葉を吹上げたのが周圍の林の木葉を誘つて、満山の紅の、且つ大紅玉の夕陽に映じて、かげとひなたに濃く薄く、降りかゝつたのを見た時に、前日の赤蜻蛉の群の風情を思つたのである。肝心の事を言ひおくれた。——其の日の赤蜻蛉は、残らず、一つも残らず、皆一つづつ、一つづつ

がひ、松葉につないで、天人の乗る八挺の銀の櫓の筏のやうにして飛行した。何と……同じ事を昨年も見つた。……篤志の御方は、一寸お日記を御覽を願ふ。秋の半かけて矢張り鬱々陰々として霖雨があつた。三日とは違ふまい。——九月の二十日前後に、からりと爽かにほの暖かに晴上つた朝、同じ方角から同じ方角へ、紅舷銀翼の小さな船を操りつゝ、碧瑠璃の空をきら／＼きら／＼と幾千萬艘。——家内が此の時も四谷へ髪を結ひに行つて居た。女中が洗濯をして居た。おなじ事である。其の日は歸つて来て、見附の公設市場の上かけて、お濠の上は紀の國坂へ一面の赤蜻蛉だと言つた。惜い哉。すぐにもあとを訪ねないで……晩方散歩に出て見た時は、見附にも、お濠にも、たゞ霧の立つ水の上に、それかとも思ふ影が、唯二つ、三つ。散り来る木の葉の、しばらくたゞずまふに似たのみであつた。

婦人十一題

大正十二年一月十一日

うまし、かるた會に急ぐ若き胸は、駒下駄も撒水に注る。戀の歌を想ふにつけ、夕暮の線路さへ丸木橋の心地やすらむ。松を鳴らす電車風の春着の袖を引合す急き心も風情なり。やがてぞ、内賑に門のひそめく輪飾の大玄關より、絹足袋を軽く高廊下を行く。館の奥なる夫人の、常さへ白鬘甲に眞珠を鏤めたる毛留して、鶴の膚に、孔雀の装にのみ馴れたるが、この玉の春を、分けて、と思ふに、いかに、端近の茶の室に居迎ふる姿を見れば、櫛卷の薄化粧、縞錦仙の半襟つきに、引掛帯して、入らつしやい。眞鍮の茶釜の白鳥、出居の柱に行燈掛けて、燈紅く、おでん燗酒、甘酒もあり。

——どツちが好いと云ふんですか——

——知らない——

二 月

都なる父母は歸り給ひぬ。舅姑、知らぬ客許多あり。附添ふ侍女を羞らひに辭しつゝ、新婦の衣を解くにつれ、浴室颯と白妙なす、麗しき身とともに、山に、町に、廂に、積れる雪の影も映すなり。此時、われに戻る心、しかも湯氣の裡に恍惚として、彼處に鬘甲の櫛笄の行方も覺えず、此處に鬘箱の櫛笄、我が手にさへ袖をこぼれて亂れたり。面、色染んぬ。姿見の傍は

重の花薄紅に、乳を押へたる手は白くかさなり咲く、蘭湯に開きたる此の冬牡丹。蕊に刻めるは誰が名ぞ。其の文字金色に輝くまゝに、口渴き又耳熱す。高島田の前髪に冷き刃あり、窓を貫くは簾なす氷柱にこそ。カチリと音して折つて透かしぬ。人のもし親はば、いと切めて血を逆らすじ首とや驚かん。新婦は唇に含みて微笑みぬ。思へ君……式九獻の盞よりして以來、初めて胸に通じたる甘く清き露なりしを。——見たのかい——いや、われ聞く。

三 月

浅蜩やア浅蜩の剃身——高臺の屋敷町に春寒き午後、園生に一人庭下駄を爪立つまで、手を空ざまなる美き女あり。樹々の枝に残しの雪も、ちらりと指の影して、大なる紅日に、雪は薄く紫の袂を曳く。何に憧憬るゝ人ぞ。歌をよみて其の枝の紅梅の苔を解かんとするにあらず。手鍋提ぐる意氣に激して、所帯の稽古に白魚の鰯造る也。然も目を刺すがいぢらしとして、ぬきとむるは尾なるを見よ。絲の色も、こぼれかゝる袖口も、繪の篝火に似たるかな。希くは針に傷つくことなかれ。お嬢様これめせと、乳母ならむ走り來て捧ぐるを、曰く、エプロン掛けて白魚の料理が出来ますかと。魚も活くべし。手首の白さ更に可三寸。

品 小

舳に肌ぬぎの亂れ姿、歌妓がさす手ひく手に、おくりの舷の流れつゝ、花見船漕ぎつる。土手の霞暮れんとして、櫻あかるき三めぐりあたり、新しき五大力の舷の高くすぐれたるに、衣紋も帯も差向へる、二人の婦ありけり、一人は高尙に圓鬚ゆひ、一人は島田艶也。眉白き船頭の漕ぐにまかせ、蒔繪の調度に、待乳山の影を籠めて、三日月を載せたる風情、敷波の花の色、龍の都に行く如し。人も酒も狂へる折から、ふと打ちすましたる鼓ぞ冴ゆる。いざ、金銀の扇、立つて舞ふよと見れば、圓鬚の婦、なよやかにすらりと浮きて、年下の島田の鬢のほつれを、透彫の櫛に、搔撫でつ。心憎し。鐘の音の傳ふらく、此の船、深川の木場に歸る。

五月雨の茅屋雫して、じとくと沙汰するは、山の上の古社、杉の森の下闇に、夜なく黒髪影あり。呪詛の女と言ふ。かたの如き悪少年、化鳥を狙ふ犬となりて、野茨亂れし岨道を要して待つ。夢か、青葉の衣、つゝじの帯の若き姿、雲暗き山の端より月かすかに近づくを、獲ものよ、虐げんとすれば、其の首の長きよ、口は耳まで裂けて、白き蛇の紅さしたる面ぞ。キヤツと叫びて倒るゝを、見向きもやらず通りしは、優にやさしき人の、黄楊の櫛を唇に銜へしなり。うらぶれし良家の女の、父の病氣なるに、夜半に醫を乞へる道なりけり。此の護身の術や、魔法つかひの教にあらず、なき母の記念なりきとぞ。卯の花の里の温泉の夜話。

裾野の煙長く靡き、小松原の靄廣く流れて、夕暮の暮更に富士山に開く時、其の白妙を仰ぐなる前髪清き夫人あり。肘を軽く窓に凭る。螢一つ、すらりと反對の窓より入りて、細き影を捲くと見る間に、汗埃の中にして、忽ち水に玉敷ける、淺葱、藍、白群の涼しき草の影、床かけてクシヨンに描かれしは、螢の衝と其の裳に忍び棲に入りて、上の薄衣と、長襦袢の間を照して、模様の花に、葉に、莖に、裏透きてすらりと移るにこそあれ。あゝ、下じめよ、帯よ、消えて又光る影、乳に沁むなり。此の君、其の肌、確に雪。ソロモンと榮華を競へりとか、白百合の花も恥づべき哉。否、恥らへるは夫人なり。衣紋明るく心着きけむ、銀に青海波の扇子を半、螢より先づハツと面を蔽へるに、風さらりと戦ぎつゝ、光は袖口よりはらりとこぼれて、窓外の森に尙美しき影をぞ曳きたる。もし魂の拔出でたらんか、これ一顆の碧眞珠に、露草を鐫れるなるべし。此の人もし仇あらば、皆刃を取つて敵を討たん。靈山の氣、汽車に迫れり。——山北——山

其の邊の公園に廣き池あり。時よし、風よしとて、町々より納涼の人数で集ふ。童たち酸漿提灯かざしもしつ。水の灯美しき夜なりき。汀に小き船を浮べて、水茶屋の小奴莞爾やかに竹棹を構へたり。うら若き母に伴はれし幼兒の、他の乗るに、われもとて肯かざりしに、私は身弱くて、恁ばかりの船にも眩暈するに、荒波の海としならばとにかくも、池の水に伏さんこと、人目恥かしければ得乗らじとよ。強ひてとならば一人行け、心は船を守るべし。船にな立ちそ、舷にな片寄りそ。頼むは少き船頭衆とて、さみしく手をはなち給ひしが、早や其の姿へだたりて、残の杜若裳に白く、蘆のそよぎ羅の胸に通ふと、星の影に見るまゝに、兒は池のたゞ中に、母を呼びて、わつと泣きぬ。——盂蘭盆の墓詣に、其のなき母を偲びつゝ、涙ぐみたる娘あり。あかの水の雫ならで、桔梗に露を置添へつ、うき世の波を思ふならずや。

若きものの、山深く暑を避けたるが、雲の峰高き巖の根に、嘉魚釣りて一人居たりけり。若き薄

の氣一脈、蘭の香を吹きて、床しき羅の影の身に沁むと覺えしは、年經る庄屋の森を出でて、背後なる岨道を通る人の、ふとイみて見越したんなる。無地かと思ふ紺の透綾に、緋縮緬の長襦袢、小柳縹子の帯しめて、袴の堅きまで慎ましきにも、姿のなやかさ立ちまさり、打微笑みたる口紅さへ、常夏の花の化身に似たるかな。斷崖の清水に龍女の廟あり。われは浦島の子か、姫の靈ぞと見しが、やがて知んぬ。なか／＼に時のはやりに染まぬ服装の、却つて鶯帶蟬羅にして、裳羽衣の風情をなせる、その農家の姉娘の、里の伯母前を訪ふなりしを。

洪水は急なりけり。背戸續きの寮屋に、茅屋に侘ぶる風情とて、家の娘一人居たる午すぎよ。驚破と、母屋より許嫁の兄ぶんの駈けつくるに、讀みさしたる書伏せもあへず抱きて立てる、葉の萩も濡縁に枝を浪打ちて、早や徒渉すべからず、あり合はす盥の中に扶けのせつゝ、盪して逃るゝ。庭はさながら花野也。桔梗、刈萱、女郎花、我亦紅、瑠璃に咲ける朝顔も、弱竹のまゝ漕惱めば、紫と、黄と、薄藍と、浮きまどひ、沈み靡く。濁れる水も色を添へて極彩色の金屏風を渡るが如く、秋草模様に露敷く袖は、丈高き紫苑の梢を乗りて、驚き飛ぶ蝶とともに漾へり。山影ながら颯と野分して、芙蓉に咽ぶ浪の繁吹に、小き輪の虹が立つ——あら、綺麗だこと——そ

れどころかい、馬鹿を言へ——男の胸は盥に引添ひて泳ぐにこそ。おゝい、おゝい、母屋に集へる人数の目には、其の盥たゞ一枚大なる睡蓮の白き花に、うつくしき瞳ありて、すら／＼と流れ寄りきとか。

十月

藍あさき宵の空、薄月の夜に入りて、雲は胡粉を流し、一むら雨廂を斜に、野路の刈萱に靡きつゝ、背戸の女郎花は露まさる色に出で、茂れる萩は月影を抱けり。此の時、草の家の窓に立ちて、秋深くものを思ふ女。世にやくねれる、戀にや惱める、避暑の頃よりして未だ都に歸らざる、あこがれの瞳をなぶりて、風の音信るともあらず、はら／＼と、櫛の葉、柿の葉、銀杏の葉、見つゝ指の撓へるは、待人の日を算ふるや。爪紅を其のまゝに、其の木の葉一枚づゝ、君來よ、と染むるにや。豈ひとり居に堪ふべけんや。袖笠かつぎもやらず、枝折戸を立出づる。山の根の野菊、水に似て、渡る棲さき亂れたり。曼珠沙華ひら／＼と、其の左右に燃えたるを、あれは狐か、と見し夜戻りの山法師。稲束を盾に、や、御寮、いづくへぞ、とそゞろに問へば、莞爾して、さみしいから、田圃の案山子に、杯をさしに行くんですよ。

十一月

朝の雲吹散りたり。風風ぎぬ。藪垣なる藤豆の、莢も實も、午の影紫にして、谷を繞る流あり。穂たで露草みだれ伏す。此の水やがて里の廓の白粉に淀むと雖も、此のあたり、寺々の松の音にせゝらぎて、殘菊の筆潔し。十七ばかりのもの洗ふ女、帯細く腰弱く、盥を抱へて來つ。汀に裂けし芭蕉の葉、日ざしに翳す扇と成らずや。頬も腕も汗ばみたる、袖引き結へる古襦は、枯野の草に褪せたれども、うら若き血は燃えんとす。折から櫛の眞紅なるが、其のまゝの肌着に映りて、竹堰の脛は霜を敷く、あゝ、冷たからん。笥の水を受くると、嫁茶の莖一つ摘みつゝ、優しき人の心かな、何のすさみにもあらで、其の盥にさしけるが、引とき衣の藍に榮えて、嫁茶の浅葱色冴えしを、茶晶の日南に憩ひて、恍惚と見たる旅の男。うかと聲を掛けて、棟あちこち、伽藍の中に、鬼子母神の御寺はと聞けば、えゝ、紅い石榴の御堂でせうと、臉に色を染めながら。

小品

くさびら

大正十二年六月

御馳走には季春がまだ早い、たゞ見るだけなら何時でも構はない。食料に成る成らないは別として、今頃の梅雨には種々の茸がよき／＼と野山に生える。

野山に、よき／＼、と言つて、あの形を想ふと、何となく滑稽けてきこえて、大分安直に扱ふやうだけれども、飛んでもない事、あれでなか／＼凄味がある。

先年、麴町の土手三番町の堀端寄に住んだ借家は、太い濕氣で、遁出すやうに引越した事がある。一體三間ばかりの棟割長屋に、八疊も、京間で廣々として、柱に唐草彫の釘かくしなどがあらうと言ふ、書院づくりの一座敷を、無理に附着けて、屋賃をお邸なみにしたのであるから、天井は高いが、床は低い。——大掃除の時に、床板を剝すと、下は水溜に成つて居て、溢れたのがちよろ／＼と蜘蛛手に走つたのだから可憐い。此の邸……いや此の座敷へ茸が出た。

生えた……などと尋常な事は言ふまい。「出た」とおぼけらしく話したい。五月雨のしと／＼とする時分、家内が朝の間、掃除をする時、縁のあたりで氣が着くと、疊のへりを横縦にすつと一列に並んで、小さい雨垂に足の生えたやうなものの群り出たのを、微にしては寸法が長し、と横に透すと、まあ、怪しからぬ、悉く茸であつた。細い針ほどな侏儒が、一つ／＼と、歩行き出しさうな氣勢がある。吃驚して、煮湯で雑巾を絞つて、よく拭つて、先づ退治た。が、暮方の掃除に視ると、同じやうに、ずらりと並んで揃つて出て居た。此が茸なればこそ、目もまはさ

ずに、じつと堪へて私には話さずに秘して居た。私が臆病だからである。

何しろ梅雨あけ早々に其家は引越した。が、……私とはあとで聞いて身ぶるひした。むかしは加州山中の温泉宿に、住居の大圍爐裡に、灰の中から、笠のかこみ一尺ばかりの眞黒な茸が三本づつ、續けて五日も生えた、と言ふのが、手近な三州奇談に出て居る。家族は一統、加持よ祈禱よ、と青くなつて騒いだが、私に似ない其主人、膽が据つて聊かも騒がない。茸だから生えると言つて、むしつては捨て、むしつては捨てたので、やがて妖は留んで、一家に何事の觸りもなかつた——鐵心銷怪。偉い……と其の編者は賞めて居る。私は笑はれても仕方がない。成程、其の八疊に轉寢をすると、とろりとすると下腹がチクリと疼んだ。針のやうな茸が洒落に突いたのであらうと思つて、もう一度身ぶるひすると同時に、何うやら其の茸が、一づ／＼芥子ほどの目を剝いて、ぺろりと舌を出して、店賃の安値いのを嘲笑つて居たやうで、少々癩だが、しかし可笑い。可笑いが、氣味が悪い。

品 小
能の狂言に「茸」がある。——山家あたりに住むものが、邸中、座敷まで大な茸が幾つともな
く出て祟るのに困じて、大峰葛城を渡つた知音の山伏を頼んで來ると、「それ、山伏と言つば山伏
なり、何と殊勝なか。」と先づ威張つて、兜巾を傾け、いらたかの數珠を揉みに揉んで、祈るほど
に、祈るほどに、祈れば祈るほど、大な茸の、あれ／＼思ひなしか、目鼻手足のやうなものを見

えるのが、おびたゞしく出て、したゝか仇をなし、引着いて惱ませる。「いで、此上は、茄子の印を結んで掛け、いろはにほへと祈るならば、などか奇特のなかるべき、などか、ちりぬるをわかんなれ。」と祈る時、傘を半びらきにした、中にも毒々しい魔形なのが、二の松へ這つて出る。此にぎよつとしながら、いま一祈り祈りかけると、その茸、傘を開いてスツクと立ち、躍りかゝつて、「ゆるせ、」と逃げ廻る山伏を、「取つて噛まう、取つて噛まう。」と脅すのである。——彼等を軽んずる人間に對して、茸のために氣を吐いたものである。臆病な癖に私はすぎだ。

そこで茸の扮装は、縞の着附、括袴、腰帶、脚絆で、見徳、嘯吹、上髻の面を被る。その傘の逸もつが、鬼頭巾で武悪の面ださうである。岩茸、灰茸、鳶茸、坊主茸の類であらう。いづれも、塗笠、檜笠、菅笠、坊主笠を被つて出ると言ふ。……此の狂言はまだ見ないが、古寺の廣室の雨、孤屋の霧のたそがれを舞臺にして、ずらりと此の形で並んだら、並んだだけで、おもしろからう。……中に、紅絹の切に、白い顔の目ばかり出して袂折笠の姿がある。紅茸らしい。あの露を帯びた色は、幽に光をさへ放つて、たとへば、妖女の艶がある。庭に植ゑたいくらゐに思ふ。食べるのぢやあないから——茸よ、取つて噛むなよ、取つて噛むなよ。……

祭のこと

大正十二年八月

いまでも中六番町の魚屋へ行つて歸つた、家内の話だが、其家の女房が負ぶをして居る、誕生を濟ましたばかりの嬰兒に「みいちゃん、お祭は、——お祭は。」と聞くと、小指の先ほどな、小さな鼻を撮んぢやあ、莞爾々々、鼻を撮んぢやあ莞爾々々する。

山王様のお渡りの、猿田彦命の面を覺えたのである。それから、「お獅子は？ みいちゃん。」と聞くと、引掛けて居る半纏の兩袖を引張つて、取つてはかぶり、取つてはかぶりしたさうである。いや、お祭は嬉しいものだ。——今日は梅雨の雨が、朝から降つて薄ら寒い。……

品 小
潮は其の時々變るのであらうが、祭の夜は、思出して、何年にも、いつも暗いやうに思はれる。時候が丁ど梅雨にかゝるから、雨の降らない年の、月ある頃でも、曇るのであらう。また、大通りの絹張の繪行燈、横町々々の紅い軒提灯も、祭禮の夜は暗の方が相應しい。月の紅提灯は納涼に成る。それから、空の冴えた萬燈は、霜のお會式を思はせる。

日中の暑さに、酒は浴びたり、血は煮える。御神輿かつぎは、人の氣競がもの凄しい。五十人、八十人、百人、何人、ひとかたまりの若い衆の顔は、目が据り、色は血走り、唇は青く成つて、前向き、横向き、うしろ向。一つにでつちて、葡萄の房に一粒づゝ目口鼻を描いたやうで、手足の筋は凌霄花の緋を敷く。

御神輿の柱の、飾の珊瑚が燦と咲き、銀の鈴が鳴据つて、鳳凰の翼、鶏のとさかが、颯と汗ばむと、彼方此方に揉む状は團扇の風、手の波に、ゆら／＼と乗つて揺れ、すらりと大地を斜に流るゝかとするれば、千本の腕の帆柱に、衝と軒の上へまつすぐに舞上る。……

わつしよ、わつしよ、わつしよ、わつしよ。

もう此時は、人が御神輿を擔ぐのではない。龍頭また鶴首にして、碧丹、藍紅を彩れる樓船なす御神輿の方が、います靈ととも、人の波を思ふまゝ釣るのである。

御神輿は行きたい方へ行き、めぐりたい方へめぐる。殆ど人間業ではない。

三社様の御神輿が、芳原を渡つた時であつた。仲の町で、或引手茶屋の女房の、久しく煩つて居たのが、祭の景氣に漸と起きて、微に嬉しさうに、しかし悄乎と店先にゐんだ。御神輿は、あらぬ向う側を練つて、振向きもしないで四五十分間ずつと過ぎる。まく鹽も手に持

つたのに、……あゝ、ながわづらひゆる店も寂れた、……小兒の時から私も最良、あちらでも御最良の御神輿も見棄てて行くか、と肩を落して、ほろりとしつゝ見送ると、地震が揺つて地が動き、町が此方へ傾いたやうに、わつと起る聲と齊しく、御神輿は大波を打つて、どどどと打つて返して、づしんと其處の縁臺に据つた。——其の縁臺がめり込んで、地が三尺ばかり掘下つたと言ふのである。女房は即座に癒えて、軒の花が輝いた。

揃の浴衣をはじめとして、提灯の張替へをお出し置き下さい、へい、頂きに出ました。えゝ、張替をお届け申します。——軒の花を掛けます、と入かはり立ちかはる、二三日前から、もう町内は親類づきあひ。それも可い。テケテンテケテン、はや獅子が舞ひあるく。

お神樂囃子、踊屋臺、町々の山車の飾、つくりもの、人形、いけ花。造花は、櫻、牡丹、藤、つゝじ。いけ花は、あやめ、姫百合、青楓。

こゝに、おみき所と言ふのに、三寶を供へ、樽を据ゑ、緋の毛氈に青竹の埒、高張提灯、弓張をおし重ねて、積上げたほど赤々と、暑くたつて構はない。大火鉢に火がくわん／＼と熾つて、鐵瓶が、いゝ心持にフツ／＼と湯氣を立てて居る。銅壺には銚子が並んで、中には泳ぐのがある。老舗の旦那、新店の若主人、番頭どん、小僧たちも。町内の若い衆が陣取つて、將棋をさす、碁

地震このかた、誰も一睡もしたものはないのであるから。

麴町、番町の火事は、私たち鄰家二三軒が、皆跣足で逃出して、此の片側の平家の屋根から瓦が土煙を揚げて崩るゝ向側を駈抜けて、いくらか危険の少なさうな、四角を曲つた、一方が廣庭を圍んだ黒板塀で、向側が平家の押潰れても、一二尺の距離はあらう、其の黒塀に眞俯向けに取り絶つた。……手のまだ離れない中に、さしわたし一町とは離れない中六番町から黒煙を揚げたのがはじまりである。——同時に、警鐘を亂打した。が、愠くまでの激震に、四谷見附の、高い、あの、火の頂邊に生きて人があらうとは思はれない。私たちは、雲の底で、天が摺半鐘を打つ、と思つて戦慄した。——「水が出ない、水道が留まつた」と言ふ聲が、其處に一團に成つて、足と地とともに震へる私たちの耳を貫いた。息つきに水を求めたが、火の注意に水道の如何を試みた誰かが、早速に警告したのであらう。夢中で誰とも覺えて居ない。其の間近な火は樹に隠れ、棟に伏つて、却つて、斜の空はるかに、一柱の炎が火を捲いて眞直に立つた。續いて、地軸も碎くるかと思ふ凄じい爆音が聞えた。婦たちの、あつと言つて地に領伏したのも少くない。その時、横町を縦に見通しの眞空へ更に黒煙が舞起つて、北東の一天が一寸を餘さず眞暗に代ると、忽ち、どゞどゞどゞどゞどゞと言ふ、陰々たる律を帯びた重く凄い、殆ど形容の出来ない音が響いて、炎の筋を腕らした可憐い黒雲が、更に煙の中を波がしらの立つ如く、烈風に駆廻る！……あゝ迦

具土の神の鐵車を驅つて大都會を焼亡す車輪の轟くかと疑はれた。——「あれは何の音でせうか。」——「然やう何の音でせうな。」近鄰の人の分別だけでは足りない。其處に居合はせた禿頭白髯の、見も知らない老紳士に聞く私の聲も震へれば、老紳士の唇の色も、尾花の中に、たとへば、なめくぢの這ふ如く土氣色に變つて居た。

——前のは砲兵工廠の焚けた時で、續いて、日本橋本町に軒を連ねた藥問屋の藥ぐらが破裂したと知つたのは、五六日も過ぎての事。……當時のもの可恐さは、われ等の乗漾ふ地の底から、火焰を噴くかと疑はれたほどである。

が、銀座、日本橋をはじめ、深川、本所、淺草などの、一時に八ヶ所、九ヶ所、十幾ヶ所から火の手の上つたのに較べれば、山の手は扱て何でもなもののやうである、が、それは後に言ふ事で、……地震とともに焼出した中六番町の火が……いま言つた、三日の眞夜中に及んで、約二十六時間。尙ほ熾に燃えたのであつた。

しかし、其の當時、風は荒かつたが、眞南から吹いたので、聊か身がつてのやうではあるけれども、町内は風上だ。差あたり、火に襲はるゝ懼はない。其處で各自が、かの親不知、子不知の浪を、巖穴へ逃げる状で、衝と入つては颯と出つゝ、勝手許、居室などの火を消して、用心して、それに第一たしなんだのは、足袋と穿もので、驚破、逃出すと言ふ時に、わが家への出入りにも、

硝子、瀬戸ものの缺片、折釘で怪我をしない注意であつた。そのうち、隙を見て、縁臺に、薄べりなどを持出した。何が何うあらうとも、今夜は戸外にあかす覺悟して、まだ湯にも水にもありつけないが、吻と息をついた處へ――

前日みそか、阿波の徳島から出京した、濱野英二さんが駈けつけた。英語の教鞭を取る、神田三崎町の第五中學へ開校式に臨んだが、小使が一人梁に挫がれたのと摺れ違ひに逃出したと言ふのである。

あはれ、此こそ今度の震災のために、人の死を聞いたはじめであつた。――たゞ此にさへ、一同は顔を見合はせた。

内の女中の情で。……敢て女中の情と言ふ。――此の際、臺所から葡萄酒を二罍持出すと言ふに到つては生命がけである。けちに貯へた正宗は臺所へ皆流れた。葡萄酒は安値いのだが、厚意は高價い。たゞし人目がある。大道へ持出して、一杯でもあるまいから、土間へ入つて、框に堆く崩れつんだ壁土の中に、あれを見よ、葦の生えたやうな瓶から、逃腰で、茶碗で呷つた。言ふべき場合ではないけれども、まことに天の美祿である。家内も一口した。不斷一滴も嗜まな、一軒となりの齒科の白井さんも、白い仕事着のまゝで傾けた。これを二碗と傾けた鄰家の辻井さんは向う願卷膚脱ぎの元氣になつて、「さあ、こい、もう一度

揺つて見る。」と胸を叩いた。

婦たちは怨んだ。が、結局此がために勢づいて、莫産縁臺を引摺り、とにかく黒堀について、折曲つて、我家々々の向うまで取つて返す事が出来た。

襖障子が縦横に入亂れ、雜式家具の狼藉として、化性の如く、地の震ふたびに立ち跳る、誰も居ない、我が二階家を、狭い町の、正面に熟と見て、堀越のよその立樹を廂に、櫻のわくら葉のばら／＼と落ちかゝるにさへ、婦は聲を發て、男はひやりと肝を冷して居るのであつた。が、も音、人聲さへ定かには聞取れず、たまに駈る自動車の響も、燃え熾る火の音に紛れつゝ、日も雲も次第々々に黄昏れた。地震も、小やみらしいので、風上とは言ひながら、模様は何うかと、中六の廣通りの市ヶ谷近い十字街へ出て見ると、一度やゝ安心をしただけに、口も利けず、一驚を喫した。

半町ばかり目の前を、火の燃通る状は、眞赤な大川の流るゝやうで、然も凧げた風が北に變つて、一旦九段上へ焼け抜けたのが、燃返つて、然も低地から、高臺へ、家々の大巖に激して、逆流して居たのである。

品 小
もはや、……少々なりとも荷もつをと、きよと／＼と引返した。が、僅にたのみなのは、火先が僅ばかり、斜にふれて、下、中、上の番町を、南はづれに、東へ……五番町の方へ燃進む事で

あつた。

火の雲をかくした櫻の樹立も、黒塀も暗く成つた。舊曆七月二十一日ばかりの宵闇に、覺束な提灯の灯一つ二つ、婦たちは落人が夜鷹蕎麥の荷に踞んだ形で、溝端で、のどに支へる茶漬を流した。誰ひとり晝食を済まして居なかつたのである。

火を見るな、火を見るな、で、私たちは、すぐ其の傍の四角にゐんで、突進しに天を浸す炎の波に、人心地もなく酔つて居た。

時々、魔の腕のやうな眞黒な煙が、偉なる拳をかためて、世を打ちひしぐ如くむくむく立つ。其處だけ、火が消えかゝり、下火に成るのだらうと、思つたのは空頼みで「あゝ、悪いな、あれが不可え。……火の中へふすぶつた煙の立つのは新しく燃えついたんで……」と通りかゝりの消防夫が言つて通つた——

（——小稿……まだ持出しの荷も解かず、框をすぐの小間で……こゝを草する時……）
「何うしました。」

と、はぎれのいゝ聲を掛けて、水上さんが、格子へ立つた。私は、家内と駈出して、ともに顔を見て手を握つた。——悉い事は預るが、水上さんは、先月三十一日に、鎌倉稻瀬川の別荘に遊

んだのである。別荘は潰れた。家族の一人は下敷に成んなすつた。が、無事だつたのである。——途中で出あつたと言つて、吉井勇さんが一所に見えた。これは、四谷に居て無事だつた。が、家の裏の竹藪に蚊帳を釣つて難を避けたのださうである——）

——前のを續ける。……

其處へ——

「如何。」

と聲を掛けた一人があつた。……可憐い聲だ、と見ると、尊さんである。

「やあ、御無事で。」

尊さんは、手拭を喧嘩被り、白地の浴衣の尻端折で、いま逃出したと言ふ形だが、手を曳いて……は居なかつた。引添つて、手拭を吉原かぶり、艶な蹴出しの袴端折をした、前髪のかゝり、鬢のおくれ毛、明眸皓齒の婦人がある。しつかりした、さかり場の女中らしいのが、もう一人後についてゐる。

品 小

執筆の都合上、赤坂の某旅館に滞在した、家は一堪りもなく潰れた。——不思議に窓の空所へ橋に掛つた襖を傳つて、上りざまに屋根へ出て、それから山王様の山へ逃上つたが、其處も火に

追はれて逃るゝ途中、おなじ難に逢つて焼出されたため、道傍に落ちて居た、此の美人を拾つて来たのださうである。

正面の二階の障子は紅である。

黒塀の、溝端の莫蔭へ、然も疲れたやうに、ほつと、くの字に膝をついて、婦連がいたはつて汲んで出した、ぬるま湯で、軽く胸をさすつた。その婦の風情は媚かしい。

やがて、合方もなしに、此の落人は、すぐ横町の有鳥家へ入つた。たゞで通す關所ではないけれど、下六町内だから大目に見て置く。

次手だから話さう。此と對をなすのは淺草の万ちやんである。お京さんが、圓鬚の姉さんかぶり、三歳のあかちやんを十の字に背中引背負ひ、たびはだし。万ちやんの方は振分の荷を肩に、わらぢ穿で、雨のやうな火の粉の中を上野をさして落ちて行くと、採返す群集が、
「似合ひます。」

と湧いた。ひやかしたのではない、まつたく同情を表したので、
「いたはしいナ、畜生。」

と言つたと言ふ——眞個か知らん、いや、嘘でない。此は私の内へ来て（久保勘）と染めた印半纏で、脚絆の片あしを擧げながら、冷酒のいきづきで御當人の直話なのである。

「何うなすつて。」

少時すると、うしろへ悠然として立つた女性があつた。

「あゝ……いままも風説をして、案じて居ました。お住居は澁谷だが、あなたは下町へお出掛けが
ちだから。」

と私は息をついて言つた、八千代さんが来たのである、四谷坂町の小山内さん（阪地滞在中）の留守見舞に、澁谷から出て來なすつたと言ふ。……御主人の女の弟子が、提灯を持つて連立つた。八千代さんは、一寸薄化粧か何かで、髪も亂さず、杖を片手に、しやんと、きちんとしたものであつた。

「御主人は？」

「……冷蔵庫に、紅茶があるだらう……なんか言つて、呆れつ了ひますわ。」

是は偉い！……晝伯の自若たるにも我折つた。が、御當人の、すまして、これから又澁谷まで火を潛つて歸ると言ふには舌を卷いた。

「雨戸をおしめに成らんと不可ません。些と火の粉が見えて來ました。あれ、屋根の上を飛びま

す。……あれがお二階へ入りますと、まったく危うございますで、ございますよ。」
と餘所で……経験のある、近所の産婆さんが注意をされた。

實は、炎に飽いて、炎に背いて、此の火たとひ家を焚くとも、せめて清しき月出でよ、と祈れるかひに、天の水晶宮の棟は櫻の葉の中に顯はれて、朱を塗つたやうな二階の障子が、いま其の影にやゝ薄れて、凄くも優しい、威あつて、美しい、薄桃色に成ると同時に、中天に聳えた番町小學校の鐵柱の、火柱の如く見えたのさへ、ふと紫にかはつたので、消すに水のない劫火は、月の雫が冷すのであらう。火勢は衰へたやうに思つて、微に慰められて居た處であつたのに——
私は途方にくれた。——成程ちら／＼と、……

「ながれ星だ。」

「いや、火の粉だ。」

空を飛ぶ——火事の激しさに紛れた。が、地震が可恐いたため町にうろついて居るのである。二階へ上るのは、いのち懸でなければ成らない。私は意氣地なしの臆病の第一人である。然うかと
言つて、焚えても構ひませんと言はれた義理ではない。

濱野さんは、其の元園町の下宿の様子を見に行つて居た。——氣の毒にも、其の宿では澤山の書籍と衣類とを焚いた。

家内と二人で、——飛込まうとするのを視て、

「私がつめてあげます。お待ちなさい。」

白井さんが懐中電燈をキラリと點けて、さう言つて下すつた。私は口吃しつゝ頭を下げた。

「俺も一番。」

で、來合はせた馴染の床屋の親方が一所に入つた。

白井さんの姿は、火よりも月に照らされて、正面の縁に立つて、雨戸は一枚づゝがら／＼と閉つて行く。

此の勢に乗つて、私は夢中で駆上つて、懐中電燈の燈を借りて、戸袋の棚から、觀世音の塑像を一體、懐中し、机の下を、壁土の中を探つて、なき父が彫つてくれた、私の眞鍮の迷子札を小さな硯の蓋にはめ込んで、大切にされたのを、幸ひに拾つて、これを袂にした。

私たちは、其から、御所前の廣場を志して立退くの間に間はなかつた。火は、尾の二筋に裂けた、燃ゆる大蛇の兩岐の尾の如く、一筋は前のまゝ五番町へ向ひ、一筋は、別に麴町の大通を包んで、此の火の手が襲ひ近いたからである。

「はぐれては不可い。」

「荷を棄てても手を取るやうに。」

口々に言ひ交して、寂然とした道ながら、往來の慌しい町を、白井さんの家族ともろともに立退いた。

「泉さんですか。」

「はい。」

「荷もつを持つて上げませう。」

おなじむきに連立つた學生の方が、大方居まはりで見知越であつたらう。言ふより早く引擔いで下すつた。

私は、其の好意に感謝しながら、手に持ちおもりのした慾を恥ぢて、やせた杖をついて、うつむいて歩行き出した。

横町の道の兩側は、荷と人と、兩側二列の人のたゞずまひである。私たちより、もつと火に近いのが先んじて此の町内へ避難したので、……皆茫然として火の手を見て居る。赤い額、蒼い頬、辛うじて煙を拂つた絲のやうな残月と、火と炎の雲と、埃のもやと、……其の間を地上に綴つて、住める人もないやうな家々の籬に、朝顔の蕾は露も乾いて萎れつゝ、おしろいの花は、緋は燃え、白きは霧を吐いて咲いて居た。公園の廣場は、既に幾萬の人で滿ちて居た。私たちは、其の外側の濠に向つた道傍に、やうや

う地のまゝの蓆を得た。

「お邪魔をいたします。」

「いゝえ、お互様。」

「御無事で。」

「あなたも御無事で。」

つい、鄰近に居た十四五人の、殆ど十二三人が婦人の一家は、淺草から火に追はれ、火に追はれて、こゝに息を吐いたさうである。

見ると……見渡すと……東南に、芝、品川あたりと思ふあたりから、北に千住淺草と思ふあたりまで、此の大都の三面を弧に包んで、一面の火の天である。中を縫ひつゝ、渦を重ねて、燃上つて居るのは、われらの借家に寄せつゝある炎であつた。

尾籠ながら、私はハタと小用に困つた。辻便所も何にもない。家内が才覺して、此の避難場に近い、四谷の髪結さんの許をたよつて、人を分け、荷を避けつゝ辿つて行く。……ずぬぶん露地を入組んだ裏屋だから、恐るゝ、それでも、崩れ瓦の上を踏んで行きつくと、戸は開いたけれども、中に人氣は更がない。おなじく難を避けて居るのであつた。

「さあ、此方へ。」

馴染がひに、家内が茶の間へ導いた。

「どうも恐縮です。」

と、うつかり言つて、挨拶して、私たちは顔を見て苦笑した。手を淨めようとすると、白濁りでぬら／＼する。

「大丈夫よ——かみゆひさんは、きれいで、それは消毒が入つて居るんですから。」
私は、とる帽もなしに、一禮して感佩した。

夜が白んで、もう大釜の湯の接待をして居る處がある。

この歸途に、公園の木の下で、小枝に首をうなだれた、洋傘を疊んだばかり、バスケット一つ持たない、薄色の服を着けた、中年の華奢な西洋婦人を視た。——紙づつみの鹽煎餅と、夏蜜柑を持つて、立寄つて、言も通ぜず慰めた人がある。私は、人のあはれと、人の情に涙ぐんだ——今も泣かる。

二日——此の日正午のころ、麴町の火は一度消えた。立派に消口を取つたのを見届けた人があつて、もう大丈夫と言ふ端に、待構へたのが皆歸支度をする。家内も風呂敷包を提げて駆け戻つた。女中も一荷背負つてくれようとする處を、其處が急所だと消口を取つた處から、再び猛然として煤のやうな煙が黒焦げに舞上つた。渦も大い。幅も廣い。尾と頭を以つて撃つた炎の大蛇は、黒蛇に變じて剩へ洞中を蛇らして家々を巻きはじめたのである。それから更に燃え續け、焚け擴がりつゝ、砥め近づく。

一度内へ入つて、神棚と、せめて、一間だけでも、玄關の三疊の土を拂つた家内が、又此の野天へ逃戻つた。私たちがかりでない。——皆もう半ば自棄に成つた。

もの凄いと云つては、濱野さんが、家内と一所に何か罐詰のものでもあるまいかと、四谷通へ夜に入つて出向いた時だつた。……裏町、横通りも、物音ひとつも聞えないで、静まり返つた中に、彼方此方の窓から、どしん／＼と戸外へ荷物を投げて居る。火は此處の方が却つて押つ／＼まされたやうに激しく見えた。灯一つない眞暗な中に、町を歩行くものと言つては、まだ八時と言ふのに、殆ど二人のほかはなかつたと言ふ。

罐詰どころか、蠟燭も、燐寸もない。

通りかゝつた見知越の、みうらと言ふ書店の厚意で、莫菴を二枚と、番傘を借りて、砂の吹きまはす中を這々の體で歸つて來た。

で、何につけても、殆ど寝でもするやうに、疲れて倒れて寝たのであつた。

却説——その白井さんの四歳に成る男の兒の、「おうちへ歸らうよ、歸らうよ。」と言つて、う

ら若い母さんとともに、私たちの胸を疼ませたのも、その母さんの末の妹の十一二に成るのが、一生懸命に學校用の革靴一つ膝に抱いて、少女のお伽の繪本を開けて、「何です。こんな處で。」と、叱られて、おとなしくたゝんで、ほろりとさせたのも、宵の間で。……今はもう死んだやうに皆睡つた。――

深夜。

二時を過ぎてても鶏の聲も聞えない。鳴かないのではあるまい。燃え近づく火の、ぱち／＼、ぐわう／＼どツと鳴る音に紛るゝのであらう。唯此時、大路を時に響いたのは、肅然たる騎馬のひづめの音である。火のあかりに映るのは騎士の直劍の影である。二人三人づゝ、いづくへ行くとも知らず、いづくから來るとも分かず、とぼ／＼した女と男と、女と男と、影のやうに辿ひ徬徉ふ。

私はじつとして、又たぐひとへに月影を待つた。

白井さんの家族が四人、――主人はまだ焼けない家を守つてこゝにはみえない――私たちと、……濱野さんは八千代さんが折紙をつけた、いゝ男たさうだが、仕方がない。公園の圍の草叢を枕にして、うちの女中と一つ毛布にくるまつた。これに鄰つて、あの床屋子が、子供弟子づれで、仰向けに倒れて居る。僅に一坪たらずの處へ、荷を左右に積んで、此の人数である。もの干棹に

さしかけの莫藪の、しのぎをもれて、外にあふれた人たちには、傘をさしかけて夜露を防いだ。

が、夜風も、白露も、皆夢である。其の風は黒く、其の露も赤からう。

唯、こゝに、低い草叢の内側に、露とともに次第に消え行く、提灯の中に、ほの白く幽に見えて、一張の天幕があつた。――晝間赤い旗が立つて居た。此の旗が音もなく北の方へ斜に靡く。

何處か大商店の避難した……其の店員たちが交代に貨物の番をするらしくて、暮れ方には七三の髪で、眞白で、この中で友染模様の派手な單衣を着た、女優まがひの女店員二三人の姿が見えた。

――其の天幕の中で、此の深更に、忽ち笛を吹くやうな、鳥の唄ふやうな聲が立つた。

「……泊つて行けよ、泊つて行けよ。」

「可厭よ、可厭よ、可厭よう。」

聲を殺して、

「あれ、おほ／＼。」

やがて接吻の音がした。天幕にほんのりとあかみが潮した。が、やがて暗く成つて、もやに沈むやうに消えた。魔の所業ではない、人間の舉動である。

品 小
私は此を、難ずるのでも、嘲けるのでもない。況や決して羨むのではない。寧ろ其の勇氣を稱ふるのであつた。

天幕が消えると、二十二日の月は幽に煙を離れた。が、向う土手の松も照らさず、此の莫蔭の
廂にも漏れず、煙を開いたかと思ふと、又閉される。下へ、下へ、煙を押し、押分けて、松の
梢にかゝるとすると、忽ち又煙が、空へ、空へとぼる。斜面の玉女が咽ぶやうで、惱ましく、
息ぐるしさうであつた。

衣紋を細く、圓鬚を、おくれ毛のまゝ、ブリキの罐に枕して、緊乎と、白井さんの若い母さん
が胸に抱いた幼児が、怯えたやうに、海軍服でひよつくりと起きると、ものを熟と視て、みつめ
て、むくりと半ば起きたが、小さい娘さんの胸の上へ乗つて、乗ると泣つて、ころりと依にころ
がつて、すや／＼と其のまゝ寝た。

私は膝をついて總毛立つた。

唯今、寝おびれた幼の、熟と視たものに目を遣ると、狼とも、虎とも、鬼とも、魔とも分ら
ない、凄じい面が、ずらりと並んだ。……いづれも差置いた荷の恰好が異類異形の相を顯したの
である。

最も間近かつたのを、よく見た。が、白い風呂敷の裂けめは、四角にクハツとあいて、しかも
曲めたる口である。結目が耳である。墨繪の模様が八角の眼である。たゞみ目が皺一つづつ、い
やな黄味を帯びて、消えかゝる提灯の影で、ひく／＼と皆揺れる、狛々に似て化猫である。

私は驚と云ふは此かと思つた。

其の鄰、其の鄰、其上、其の下、並んで、重つて、或は青く、或は赤く、或は黒く、凡そ白
ほどの、變な、可厭な獸が幾つともなく並んだ。

皆可恐い夢を見て居よう。いや、其の夢の徴であらう。

其の手近なの、裂目の口を、私は餘りの事に、手でふさいだ。ふさいでも、開く。開いて垂
れると、舌を出したやうに見えて、風呂敷包が甘澁くニヤリと笑つた。

續いて、どの獸の面も皆笑つた。

爾時であつた。あの四谷見附の火の見櫓は、窓に血をはめたやうな兩眼を睜いて、天に冲する、
素裸の魔の形に變じた。

土手の松の、一樹、一幹。啊呷に脈を張つて突立つた、赤き、黒き、青き鬼に見えた。

が、あらず、それも、後に思へば、火を防ががために粉骨したまふ、焦身の仁王の像であつ
た。

早や、煙に包まれたやうに息苦しい。

私は婦人と婦人との間を拾つて、密と大道の夜氣に頭を冷さうとした。——若い母さんに觸る
まいと、ひよいと腰を浮かして出た、はずみに、此の婦人の上にかざした蛇目傘の下へ入つて、

頭が支へた。ガサリと落すと、響に、一時の、うつゝの睡を覺すであらう。手を其の傘に支へて、ほし棹にかけたまゝ、ふら／＼と宙に泳いだ。……この中でも可笑い事がある。

——前刻、草あぜに立てた傘が、パサリと、ひとりて倒れると、下に寝た女中が、「地震。」

と言つて、むくと起返る背中に、ひつたりと其の傘をかぶつて、首と両手をばた／＼と動かし

た……

いや、人ごとではない。

私は露を吸つて、道に立つた。

火の見と私との間を、火の粉が、何の鳥か、鳥とともに飛び散つた。

が、炎の勢は其の頃から衰へた。火は下六番町を焼かずに消え、人の力は我が町を亡ぼさず

に消した。

「少し、しめつたよ。起きて御覽、起きて御覽。」

婦人たちの、一度に目をさました時、あの不思議な面は、上臈のやうに、翁のやうに、稚兒のやうに、和やかに、やさしく成つて莞爾した。

朝日は、御所の門に輝き、月は戎劍の閃影を照らした。

——江戸のなごりも、東京も、その大抵は焦土と成んぬ。茫々たる焼野原に、ながき夜を鳴きすだく蟲は、いかに、蟲は鳴くであらうか。私はそれを、人に聞くのさへ憚らるゝ。

しかはあれど、見よ。確に聞く。浅草寺の觀世音は八方の火の中に、幾十萬の生命を助けて、秋の樹立もみどりにして、仁王門、五重の塔とともに、柳もしだれて、露のしたゝるばかり嚴に氣高く焼残つた。塔の上には鳩が群れ居、群れ遊ぶさうである。尙ほ聞く。花屋敷の火をのがれた象は此の塔の下に生きた。象は寶塔を背にして白い。

普賢も影向ましますか。

若有持是觀世音菩薩名者。

設入大火。火不能燒。

由是菩薩。威神力故。

きのふは仲秋十五夜で、無事平安な例年にもめづらしい、一天澄渡つた明月であつた。その前夜のあの暴風雨をわすれたやうに、朝から晴れ／＼とした、お天気模様で、辻へ立つて日を禮したほどである。おそろしき大地震、大火の爲に、大都是半、阿鼻焦土となんぬ。お月見でもあるまいが、背戸の露草は青く冴えて露にさく。……廂破れ、軒漏るにつけても、光りは身に沁む月影のなつかしさは、せめて薄ばかりも供へようと、大通りの花屋へ買ひに出すのに、こんな時節から、用意をして賣つてゐるだらうか。……覺束なると、つかひに行く女中が元氣な顔して、花屋になれば向う土手へ行つて、葉ばかりでも折つべしよつて來ませうよ、といった。いふことが、天變によつてきたへられて徹底してゐる。

女でさへその意氣だ。男子は働かなければならない。——こゝで少々小聲になるが、お互に稼がなければ追つ付かない。……

既に、大地震の當夜から、野宿の夢のまださめぬ、四日の早朝、眞黒な顔をして見舞に來た。……前に内にゐて手まはりを働いてくれた淺草ツ娘の婿の裁縫屋などは、土地の淺草で丸焼けに焼け出されて、女房には風呂敷を水びたしにして髪にかぶせ、おんぶした嬰児には、ねんねこを

濡らしてきせて、火の雨、火の風の中を上野へ遁がし、あとで持ち出した片手さげの一荷さへ、生命の危ふさに打つちやつた。……何とかや——と呼んでさがして、漸く竹の臺でめぐり合ひ、そこも火に追はれて、三河島へ遁げのびてゐるのだといふ。いつも來る時は、縞ものそろひで、おとなしづくりの若い男で、女の方が年下の癖に、薄手の圓鬪でじみづくりの下町好みでをさまつてゐるから、姉女房に見えるほどののだが、「嬰児が乳を吞みますから、私は何うでも、彼女には實に成るもの、一口も食はせたらうござんすから。」——で、さしあたり仕立ものなどの誂はないから、忽ち荷車を借りて曳きはじめた——これがまた手取り早い事には、どこかそこらに空車をみつけて、賃貸しをしてくれませんかと聞くと、焼け原に突き立つた親仁が、「かまはねえ、あいてるもんだ、持つてきねえ。」と云つたさうである。人ごみの避難所へすぐ出向いて、荷物の持ち運びをがたり／＼やつたが、いゝ立て前になる。……そのうち場所の事だから、別に知り合でもないが、柳橋のらしい藝妓が、青山の知邊へ遁げるのだけれど、途中不案内だし、一人ぢや可恐いから、兄さん送つて下さいな、といったので、おい、合點と、乗せるのでないから、そのまゝ荷車を道端にうつちやつて、手をひくやうにしておくり届けた。「別嬪でござんした。」たゞでもこの役はつとまる所をしみ／＼禮をいはれた上に、「たんまり御祝儀を。」とよごれくさつた半纏だが、威勢よく井をたゝいて見せて、「何、何をしたつて身體さへ働かせりや、彼女に食はせて、

乳はのまされます。」と、仕立屋さんは、いそ／＼と歸つていつた。——年季を入れた一ばしの居職がこれである。

それを思ふと、机に向つたなりで、白米を炊いてたべられるのは勿體ないと云つてもいい。非常の場合だ。……稼がずには居られない。

社にお約束の期限はせまるし、……實は十五夜の前の晩あたり、仕事にかゝらうと思つたのである。所が、朝からの吹き降り、日が暮れると警報の出た暴風雨である。電燈は消えるし、どしや降りだし、風はさわぐ、ねずみは荒れる。……急ごしらへの油の足りない白ちやけた提灯一具に、小さくなつて、家中が目ばかりばち／＼として、陰氣に滅入つたのでは、何にも出來ず、口もきけない。拂底な蠟燭の、それも細くて、穴が大きく、心は暗し、數でもあればだけれども、秘藏の箱から……出して見た覚えはないけれど、寶石でも取出すやうな大切な、その蠟燭の、時よりも早くぢり／＼と立つて行くのを、氣を萎して、見詰めるばかりで、かきもの所の沙汰ではなかつた。

二

戸をなぐりつける雨の中に、風に吹きまはされる野分聲して、「今晚——十時から十一時までの

間に、颯風の中心が東京を通過するから、皆さん、お氣を付けなさるやうにといふ、たゞ今、警官から御注意がありました。——御注意を申します。」と、夜警當番がすぐ窓の前を觸れて通つた。

さらぬだに、地震で引傾いでゐる借屋である。颯風の中心は魔の通るより氣味が悪い。——胸を引緊め、袖を合せて、おすくむと、や、や、次第に大風は暴れせまる。……一しきり、一しきり、たゞ、辛き息をつかせては、ウ、ウ、ヒューとうなりを立てる。浮き袋に取付いた難破船の沖のやうに、提灯一つをたよりにして、暗闇にたゞよふうち、さあ、時かれこれ、やがて十二時を過ぎたと思ふと、氣の所爲か、その中心が通り過ぎたやうに、がう／＼と戸障子をゆるす風がぎツと屋の棟を拂つて、や、軽くなるやうに思はれて、突つ伏したのも、僅に顔を上げると……何うだらう、忽ち幽怪なる夜陰の汽笛が耳をゑぐつて間ぢかに聞えた。「あ、(ウウ)が出来ますよ。」と家内があをい顔をする。——この風に——私は返事も出來なかつた。

カチ、カチ、カ、チ

カチ、カチ、カ、チ

品 小
雨にしづくの拍子木が、雲の底なる十四日の月にうつるやうに、袖の黒さも目に浮かんで、四五軒北なる大銀杏の下に響いた。——私は、霜に睡をさました劍士のやうに、付け焼き刃に落ち

誠にありがたがるくらゐでは足りないのである。火は、亜鉛板が吹つ飛んで、送電線に引掛つてゐるの、風ですれて、線の外被を切つたために發したので。警備隊から、驚破と駈つけた兵員達は、外套も被なかつたのが多いさうである。危険を冒して、あの暴風雨の中を、電柱を攀ぢて、消しとめたのであると聞いた。——颯風の過ぎる警告のために、一人駈けまはつた警官も、外套なしに骨までぐしよ濡れに濡れ通つて——夜警の小屋で、餘りの事に、「おやすみになるのに、お着替がありますか。」といつて聞くと、「住居は焼きました。何もありません。——休息に、同僚のでも借りられればですが、大抵はこのまゝ寝ます。」との事だつたさうである。辛勞が察しらるゝ。

雨になやんで、葉うらにすくむ私たちは、果報といつても然るべきであらう。

暁方、僅にとろりとしつゝ、目がさめた。寝苦しい思ひの息つきに朝戸を出ると、あの通り暴れまはつたトタン板も屋根板も、大地に、ひしとなつてへたばつて、魍魎を跳らした、ブリキ罐、瀬戸のかけらも影を散らした。風は冷く爽に、町一面に吹き出した眞蒼な銀杏の葉が、そよ／＼と葉のへりを優しくそよがせつゝ、芥と、樹の秋の薫を立てる。……

早起きの女中がさぶ／＼、さら／＼と、早、その木の葉をはく。……化けさうな古箏も、唯見ると銀杏の簪をさした細腰の風情がある。——しばらく、雨ながら戸に敷いたこの青い葉は、そのまゝにながめたし。「晩まで掃かないで。」と、留めたかつた。が、時節がらである。落ち葉を掃かないのさへ我儘らしいから、腕を組んでだまつて視た。

裏の小庭で、雀と一所に、嬉しさうな聲がする。……昨夜、戸外を舞静めた、それらしい、銀杏の折れ枝が、大屋根を越したが、一坪ばかりの庭に、瑠璃淡く咲いて、もう小さくなつた朝顔の色に絶るやうに、たわ／＼に掛つた葉の中に、一粒、銀杏の實のついたのを見つけたのである。

「たべられるものか、下卑なさんな。」「なぜ、何うして?」「いちじくとはちがふ。いくら食ひしん坊でも、その實は黄色くならなくつては。」「へい。」と目を丸くして、かざした所は、もち手は借家の山の神だ、が、露もこぼるゝ。枝に、大慈の楊柳の俤があつた。

——ところで、前段にいつた通り、この日はめづらしく快晴した。

……通りの花屋、花政では、きかない氣の爺さんが、捻鉢巻で、お月見のすゝき、紫苑、女郎花も取添へて、おいでなせえと、やつて居た。葉に打つ水もいさぎよい。

可し、この様子では、歳時記どほり、十五夜の月はかゞやくであらう。打ちつゞく悪鬼ばらひ、

屋を壓する黒雲をぬぐつて、景氣なほしに「明月」も、しかし沙汰過ぎるから、せめて「良夜」とでも題して、小篇を、と思ふうちに……四五人のお客があつた。いづれも厚情、懇切のお見舞である。

打ち寄れば言ふ事よ。今度の大火害につけては、先んじて見舞はねばならない、焼け残りの家の無事な方が後になつて——類焼をされた、何とも申しやうのない方たちから、先手を打つて見舞はれる。壁の破れも、防がねばならず、雨漏りも留めたし、……その何よりも、火をまもるのが、町内の義理としても、大切に、煙草盆一つにも、一人はついて居なければならぬやうな次第であるため、ひつ込みじあんに住すくまつて、小さくなつてゐるからである。

四

早く、この十日ごろにも、連日の臆病づかれて、寝るともなしにころがつてゐると、「鏡さんはゐるかい。——何は……ゐなざるかい。」と取次ぎ……といふほどの奥はない。出合はせた女中に、聞きなれない、かう少し掠れたが、よく通る底力のある、そして親しい聲で音づれた人がある。「あ、長さん。」私は心づいて飛び出した。はたして松本長であつた。

この能役者は、木曾の中津川に避暑中だつたが、藤原町の住居はもとより、寶生の舞臺をはじ

め、芝の琴平町に、意氣な稽古所の二階屋があつたが、それもこれも皆灰燼して、留守の細君——(評判の賢婦人だから厚禮して)——御新造が子供たちを連れて辛うじて火の中をのがれたばかり、何にもない。歴乎とした役者が、ゴム底の足袋に巻きゲートル、ゆかたの尻ばしよりで、手拭を首にまいてやつて来た。「いや、えらい事だつたね。——今日も焼けあとを通つたがね、學校と病院に火がかゝつたのに包まれて、駿河臺の、あの崖を攀ち上つて逃げたさうだが、よく、あの崖が上られたものだと思ふよ。ぞつとしながら、つくづく見たがね、上がらうたつて上がれさうな所ぢやない。女の腕に大勢の小兒をつれてゐるんだから——いづれ人さ、誰かが手を取り、肩をひいてくれたんだらうが、私は神佛のおかげだと思つて難有がつてゐるんだよ。——あ、装束かい、皆な灰さ——面だけは近所のお弟子が駆けつけて、残らずたすけた。百幾つといふんだが、これで寶生流の面目は立ちます。装束は、いづれ年がたてば新しくなるんだから。」と蜀江の錦、吳漢の綾、足利絹ものともしないで、「よそぢや、この時節、一本お燭でもないからね、ビールさ。久しぶりでいゝ心持だ。」と熱燗を手酌で傾けて、「親類うちで一軒でも焼けなかつたのがお手柄だ。」といつて、うれしさうな顔をした。うらやましいと言はないまでも、結構だともいふことか、手柄だといつて讃めてくれた。私は胸がせまつた。と同時に、一藝に達した、いや——從兄弟だからグツと割びく——たづさはるものの意氣を感じた。神田兒だ。彼は生拔きの

江戸兒である。

その日、はじめて店をあけた通りの地久庵の蒸籠をつる／＼と平げて、「やつと蕎麥にありついた。」と、うまさうに、大胡坐を搔いて、また飲んだ。

印半纏一枚に焼け出されて、いさゝかもめげないで、自若として胸をたゝいて居るのに、なほ万ちやんがある。久保田さんは、まる焼けのしかも二度目だ。さすがに淺草の兄さんである。

つい、この間も、水上さんの元祿長屋、いや邸（註、建つて三百年といふ古家の一つがこれで、もう一つが三光社前の一棟で、いづれも地震にびくともしなかつた下六番町の名物である。）へ泊りに来てゐて、寝ころんで、誰かの本を讀んでゐた雅量は、推服に値する。

ついて話がある。（猿どのの夜寒訪ひゆく兎かな）で、水上さんも、私も、場所はちがふが、両方とも交代夜番のせこに出てゐる。町の角一つへだてつゝ、「いや、御同役いかゞでござるな。」と互に訪ひつ訪はれつする。私があけ番の時、宵のうたゝねから覺めて辻へ出ると、こゝにつめてゐた當夜の御番が「先刻、あなたのとこへお客がありましたね、門をのぞきなさるから、あゝ泉をおたづねですかと、番所から聲を掛けますと、いや用ではありません——番だといふから、ちよつと見に來ました、といつてお歸りになりました。戸をあけたまゝで、お宅ちやあ皆さん、お寝みのやうでした。」との事である。

「どんな人です。」と聞くと、「さあ、はつきりは分りませんが、大きな眼鏡を掛けておいででした。」あゝ、水上さんのとこへ、今夜も泊りに來た人だらう、万ちやんだな、と私はさう思つた。久保田さんは、大きな眼鏡を掛けてゐる。——所がさうでない。來たのは瀧君であつた。評判のあの目が光つたと見える。これも讚稱にあたひする。

五

——さてこの日、十五夜の當日も、前後してお客が歸ると、もうそちこち晩方であつた。

例年だと、その薄を、高樓——もちとをかしいが、この家で二階だから高いにはちがひない。その月の出の正面にかざつて、もと手のかゝらぬお團子だけは堆く、さあ、成金、小判を積んで較べて見ると、飾るのだけれど、ふすまは外れる。障子の小間はびり／＼と皆破れる。雑と掃き出したばかりで、煤もほこりも其のまゝで、まだ雨戸を開けないで置くくらゐだから、下階の出窓下、すゝけた簾ごしに供へよう。お月様、おさびしうございませうかと、飾る。……その小さな臺を取りに、砂で氣味の悪い階子段を上がると、……ポンとにほつた。焦げるやうなほひである。ハツと思ふと、かう氣のせぬか、立てこめた中に煙が立つ。私はバタ／＼と飛びおりた。「ちよつと來て見ておくれ、焦げくさいよ。」家内が血相して駆けあがつた。「漏電ぢやないか知

ら。」——一日の地震以來、たばこ一服、火の氣のない二階である。「疊をあげませう。濱野さん……御近所の方、おとなりさん。」「騒ぐなよ。」とはいつたけれども、私も胸がドキ／＼して、壁に頬を押しついたり、疊を撫でたり、だらしはないが、火の氣を考へ、考へつゝ、雨戸を繰つて、衝と裏窓をあけると、裏手の某邸の廣い地尻から、ドス黒いけむりが渦を巻いて、もう／＼と立ちのぼる。「湯どのだ、正體は見届けた、あの煙だ。」といふと、濱野さんが鼻を出して、嗅いで見て、「いえ、あのほひは石炭です。一つ嗅いで來ませう。」といふことも慌てながら戸外へ飛び出す。——近所の人たちも、二三人、念のため、スキツチを切つて置いて、疊を上げた、が何事も無い。「御安心なさいまし、大丈夫でせう。」といふ所へ、濱野さんが、下駄を鳴して飛んで戻つて、「づか／＼庭から入りますとね、それ、あの爺さん。」といふ、某邸の代理に夜番に出て、おねむりをしい／＼、むかし道中をしたといふ東海道の里程を、大津からはじめて、幾里何町と五十三次、徒歩で饒舌る。……安政の地震の時は、おふくろの腹にゐたといふ爺さんが、「風呂を焚いてゐましてね、何か、嗅ぐと矢つ張り石炭でしたが、何か、よくきくと、たきつけに古新聞と塵埃を燃したさうです。そのほひが籠つたんですよ。大丈夫です。——爺さんにいひますとね、(氣の毒でがんしたなう。)といつてゐました。」箱根で煙草をのんだらうと、笑ひですんだから好いものの、薄に月は澄ながら、胸の動悸は靜まらぬ。あいにくとまた停電で、樂園の

あかりを借りつゝ、燈と共に手がふるふ。……なか／＼に稼ぐ所ではないから、いきつぎに表へ出て、近所の方に、たゞ今の禮を立話してして居ると、人どよみを哄とつくつて、ばら／＼往來がなだれを打つ。小兒はさげふ。犬はほえる。何だ。何だ。地震か火事か、と騒ぐと、馬だ、馬だ。何だ、馬だ。主のない馬だ。はなれ馬か、そりや大變と、屈竟なまで、軒下へパツと退いた。放れ馬には相違ない。引手も馬方もない畜生が、あの大地震にも縮まない、長い面して、のそりのそりと、大八車のしたゝかな奴を、たそがれの堀の片暗夜に、人もなげに曳いて伸して來る。重荷に小づけとはこの事だ。その癖、車は空である。が、嘘か眞か、本所の、あの被服廠では、つむじ風の火の裡に、荷車を曳いた馬が、車ながら炎となつて、空をきり／＼と廻つたと聞けば、あゝ、その馬の幽霊が、車の亡魂とともに、フト迷つて顯はれたかと、見るにもの凄いまで、この騒ぎに持ち出した、軒々の提灯の影に映つたのであつた。かういふ時だ。在郷軍人が、シャツ一枚で、見事に轡を引留めた。が、この大きなものを、せまい町内、何處へつなぐ所もない。御免だよ、誰もこれを預からない。そのはずで。……然うかといつて、どこへ戻す所もないのである。少しでも廣い、中六へでも持ち出すかと、曳き出すと、人をおどろかしたにも似ない、おとなしい馬で、荷車の方が暴れながら、四角を東へ行く。……

酔つ拂つたか、寝込んだか、馬方め、馬鹿にしやがると、異説、紛々たる所へ、提灯片手に息
せいで、馬の行つた方から飛び出しながら「皆さん、晝すぎに、見付けの米屋へ来た馬です。あ
の馬の面に見覚えがあります。これから知らせに行きます。」と、商家の中僧さんらしいのが、馬
士に覚え、とも言はないで、呼ばはりながら北へ行く。
町内一ぱいのえらい人出だ、何につけても騒々しい。

かう何うも、番ごと、どしんと、駭ろかされて、一々びく／＼して居たんでは行り切れない。
さあ、もつて来い、何でも、と向う顔巻をした所を、馬の前へは立たれはしない。
夜ふけて、ひとり澄む月も、忽ち暗くなりはしないだらうか、眞赤になりはしないかと、おな
じ不安に夜を過ごした。

その翌日——十六夜にも、また晩方強震があつた——おびえながら、この記をつづる。

時に、こよひの月は、雨空に道行きをするやうなのではない。かう／＼しく、そして、やさし
く照つて、折りしもあれ風一しきり、無慙にもはかなくなつた幾萬の人たちの、焼けし黒髪かと、
散る柳、焦げし心臓かと、落つる木の葉の、宙にさまよふと見ゆるのを、撫で慰さむるやうに、

薄霧の袖の光りを長く敷いた。

間引菜

大正十二年十一月

わびしさ……侘しいと言ふは、寂しさも通越し、心細さもあきらめ氣味の、げつそりと身にし
む思の、大方、かうした時の事であらう。

——まだ、四谷見つけの二夜の露宿から歸つたばかり……三日の午後の大雨に、骨までぐしよ
濡れに成つて、やがて着かへた後も尙ほ冷々と濕つぽい、しよぼけた身體を、ぐつたりと横にし
て、言合はせたやうに、一張差置いた、眞の細い、乏しい提灯に、頭と顔をひしと押着けた處は、
人間唯髯のなだけで、秋の蟲と餘りかはりない。

ひとへに寄継る、薄暗い、消えさうに、ちよろ／＼また／＼……燈と言つては此一點で、二階
も下階も臺所も内中は眞暗である。

品 小
すくなくも、電燈が點くやうに成ると、人間は横着で、どうしてあんなだつたらうと思ふ、が
其はまつたく暗かつた。——實際、東京はその一時、全都が火の消えるとともに、此の世から消

えたのであつた。

大焼原の野と成つた、下町とおなじ事、殆ど廻町の九分どほりを焼いた火の、やゝしめり際を、我が家を逃れたまゝの土手の向越しに見たが、黒煙は、残月の下に、半天を蔽うた忌はしき魔鳥の翼に似て、焼残る炎の頭は、その血のしたゝる七つの首のやうであつた。

……思出す。……

あらず、碧く白き東雲の陽の色に紅に冴えて、其の眞黒な翼と戦ふ、緋の鶏のとさかに似たのであつた。

これ、夜のあくるにつれての人間の意気である。

日が暮れると、意気地はない。その鳥より一層もの凄い、暗闇の翼に蔽はれて、いま燈の影に息を潜める。其の翼の、時々どつと動くとともに、大地は幾度もびり／＼と揺れるのであつた。驚破と言へば、駈出すばかりに、障子も門も半ばあけたまゝで。……框の狭い三疊に、件の提灯に縫つた、つい鼻の先は、町も道も大きな穴のやうに皆暗い。——暗さはつきぬけに全都の暗夜に、荒海の如く續く、とも言はれよう。

蟲のやうだと言つたが、あゝ、一層、くづれた壁に潜んだ、波の巖間の貝に似て居る。——此を思ふと、大なる都の上を、手を振つて立つて歩いた人間は大膽だ。

鄰家はと、穴から少し、恚う鼻の尖を出して、覗くと、おなじやうに、提灯を家族で袖で包んで居る。魂なんど守護するやうに——

たゞ四角なる辻の夜警のあたりに、ちら／＼と燈の見えるのも、うら枯れつゝも散残つた百日紅の四五輪に、可恐い夕立雲の崩れかゝつた状である。

と、時々その中から、黒く拔出して、鞞音を沈めて来て、門を通りすぎるかとすれば、閃々と薄のやうなものが光つて消える。

白刃を提げ、素槍を構へて行くのである。こんなのは、やがて大叱られに叱られて、東にしてお取上げに成つたが……然うであらう。

——記録は慎まなければ成らない。——此のあたりで、白刃の往來するを見たは事實である。……けれども、敵は唯、宵闇の暗さであつた。

其の暗夜から、風が颯と吹通す。……初嵐……可懐い秋の聲も、いまは遠く遙に隅田川を渡る數萬の靈の叫喚である。……蠟燭がじり／＼とまた滅入る。

あ、と言つて、其の消えかゝるのに驚いて、半ばうつゝに目を開く、女たちの顔は蒼白い。疲れ果てて、目を睨りながらも、すぐ其なりにう／＼する。呼吸を、燈に吸はるゝやうに見える。

がさり……

裏町、表通り、火を警むる拍子木の音も、石を噛むやうに軋んで、寂然とした、臺所で、がさり陰気に響く。

がさり……

鼠だ。

「叱……」

がさり……

いや、もつと近い、つぎの女中部屋の隅らしい。

がさり……

「叱……」

と言ふ追ふ聲も、玄米の粥に、罐詰の海苔だから、しつこしも、粘りも、力もない。

がさり。

畜生……がさ／＼と引いても逃げる事か、がざりとばかり悠々と遣つて居る。

氣に成るから、提灯を翳して、「叱。」と女中部屋へ入つた。が、不斷だと、魘魅を消す光明で、電燈を燦と點けて、畜生を磔にして追拂ふのだけれど、此の燈の覺束なさは、天井から息を掛け

ると吹消されさうである。ちよろりと足許をなめられはしないかと、爪立つほどに、心が慮して居るのだから、だらしはない。

それでも少時は、ひっそりして音を潜めた。

先づは重疊、抗つて齒向つても来られようものなら、町内の夜番につけても、竹箒を押取つて戦はねば成らない處を、恚う云ふ時は敵手が逃げてくれるに限る。

「あゝ、地震だ。」

幽ながら、ハツとして框まで飛返つて、

「大丈夫々々。」

ほつとする。動悸のまだ休まらないうちである。

がさり。

二三尺、今度は――荒庭の飛石のやうに、包んだまゝの荷がごろ／＼して居る。奥座敷へ侵入した。――此を思ふと、いつもの天井を荒廻るのなどは、ものの數ではない。

品 小
鼠過於蠅。其擾人則蠅過於鼠……しかも驅蠅難於驅鼠。――鼠を防ぐことは、虎を防ぐよりも難い……と言ふのである。

同感だ。——が、満更然うでもない。大家高堂、手が届かず、従つて鼠も多ければだけでも、小さな借家で、壁の穴に氣をつけて、障子の切り張りさへして置けば、化けるほどでない鼠なら、むざとは入らぬ。

いつもののは、氣をつけて居るだから、臺所、もの置は荒しても、めつたに疊は踏ませないのに、大地震の一掃れで、家中、穴だらけ、隙間だらけで、我家の二階でさへ、壁土と塵埃と煤と、襖障子の骨だらけな、大きなものを背負つて居るやうな場合だつたから堪らない。

「勝手にしろ。——また地震だ。……鼠なんか構つちや居られない。」

あくる日、晩飯の支度前に、臺所から女中部屋を掛けて、女たちが頻りに立迷つて、ものを捜す。——君子は庖廚の事になんぞ、關しないで居たが、段々茶の間に成り、座敷に及んで、棚、小棚を掻きまはし、抽斗をがたつかせる。棄つても置かれず、何うしたと聞くと、「どうも變なんですよ。」と不思議がつて、わるく眞面目な顔をする。ハテナ、小倉の色紙や、鷹の一軸は先祖からない内だ。うせものがした處で、そんなに騒ぐには當るまいと思つた。が、さて聞くと、いや何うして……色紙や一軸どころではない。——大切な晩飯の茶がない。

車駄が紛失して居る。皆さんは、御存じであらうか……此品を……あなた方が、女中さんに御祝儀を出してめしあ

がる場所などには、決してあるものではない。かさ／＼と乾いて、渦に成つて、稱ぶ如く眞中に穴のあいた、こゝを一寸束にして結へてある……瓦煎餅の氣の抜けたやうなものである。粗と水に漬けて、ぐいと絞つて、醬油で搔廻せば直ぐに食べられる。……私たち小學校へ通ふ時分に、辨當の茶が、よく此だつた。

「今日のお茶は？」

「車駄。」

と、からかふやうに親たちに言はれると、ぶつとふくれて、がっかりして、そしてべそを掻いたものである。其癖、學校で、おの／＼を覗きつくらす時は「蛇の目の紋だい、清正だ。」と言つて、負をしみに威張つた、勿論、結構なものではない。

紅葉先生の説によると、「金魚麩は婆の股の肉だ。」さうである。

成程似て居る。

安下宿の茶に此の一品にぶつかると、

「また婆の股だぜ。」

「恐れるなあ。」

で同人が嘆息した。——今でも金魚麩の方は辟易する……が、地震の四日五日めぐらぬ迄は、

此の金魚鉢さへ乾物屋で賣切れた。また「泉の干瓢鍋か。車鉢か。」と言つて友だちは嘲笑する。けれども、淡泊で、無難で、第一儉約で、君子の食ふものだ、私は好だ。が言ふまでもなく、それどころか、椎茸も湯皮もない。金魚鉢さへないものを、些とは増な、車鉢は猶更であつた。……すでに、二日の日の午後、火と煙を三方に見ながら、秋の暑さは炎天より意地が悪く、加ふるに砂煙の濛々とした大地に莫菴一枚の立退所から、軍のやうな人ごみを、抜けつ、潛りつ、四谷の通りへ食料を探しに出て、煮染屋を見つけて、崩れた瓦、壁泥の堆いのを踏んで飛込んだが、心あての昆布の佃煮は影もない。鯨を見着けたが、買はうと思ふと、いつもは小清潔な店なんだのに、其の硝子蓋の中は、と見るとギョツとした。眞黒に煮られた鯨の、化けて頭の飛ぶやうな、一杯に跳上り飛廻る蠅であつた。あをく光る奴も、パツ／＼と相まじはる。

咽喉どころか、手も出ない。
蠅も蛆も、とは、まさか言ひはしなかつたけれども、此の場合……きれいなんぞ勿體ないと、立のき場所の周囲から説が出て、使が代つて、もう一度、その佃煮に駈けつけた時は……先刻に見着けた少しばかりの罐詰も、それも此も賣切れて何にもなかつた。——第一、もう店を閉して、町中寂然として、ひし／＼と中に荷をしめる音がひしめいて聞えて、鎖した戸には炎の影が暮れせまる雲とともに血をそゞぐやうに映つたと言ふのであつた。

線返すやうだが、それが二日で、三日の午すぎ、大雨に弱り果てて、まだ不安ながら、破家へ引返してから、薄味味噌汁に蘇生るやうな味を覺えたばかりで、罐づめの海苔と梅干のほかにもない。

不足を言へた義理ではないが……言つた通り干瓢も湯皮も見當らぬ。ふと中六の通りの南外堂と言ふ菓子屋の店の、この處、砂糖氣もしめり氣も鹽氣もない、からりとして、たゞ箱道具の亂れた天井に、つゝみ紙の糸を手繰つて、くる／＼と廻りさうに、右の車鉢のあるのを見つけて、おかみさんと馴染だから、家内が頼んで、一かゞり無理に譲つて貰つたので——少々おかゝを驕つて煮た。肴にも茶にも、なか／＼此の味は忘れられない。

——此の日も、晩飯の樂みにして居たのであるから。……私は實は、すき腹へ餘程こたへた。あの、昨夜の（がさり）が其れだ。

「鼠だよ、畜生め。」

それにしても、半分煮たあとが、輪にして雑と一斤入の茶の罐ほどの嵩があつたのに、何處を探しても、一片もないどころか、果は踏臺を持つて來て、押入の隅を覗き、縁の天井うらにつんだ古傘の中まで掻きさがしたが、缺らもなく、粉も見えない。

「不思議だわね。變だ。鼠ならそれまでだけれど……」

可厭な顔をして、女たちは、果は氣味を悪がった。——尤も引續いた可恐さから、些と上ずつては居るのだけれど、鼠も妖に近いのではないと、恚う吹消したやうには引けさうもないと言ふので、薄氣味を悪がるのである。

「何うかして居るんぢやないか知ら。」

追つては、置場所を忘れたにしても、餘りな忘れ方だからと、女たちは我と我身をさへ覺束ながつて氣を打つのである。且つあやかしにでも、悪かれたやうな暗い顔をする。

その目の色のたゞならぬのを見て、私も心細く寂しかつた。

いかに、天變の際と雖も、歎に羽が生えて飛ぶ道理がない。畜生、鼠の所業に相違あるまい。

この時の鼠の憎さは、近頃、片腹痛く、苦笑をさせられる、あの流言蜚語とかを逞しうして、女小兒を脅かす輩の憎さとおなじであつた。……

……たとへば、地震から、水道が断水したので、此邊、幸ひに四五箇所残つた、むかしの所謂番町の井戸へ、家毎から水を貰ひに群をなして行く。……忽ち女には汲ませないと言ふ邸が出来た。毒を何うとかと言觸らしたためである。其の時の事。……近所の或邸へ……此の界限を大分離れた遠方から水を貰ひに来たものがある。来たものの顔を知らない。不安の折だし、御不自由まことにお氣の毒で申し兼ねるが、近所へ分けるだけでも水が足りない。外町の方へは、と

言つて其の某邸で断つた。——あくる朝、命の水を汲まうとすると、釣瓶に一杯、汚い獸の毛が浮いて上る……三毛猫の死骸が投込んであつた。その断られたものの口惜まぎれの悪戯だらうと言ふのである。——朝の事。……

すぐ其の晩、辻の夜番で、私に恚う言つて、身ぶるひをした若い人がある。本所から辛うじて火を免れて避難をして居る人だつた。

「此の近所では、三人死にましたさうですね、毒の入つた井戸水を飲んで……大變な事に成りましたなあ。」

いや何うして、生れかゝつた嬰兒はあるかも知らんが、死んだらしいのは一人もない。

「飛でもない——誰にお聞きに成りました。」

「ちぎ、横町の……何の、車夫に——」

もう其の翌日、本郷から見舞に來てくれた友だちが知つて居た。

「やられたさうだね、井戸の水で。……何うも私たちの方も大警戒だ。」

實の處は、單に其の猫の死體と云ふのさへ、自分で見たものはなかつたのである。

天明六、丙午年は、不思議に元日も丙午で此の年、皆虧の蝕があつた。春よりして、流言妖語、壯に行はれ、十月の十二日には、忽ち、兩水道に毒ありと流傳し、市中の騒動言ふべからず、諸

人水に騒ぐこと、火に騒ぐが如し。——と此の趣が京山の（蜘蛛の絲卷）に見える。……諸葛武侯、淮陰侯にあらざるものの、流言の智慧は、いつも此のくらゐの處らしい。

しかし五月蠅いよ。

鐵の棒の杖をガンといつて、尻まくりの逞しい一分刈の凸頭が「麴町六丁目が焼とるで！ 今ばつと火を吹いた處だ、うむ。」と炎天に、赤黒い、油ぎつた顔をして、目をきよろりと、肩をゆがめて、でくりと通る。

一晩内へ入つて寝たばかりだ。皆ワツと言つて駈出した。

「お急きなされるな、急ぐまい。……いま火元を見て進ぜる。」

と町内第一の古老で、紺と白の浴衣を二枚重ねた禪門。豫て禪機を得た居士だと言ふが、悟を開いても迷つても、南が吹いて近火では堪らない。暑いから胸をはだけて、尻端折りで、すたすたと出向はれた。かへりには、ほこりの酷さに、すつとこ被をして居られたが、

「何の事ぢや、おほ、成程、焼けとる。燬と火の上つた處ぢやが、焼原に立つとる土藏ぢやて。あのま、駈廻つても近まはりに最う焼けるものは何にもないの。おほ、安心々々。」

それでも、誰もが、此の御老體に救はれた如くに感じて、盡く前者の暴言を怨んだ。——處で、その鐵棒をついた出がと言ふと、右禪門の一家、……どころか、性なだからおもしろい。

文政十二年三月二十一日、早朝より、乾の風烈しくて、盛の櫻を吹き亂し、花片とともに砂石を飛ばした。……巳刻半、神田佐久間町河岸の材木納屋から火を發して、廣さ十一里三十二町半を焼き、幾千の人を殺した、橋の焼けた事も、船の焼けた事も、今度の火災によく似て居る。材木町の陶器屋の婦、嬰兒を懷に、六歳になる女兒の手を曳いて、凄く群集のなかを逃れたが、大川端へ出て、うれしやと吻と呼吸をついて、心づくと、人ごみに採立てられたために、手を曳いた兒は、身なしに腕一つだけ残つた。女房は、駭きかなしみ、哀歎のあまり、嬰兒と其の腕ひとつ抱きしめたまゝ、水に投じたと言ふ。悲惨なものあれば、船に逃れた御殿女中が、三十幾人、帆柱の尖から焚けて、振袖も褌も、炎とともに三百石積を駈けまはりながら、水に紅く散つたと言ふ凄惨なものもある。その他、殆ど今度とおなじやうなのが幾らもある。中には其のまゝらしいのさへ少くない。

餘事だけれど、其の大火に——茅場町の髮結床に平五郎と言ふ床屋があつて、人は皆彼を（床平）と呼んだ。——此が焼けた。——時に其の頃、奥州の得平と言ふのが、膏藥の呼賣をして歩行いて行はれた。

（奥州、仙臺、岩沼の、得平が膏藥は、あれや、これやに、利かなんだ。

輝ななどにや、よく利いた。

そこで床平が、自分で焼あとへ貼出したのは――

(何うしよう、身代、今の間に、床平が恚う焼けた。

水や、火消ぢや消えなんだ。

曉方などにや、やつと消えた。)

行つたな、親方。お救米を噛みながら、江戸兒の意氣思ふべしである。

此のおなじ火事に、靈岸島は、かたりぐさにするの痛々しく憚られるが、あはれ、今度の被服廠あとで、男女の死體が伏重なつた。こゝへ立つたお救小屋へ、やみの夜は、わあツと言ふ泣聲、たすけて――と言ふ悲鳴が、地の底からきこえて、幽靈が顯はれる。

しきりもない小屋内が、然らぬだに、おびえる處、一齊に突伏す騒ぎ。やゝ氣の確なのが、それでも僅に見留めると、黒髪を亂した、若い女の、白い姿で。……見るまに影になつて、フツと消える。

その混亂のあとには、持出した家財金目のものが少からず紛失した。娯樂ものの講談に、近頃大立ものの、岡引が、つけて、張つて、見さだめて、御用と、捕ると、其の幽靈は……若い女とは見たものの慾目だ。實は六十幾歳の婆々で、かもじを亂し、白ぬのを裸身に巻いた。――背中

に、引剝がした黒堀の板を一枚背負つて居る。それ、とくると背後を向きさへすれば、立處に暗夜の目目に消えたのである。

私は、安直な卷莖を吹かしながら、夜番の相番と、おなじ夜の彌次たちに此の話をした。

三日とも経たないに……

「やあ、えらい事に成りました。……柳原の焼あとへ、何うです。……夜鷹より先に幽靈が出来ます。……若い女の眞白なんです。――自警隊の一豪傑がつかまへて見ると、それが婆だ。かつらをかぶつて、黒板……」

と、黄昏の出會頭に、黒板堀の書割の前で、立話に話しかけたが、こゝまで饒舌ると、私の顔を見て、變な顔色をして、

「やあ、」

と言つて、怒つたやうに、黒板堀に外れてかくれた。

實は、私は、此の人に話したのであつた。

こんなのは、しかし憎氣はない。

再び幾日の何時ごろに、第一震以上の揺かへしが来る、その時は大海嘯がともなふと、何處かの豫言者が話したとか。何の祠の巫女は、焼のこつた町家が、火に成つたまゝ、あとからあとか

らスケートのやうに駆廻る夢を見たなどと、聲を密め、小鼻を動かして、眉毛をびりりと舌なめずりをして言ふのがある。段々寒さに向ふから、火のついた家のスケートとは考へた。……

女小兒はそのたびに青く成る。

やつと二歳に成る嬰兒だが、だゞを捏ねて言ふ事を肯かないと、それ地震が来るぞと親たちが怯すと、

「おんもへ、ねんね、いやよう。」

と、ひい／＼泣いて、しがみついて、小さく成る。

近所には、六歳かに成る男の兒で、恐怖の餘り氣が狂つて、八疊二間を、縦とも言はず横とも言はず、くる／＼駆廻つて留まらないのがあると聞いた。

スケートが、何うしたんだ。

我聞く。——魏の正始の時、中山の周南は、襄邑の長たりき。一日戸を出づるに、門の石垣の隙間から、大鼠がちよろりと出て、周南に向つて立つた。此奴が角巾、帛衣して居たと言ふ。一寸、靴の先へ團栗の實が落ちたやうな形らしい。但しその風事は地仙の格、豫言者の概があつた。小狡しき目で、じろりと視て、

「お、お、周南よ、汝、某の月の某の日を以て當に死ぬべきぞ。」

と言つた。

したゝかな妖である。

處が中山の大人物は、天井がガタリと言つても、わつと飛出すやうな、やにツこいのは、口惜しいが鍛錬が違ふ。

「あゝ、然やうか。」

と言つて、知らん顔をして澄まして居た。……言は些となまぬるいやうだけれど、そこが悠揚として迫らざる處である。

鼠還穴。

その某月の半ばに、今度は、鼠が周南の室へ顯はれた。もの／＼しく一揮して、

「お、お、周南よ。汝、月の幾日にして當に死ぬべきぞ。」

と言つた。

「あゝ、然やうか。」

鼠が柱に隠れた。やがて、呪へる日の、其の七日前に、傲然と出て來た。

「お、お、周南よ。汝旬日にして當に死ぬべきぞ。」

「あゝ、然やうか。」

丁度七日めの朝は、鼠が急いで出た。

「お、お、周南よ。汝、今日の中に、當に死ぬべきぞ。」

「あゝ、然やうか。」

鼠が慌てたやうに、あせり氣味にちか寄つた。

「お、お、周南、汝、日中、午にして當に死ぬべきぞ。」

「あゝ、然やうか。」

其の日、同じ處に自若として一人居ると、當にその午ならんとして、鼠が、幾度か出たり入つたりした。

やがて立つて、目を尖らし、しやがれ聲して、

「周南、汝、死なん。」

「あゝ、然やうか。」

「周南、周南、いま死ぬぞ。」

「然やうか。」

と言つた。が、些とも死なない。

「弱つた……遺切れない。」

と言ふと齊しく、ひつくり返つて、其の鼠がころつと死んだ。同時に、巾と扇が消えて散つた。魏の襄邑の長、その時思入があつて、じつと見ると、常の貧弱な鼠のみ。周南、壽と言ふのである。

流言の蠅、蜚語の鼠、そこらの豫言者に對するには、周南先生の流儀に限る。

事あつて後にして、前兆を語るのには、六日の菖蒲だけでも、そこに、あきらめがあり、一種のなつかしみがあり、深切がある。あはれさ、はかなさの情を含む。

潮のさゝない中川筋へ、夥しい鰯が上つたと言ふ。……横濱では、町の小溝で鰯が掬へたと聞

く。……嘗て佃から、「蟹や、大蟹やあ」で来る、聲は若い、もういゝ加減な爺さんの言ふのに、

小兒の時分にやあ兩國下で鰯がとれたと話した、私は地震の當日、ふるへながら、「あゝ、こんな

時には、兩國下へ鰯が來はしないかな。」と、愚にもつかないが、事實そんな事を思つた。

あの、磐梯山が噴火して、一部の山廓をそのまゝ湖の底にした。……その前日、おなじ山の温

泉の背戸に、物干棹に掛けた浴衣の、日盛にひっそりとして垂れたのが、しみ入る蟬の聲ばかり、

微風もないのに、裾を翻して、上下にスツ／＼と煽つたのを、生命の助かつたものが見たと言ふ。

——はもの凄い。

慙うした事は、聞けば幾らもあらうと思ふ。さきの思出、のちのたよりに成るべきである。

處で、私たちの町の中央を挟んで、大銀杏が一樹と、それから、ぼぶらの大木が一幹ある。見た處、丈も、枝のかこみもおなじくらゐで、はじめは對の銀杏かと思つた。——此のぼぶらは、七八年前の、あの凄じい暴風雨の時、われ／＼を驚かした。夜があけると忽ち見えなく成つた。が、屋根の上を消えたので、實は幹の半ばから折れたのであつた。のびるのが早い。今では再び、もとの通り梢も高し、茂つて居る。其の暴風雨の前、二三年引續いて、兩方の樹へ無數の椋鳥が群れて來た。塙に枝を争つて、揉抜かれて、一羽バタリと落ちて目を眩したのを、水をのませていきかへらせて、そして放した人があつたのを覚えて居る。

見事に群れて來た。

以前、何かに私が、「田舎から、はじめて新橋へ着いた椋鳥が一羽。」とか書いたのを、紅葉先生が見て笑ひなすつた事がある。「違ふよ、お前、椋鳥と言ふのは群れて來るからなんだよ。一羽ぢやいけない。」成程むれて來るものだと思つた。

暴風雨の年から、ばつたり來なく成つた。それが、今年、しかもあの大地震の前の日の暮方に、空を波のやうに群れて渡りついた。ぼぶらの樹に、どつと留まると、それからの喧噪と言ふものは、——チチツ、チチツと百羽二百羽一度に聲を立て、バツと梢へ飛上ると、また颯と枝につく。揉むわゆるわ。漸つと梢が静まつたと思ふと、チチツ、チチツと鳴き立てて又バツと枝を飛上る。

曉方まで止む間がなかつた。

今年是非常な暑さだつた。また東京らしくない、しめり氣を帯びた可厭な蒸暑さで、息苦しくして、寝られぬ晩が幾夜も續いた。おなじく其の夜も暑かつた。一時頃まで、皆戶外へ出て涼んで居て、何と言ふ騒ぎ方だらう、何故あゝだらう、烏や梟に驚かされるたつて、のべつに騒ぐ譯はない。塙が足りない喧嘩なら、銀杏の方へ、いくら分れたら可ささうなものだ。——然うだ、ぼぶらの樹ばかりで騒ぐ。……銀杏は星空に森然として居た。

これは、大袈裟でない、誰も知つて居る。寝られないほど、ひつきりなしに、けた／＼ましく鳴立てたのである。

朝はひつそりした。が、今度は人間の方が聲を揚げた。「やあ、荒もの屋の婆さん。……何うでえ、昨夜の、あの椋鳥の畜生の騒ぎ方は——ぎやあ／＼、きい／＼、ばた／＼、ざつ／＼、騒々しくつて、騒々しくつて。……俺等晝間疲れて居るのに、からつきし寝られやしねえ。もの干棹の長い奴を持出して、搔廻して、引拂かうと思つても、二本繼いでも届くもんぢやねえぢやあねえか。樹が高くてよ。なあ婆さん、椋鳥の畜生、ひどい目に逢はしやがるぢやあねえか。」と大聲で喚いて居るのがよく聞えた。また、私たち朝飯の前であつた。

品 小
此が納まると、一時たゞきつけて、樹も屋根も搔みだすやうな風雨に成つた。驟雨だから、東

京中には降らぬ處もあつたらしい。息を吐くやうに、一度止んで、しばらくびつたと静まつたと
思ふと、糸を揺つたやうに幽に來たのが、忽ち、あの大地震であつた。

「前兆だつたぜ——俺あ確に前兆だつたと思ふんだがね。あの前の晩から曉方までの椋鳥の騒ぎ
やうと言つたら、なあ、婆さん。……ぎやあ／＼ぎやあ／＼夜一夜だ。——お前さん。……なあ、
婆さん、荒もの屋の婆さん、なあ、婆さん。」

氣の毒らしい。……一々、そのぼぶらに間近く平屋のある、荒もの屋の婆さんを、辻の番小屋
から呼び出すのは。——こゝで分つた——植木屋の親方だ。へゞれけに酔拂つて、向願巻で、鉞
の抜けた柄の奴を、夜警の得ものに突張りながら、

「なあ、婆さん。——荒もの屋の婆さんが、知つてるんだ。椋鳥の畜生、もの干棹で引掻き廻い
てくれようと、幾度飛出したか分らねえ。樹が高えから届かねえぢやありませんかい。然うだら
う、然うだとも。——なあ、婆さん、荒もの屋の婆さん、なあ、婆さん。」

ふり廻す鉞の柄をよけながら、いや、お婆さんばかりぢやありません、皆が知つてるよ、と言
つても酔つてるから承知をしない。「なあ、婆さん、椋鳥のあの騒ぎ方は。——と毎晩のやうに
怒鳴つたものである。
……話が騒々しい。……些と静にしよう。それでなくてさへのはせて不可い。あゝ、しかし騒

氣に成ると氣が減入る。

がさり。

また鼠だ、奸黠なる鼠の豫言者よ、小畜よ。

さて、車轂の行方は、やがて知れた。魔が奪つたのでも何でもない。地震騒ぎのがらくただの、
風呂敷包を、ごつたにしたゝか積重ねた床の奥の隅の方に引込んであつたのを後に見つけた。
畜生。水道が出て、電燈がついて、豆腐屋が來るから、もう氣が強いぞ。

……齒がたの着いた、そんなものは、掃溜へ打棄つた。

がさり。がら／＼／＼。

あの、通りだ。さすがに、疊の上へは近づけないやうに防ぐが、天井裏から、臺所、鼠の殖え
たことは一通りでない。

品 小
近所で、小さな兒が、おもちゃに小庭にしらへた、箱庭のやうな築山がある。——其處へ、
午後二時ごろ、眞日中とも言はず、毎日のやうに、おなじ時間に、縁の下から、のそ／＼と……
出たな、豫言者。……灰色で毛の禿げた古鼠が、八九疋の小鼠をちよろ／＼と連れて出て、日比
谷を一散歩と言つた面で、桶の輪ぐらゐに、ぐるりと一巡二三度して、すまして又縁の下へ入つ

て行く。

「氣味が悪くて手がつけられません。」

「地震以來、ひとを馬鹿にして居るんですな。」

と、その親たちが話して居た。

「……車轂だつてさ……持つて来たよ。あの、坊のお庭へ。——山のね、山のまはりを引張るの。

……車の眞似だか、あの、オートバイだか、電車の眞似だか、ガツタン、ガツタン、がう……」

と、その七つに成る兒が、いたいけにまた話した。

私も何だか、薄氣味の悪い思ひがした。

蠅の湧いたことは言ふまでもなからう。鼠がそんなに跋扈しては、夜寒の破襖を何うしよう。

野鼠を退治るものは狸と聞く。……本所、麻布に續いては、この邊が場所だつたと言ふのに、

あ、その狸の影もない。いや、何より、こんな時の猫だが、飼猫などは、此の頃人間ととも

に臆病で、猫が（ねこ）に成つて、ぼやけて居る。

時なるかな。天の配劑は妙である。如何に流言に憑いた鼠でも、オートバイなどで人もなげに

駈廻られては堪らないと思ふと、どしん、どしん、がら／＼がらと天井を追つかけ廻し、溝の中

で取つて倒し、組んで噛みふせる勇者が顯はれた。

渠は颯である。

然まで古い事でもない。いまの院線がまだ通じない時分には、土手の茶畑で、狸が、ばつたを

壓へたと言ふ、番町邊に、いつでも居さうな蛇と颯を、つひぞ見た事がなかつたが。……それが、

溝を走り、床下を抜けて、しば／＼人目につくやうに成つたのは、去年七月……番町學校が一焼

けに焼けた前後からである。あの、時代のついた大建ものの隨處に巢つたのが、火のために散つ

たか、或は火を避けて界限へ逃げたのであらう。

不斷は、あまり評判のよくない獸で、肩車で二十疋、三十疋、狼立に突立つて、それが火柱に

成るの、三聲續けて、きち／＼となくと火に祟るの、道を切ると悪いのと言ふ。……よく年より

が言つて聞かせた。——翻つて思ふに、自から忌み憚るやうに、人の手から遠ざけて、渠等を保

護する、心あつた古人の苦肉の計であらうも知れない。

一體が、一寸手先で、障子の破穴の様な顔を撫でる、額の白い洒落もので。……

越前國大野郡の山家の村の事である。春、小正月の夜、若いものは、家中みな遊びに出た。爺

さまも飲みに行く。うき世を済ました媼さんが一人、爐端に留守をして、暗い灯で、絲車をぶう

ぶうと、藁屋の雪が、ひらがなで音信れたやうな昔を思つて、絲を繰つて居ると、納戸の障子の

破れから、すき漏る風とともに、すつと茶色に飛込んだものがある。白面黄毛の不良青年。見紛

ふべくもない馳で。木尻座の筵に、ゆたかに、角のある小判形にこしらへて積んであつた餅を、一枚、もろ手、前脚で抱込むと、ひよいと翻して、頭に乗せて、一つ軽く蜿つて、伸びざまにもとの障子の穴へ消える。消えるかと思ふと、忽ち出て来て、黙つて又餅を頂いて、すつと引込む。「おゝゝ、悪い奴がの……そこが畜生の淺ましさぢや、澤山然うせいよ。手を伸ばいて障子を開ければ、すぐに人間に戻るぞの。」と、媼さんは、つれづれの夜伽にする氣で、巧な、その餅の運び方を、ほくそ笑をしながら見て居た。

若いものが歸ると、此の話をして、畜生の智慧を笑ふ筈が、豈計らんや、ベソを掻いた。餅は一切もなかつたのである。

程たつて、裏山の小山を一つ越した谷間の巖の穴に、堆く、その餅が蓄へてあつた。馳は一つでない。爐端の餅を頂くあとへ、手を揃へ、頭をならべて、幾百か列をなしたのが、一息に、山一つ運んだのであると言ふ。洒落れたもので。

……内に二三年遊んで居た、書生さんの質實な口から、然も實驗談を聞かされたのである。が、聊か巧に過ぎると思つた。

後に、春陽堂の主人に聞いた。——和田さんがまだ學校がよひをして、本郷彌生町の、ある下宿に居た時、初夏の夕、不忍の蘗も思はず、然りとて數寄屋町の鞆も思はず、下階の部屋の小窓に頼杖をついて居ると、目の前の庭で、牡鶏がけたましく、鳴きながら、羽を煽つて、ばたばたと二三尺飛上る。飛上つては引据ゑらるゝやうに、けたましく鳴いて落ちて、また飛上る。講釋師の言ふ、槍のつかひにて呪はれたやうだがと、ふと見ると、赤煉蛇であらう、たそがれに薄赤い、凡そ一間、六尺に餘る長蟲が、崖に沿つた納屋に尾をかくして、鎌首が鶏に迫る、あます處四五寸のみ。

和田さんは蛇を恐れない。

遣り放しの書生さんの部屋だから、直ぐにあつた。——杖を取るや否や、畜生と言つて、窓を飛下ると、何うだらう、たゞきもひしぎもしないうちに、其の蛇が、ばつと寸々に斷れて十あまりに裂けて、蜿々と散つて蠢いた。これには思はず度肝を抜かれて腰を落したさうである。が、蛇ではない。這つて肩車した、馳の長い列が亂れたのであつた。

大野の話も頷かれて、そのはたらきも察しらるゝ。

かの、(リツキ、チツキテビー)よ。わが馳將軍よ。いたづらに鳥など構ふな。毒蛇を咬倒したあとは、希くは鼠を獵れ。蠅では役不足であらうも知れない。きみは獸中の隼である。……

春着

大正十三年一月

あら玉の春着きつれて酔ひつれて

少年行と前がきがあつたと思ふ……こゝに拜借をしたのは、紅葉先生の俳句である。處が、その着つれてとある春着がおなじく先生の通帳を拜借によつて出来たのだから妙で、そこが話である。さきに秋冷相催し、次第に朝夕の寒さと成り、やがて暮が近づくと、横寺町の二階に日が當つて、座敷の明い、大火鉢の暖い、鐵瓶の湯の沸つた時を見計らつて、お弟子たちが順々、かく言ふそれがしも、もとよりで、襟垢、膝ぬけと言ふ布子連が畏まる。「先生、小清潔とまわりませんでも、せめて縞柄のわかりますのを、新年は一枚と存じます……恐れ入りますが、お帳面を。」「また濱野屋か。」神樂坂には、他に布袋屋と言ふ——今もあらう——呉服屋があつたが、此の濱野屋の方の主人が、でつぶりと肥つて、莞爾々々して居て、布袋と言ふ呼稱があつた。が、太鼓腹を突出して、でれりとして、團扇で雛妓に煽がせて居るやうなのではない。片膚脱ぎで日置流の弓を引く。獅子寺の大弓場で先生と懇意だから、従つて弟子たちに帳面が利いた。たゞし信用がないから直接では不可いのである。「去年の春のやつが盆を越して居るぢやないか。

だらしなく飲みたがつてばかり居るからだ。」「は、今度と言ふ今度は……」「お株を言つてら。——此の暮には吃と入れなよ。」「その癖、ふいと立つて、「一所に來な。」で、通へ出て、右の濱野屋で、御自分、めい／＼に似合ふやうにお見立て下すつたものであつた。

此の春着で、元日あたり、大して酔ひもしないのだけれど、目つきと足もとだけは、ふら／＼と四五人揃つて、神樂坂の通りをはしやいで歩行く。……若いのが威勢がい／＼から、誰も（帳面）を着て居るとは知らない。いや、知つて居たかも知れない。道理で、そこらの地内や横町へ入つても、つきとほしの筭で、褌を取つて、羽子を突いて居るのが、聲も掛けはしなかつた。割前勘定。乃ち蕎麥屋だ。と言つても、松の内だ。もりにかけとは限らない。たとへば、小栗があたり芋をすゝり、柳川がはしらを撮み、徳田があんかけを食べる。お酌なきが故に、敢て世間は怨まない。が、各々その懷中に對して、憤懣不平勃々たるものがある。従つて氣焰が夥しい。

此のありさまを、高い二階から先生が、あら玉の春着きつれて酔ひつれて

涙ぐましいまで、可憐い。

牛込の方へは、随分しばらく不沙汰をして居た。しばらくと言ふが幾年かに成る。このあひだ、水上さんに誘はれて、神樂坂の川鐵（鳥屋）へ、晩御飯を食べに出向いた。もう一人お連は、南

榎町へ浅草から引越した万ちゃん、二人番町から歩行いて、その榎町へ寄つて連立つた。が、あの、田圃の大金と仲店のかねだを橋がかりで歩行いた人が、しかも當日の發起人だと言ふからをかしい。

途中お納戸町邊の狭い道で、七八十尺切立ての白煉瓦に、崖を落ちる瀑のやうな龜裂が、杖を打つて、三條ばかり頂邊から走りかゝつて居るのには肝を冷した。その真下に、魚屋の店があつて、親方が威勢のいゝ向顔卷で、黄肌鮪にさしみ庖丁を閃かして居たのは偉い。……見た處は千丈の峰から崩れかゝる雪雪顔の下で薪を樵るより危かしいのに——此の度胸でないと復興は覺束ない。——ぐらゝと来るか、おツと叫んで、銅貨の財布と食麵麩と魔法壘を入れたバスケットを追取刀で、一々框まで飛び出すやうな卑怯を何うする。……私は大に勇氣を得た。

が、吃驚するやうな大景氣の川鐵へ入つて、たゞきの側の小座敷へ陣取ると、細露地の隅から覗いて、臆病神が顯はれて、迷路を探せや探せやと、電燈の瞬くばかり、暗い指さしをするには弱つた。まだ積んだまゝの雑具を繪屏風で劃つてある、さあお一杯は女中さんで、羅綾の袂なんぞは素よりない。たゞしその六尺の屏風も、飛ばばなどか飛ばざらんだが、屏風を飛んでも、駈出せさうな空地と言つては何處を向いても無かつたのであるから。……其の癖、酔つた。酔ふといゝ心持に陶然とした。第一この家は、むかし蕎麥屋で、夏は三階のもの干でビールを飲ませた

時分から引續いた馴染なのである。——座敷も、趣は變つたが、そのまゝ以前の佛が偲ばれる。……名ぶつの額がある筈だ。横額に二字、たしか(勤儉)とかあつて(彦左衛門)として、圓の中に、朱で(大久保)と云ふ印がある。「いかものも、あのくらゐに成ると珍物だよ。」と言つて、紅葉先生はその額が御最良だつた。——屏風にかくれて居たかも知れない。

まだ思ひ出す事がある。先生がこゝで獨酌……はつけたりで、五勺でうたゝねをする方だから御飯をあがつて居ると、隣座敷で盛んに艶談のメートルを揚げる聲がする。紛ふべくもない後藤宙外さんであつた。そこで女中をして近所で焼芋を買はせ、堆く盆に載せて、傍へあの名筆を以て、曰く「御浮氣どめ」プンと香つて、三筋ばかり蒸氣の立つ處を、あちら様から、おつかひもの、と持つて出た。本草には出て居まいが、案ずるに焼芋と餡パンは浮氣をとめるものと見える……が浮氣がとまつたか何うかは沙汰なし。たゞ坦懐なる宙外君は、此盆を譲りうけて、其のまゝに彫刻させて掛額にしたのであつた。

品 小
さて其夜こゝへ来るのにも通つたが、矢來の郵便局の前で、ひとりで吹き出した覺えがある。最も當時は青くなつて怯えたので、おびえたのが、尙ほ可笑い。まだ横寺町の玄關に居た時であ

る。「この電報を打つて來な。巖谷の許だ、局待にして、返辭を持つて歸るんだよ。急ぐんだよ。」
 で、局で、局待と言ふと、局員が字數を算へて、局待には二字分の符號がある。此のまゝだと、
 もう一音信の料金を、と言ふのであつた。たしか、市内は一音信金五錢で、局待の分とも、私
 は十錢より預つて出なかつた。そこで先生の草がきを見ると「キルナラタズネル」一字のことだ。
 私は考一考して而して辭句を改めた。「キルナラサガス」此れなら、局待の二分がきちんと入る、
 うまいでせう。——巖谷氏の住所は其の頃麴町元園町であつた。が麴町にも、高輪にも、千住に
 も、待つこと多時にして、以上返電がこない。今時とは時代が違ふ。山の手の局閑にして、赤城
 の下で鶏が鳴くのをぼかんと聞いて、うつとりとしてゐると、なゝめ下りの坂の下、あまぎけや
 の町の角へ、何と、先生の姿が猛然としてあらはれたらうではないか。

唯見て飛出すのと、殆ど同時に「馬鹿野郎、何をして居る。まるで文句が分らないから、巖谷
 が俥で駈けつけて、もう内へ來てゐるんだ。うつそりめ、何をして居る。皆が、車に轢かれやし
 ないか、馬に蹴飛ばされやしないかと案じて居るんだ。」私は青くなつた——（居るなら訪ねる。）
 を——（要るなら捜す。）——巖谷氏のわけの分らなかつたのは無理はない。紅葉先生の辭句を修
 正したものは、恐らく文壇に於て私一人であらう。そのかはり目の出るほどに叱られた。——何、
 五錢ぐらゐ、自分の小遣ひがあつたらうと、申數をおつしやい。それだけあれば、もう早くに煙

草と焼芋と、大福餅になつて居た。煙草五匁一錢五厘。焼芋が一錢で大六切、大福餅は一枚五厘
 であつた。——其處で原稿料は？……飛んでもない、私はまだ一枚も稼ぎはしない。先生のは——
 —内々知つてゐるが内證にして置く。……

まだ可笑しい事がある、ゴツと後で……此の番町の湯へ行くと、かへりがけに、錢湯の亭主が
 「先生々々」丁ど午ごろだから他に一人も居なかつた。「一寸お教へを願ひたいのでございます
 が。」先生で、お教へを、で、私はぎよつとした。亭主極めて慇懃に「え、（おかゆ）とは何う書
 きますでせうか。」「あ、其れはね、弓、弓やつて、真中へ米と書くんです。弱しと間違つては
 不可いのです。」何と、先生の得意想ふべし。實は、弱を、米の兩方へ配つた粥を書いて、以前、
 紅葉先生に叱られたものがある。「手前勝手に字を拵へやがつて——先人に對して失禮だ。」その
 叱られたのは私かも知れない。が、其の時の覚えがあるから、あたりを拂つて悠然として教へた。
 ——今はもう代は替つた——亭主は感心もしないかはりに、病身らしい、お粥を食べたさうな顔
 をして居た。女房が評判の別嬪で。——此のくらゐの間違ひのない事を、人に教へた事はないと
 思つた。思つたなりに年を経た。實際年を経た。つい近い頃である。三馬の浮世風呂を讀むうち
 に、だしぬけに目白の方から、釣鐘が鳴つて來たやうに氣がついた。湯屋の聞いたのは（岡湯）な
 のである。

少々話が通りすぎた、あとへ戻らう。

其の日、万ちゃんを誘つた家は、以前、私の住んだ南榎町と同町内で、奥へ辨天町の方へ寄つて居る事はすぐに知れた。が、家々も立て込んで、従つて道も狭く成つたやうな気がする。殊に夜であつた。むかし住んだ家は一寸見當が着かない。さうだらう兩側とも生垣つゞきで、私の家などは、木戸内の空地に井戸を取りまいて李の樹が幾本も茂つて居た。李は庭から背戸へ續いて、小さな林といつていゝくらゐ。あの、底に甘みを帯びた、美人の白い膚のやうな花盛りを忘れない。雨には悩み、風には傷み、月影には微笑んで、淨濯明粧の面影を匂はせた。……唯一間よりなかつた、二階の四疊半で、先生の一句がある。

紛胸の乳房かくすや花李

ひとへに白い。乳くびの桃色をさへ、蔽ひかくした美女にくらべられたものらしい。……此の白い花の、散つて葉に成る頃の、その毛蟲の夥多しと言つては、それは又ない。よくも、あの水を飲んだと思ふ。一釣瓶ごとに榎の實のこぼれたやうな赤い毛蟲を充滿に汲上げた。しばらくすると、此の毛蟲が、盡く眞白な蝶になつて、枝にも、葉にも、再び花片を散らして舞つて廻る。幾千とも數を知らない。三日つゞき、五日、七日つゞいて、繚り且つ飛んで、恋にも懶干に

も、暖かな雪の降りかゝる風情を見せたのである。

やがて實の頃よ。——就中、南の納戸の濡縁の籬際には、見事な巴旦杏があつて、大きな實と言ひ、色といひ、艶なる波斯の女の爛熟した裸身の如くに薫つて生つた。いまだと早速千匹屋へでも卸しさうなものを、彼の川柳が言ふ、(地女は振りもかへらぬ一盛り)それ、意氣の壯なるや、縁日の唐黍は買つて嚙つても、内で生つた李なんか食ひはしない。一人として他様の娘などに、こだはるものはなかつたのである。

が、いまは開けた。その頃、友だちが来て、酒屋から麥酒を取ると、泡が立たない、泡が、麥酒は決して泡をくふものはない。が、泡の立たない麥酒は稀有である。酒屋にたゞすと、「抜く時倒にして、ぐん／＼お振りなさい、然うすると泡が立ちますよ、へい。」と言つたものである。十日、腹を瀉さなかつたのは僥倖と言ひたい——今はひらけた。

たゞ、惜しい哉。中の丸の大樹の枝垂櫻がもう見えぬ。新館の新潮社の下に、吉田屋と云ふ料理店がある。丁度あの前あたり——其後、晝間通つた時、切株ばかり、根が残つたやうに見た。盛の時は梢が中空に、花は町を蔽うて、そして地摺に枝を曳いた。夜もほんのりと紅であつた。昔よりして界限では、通寺町保善寺に一樹、薬店の光照寺に一樹、とともに、三枚振袖、絲櫻の名木と、稱へられたさうである。

向う側の湯屋に柳がある。此間を、男も女も、一頃揃つて、縮緬、七子、羽二重の、黒の五紋を着て往き來した。湯へ行くにも、蕎麥屋へ入るにも紋着だつた事がある、こゝだけでも春の雨、また朧夜の一時代の面影が思はれる。

ついで、その一時代前には、そこは一面の大竹藪で、氣の弱い旗本は、いまの交番の處まで晝も駈け抜けたと言ふのである。酒井家に入りの大工の大棟梁が授けられて開拓した。藪を切ると、蛇の棄て場所にこまつたと言ふ。小さな堂に籠めて祭つたのが、のちに俱樂部の築山の蔭に谷のやうな崖に臨んであつたのを覚えて居る。池、亭、小座敷、寮ごのみで、その棟梁が一度料理店を其處に開いた時のなごりだと聞いた。

棧の亭で、遙にボン／＼とお掌が鳴る。へーい、と母家から女中が行くと、……誰も居ない。池の梅の小座敷で、トーンと灰吹を敲く音がする、娘が行くと、……影も見えない。——その料理屋を、狸がだましたのださうである。眉唾。眉唾。

尤もいま神樂坂上の割烹(魚徳)の先代が(威張り)と呼ばれて、「おう、うめえ魚を食はねえか」と、酔ばらつて居るから盤臺は何處かへ忘れて、天秤棒ばかりを振りまはして歩行いた頃で、……

矢來邊の夜は、たゞ遠くまで、榎町の牛乳屋の納屋に、トーン／＼と牛の登音のするのが響いて、今にも——いわしこう——酒井家の裏門あたりで——眞夜中には——鯛こう——と三聲呼んで、形も影も見えないと云ふ。……怪しい聲が聞えさうな寂しさであつた。

春の夜の鐘うなりけり九人力

それは、その李の花、花の李の頃、二階の一室、四疊半だから、狭い縁にも、段子の上の段にまで居餘つて、わたしたち八人、先生と合はせて九人、一夕、俳句の會のあつた時、興に乗じて、先生が、すゝ色の古壁にぶつつけがきをされたものである。句の傍に、おの／＼の名がしるしてあつた。……神樂坂うらへ、私が引越す時、そのまゝ残すのは惜かつたが、壁だから何うにも成らない。——いゝ鹽梅に、一人知り合があとへ入つた。——埃は掛けないと言つて、大切に居た。

——五月雨の陰氣な一夜、坂の上から飛蒐るやうなけたましい登音がして、格子をがらりと突開けたと思ふと、神樂坂下の其の新宅の二階へ、いきなり飛上つて、一驚を吃した私の机の前でハタと顔を合はせたのは、知合のその男で……眞青に成つて居る。「大變です。」「……」「化ものが出ます。」「……」「先生の壁のわきの、あの小窓の處へ机を置いて、勉強をして居りますと……慙う、じり／＼と燈が暗く成りますから、ふいと見ますと、障子の硝子一杯ほどの猫の顔が、」

と、身ぶるひして、「顔ばかりの猫が、李の葉の眞暗な中から——其の大きさと云つたらありません。そ、それが五分と間がない、目も鼻も口も一所に、僕の顔とびつたりと附着きました、——あなたのお住居の時分から怪猫が居たんでせうか……一體猫が大嫌ひで、いえ可恐いので。」それならば爲方がない。が、怪猫は大袈裟だ。五月闇に、猫が屋根をつたはらないとは誰が言ひ得よう。……窓の燈を覗かないとは限らない。しかし、可恐い猫の顔と、不意に顔合せをしたのでは、驚くも無理はない。……「それで、矢來から此處まで。」「え。」と息を引いて、「夢中でした……何しろ、正體を、あなたに伺はうと思つたものですから。」今は昔、山城介三善春家は、前の世の蝦蟇にてや有けむ、蛇なん極く恐ける。——夏の比、染殿の辰巳の山の木隠れに、君達、二三人ばかり涼んだ中に、春家も交つたが、此の人の居たりける傍よりしも、三尺許りなる烏蛇の這出たりければ、春家はまた気がつかなくつた。處を、君達、それ見よ春家。と、袖を去る事一尺ばかり。春家顔の色は朽し藍のやうに成つて、一聲あつと叫びもあへず、立たんとするほどに二度倒れた。すはだして、その染殿の東の門より走り出で、北さまに走つて、一條より西へ、西の洞院、それから南へ、洞院下に走つた。家は土御門西の洞院にありければで、駆け込むと齊しく倒れた、と言ふのが、今昔物語りに見える。遠きその昔は知らず、いまの男は、牛込南横町を、東狀に走つて、矢來中の丸より、通寺町、肴町、毘沙門前を走つて、南に神樂坂上を走りおりて、

その下にありける露地の家へ飛込んで……打倒れけるかはりに、二階へ駈上つたものである。餘り眞面目だから笑ひもならない。「まあ、落着きたまへ。——景氣づけに一杯。」「いゝえ、歸ります。——成程、猫は屋根つたひをして、窓を覗かないものとは限りません。——分りました。——いえ然うしては居られません。僕がキヤツと言つて、いきなり飛出したもんですから、彼が。」と言ふのが情婦で、「一所にキヤツと言つて、跣足で露地の暗がりを飛出しました。それつ切音信が分りませんから。」慌てて歸つた。——此の知合を誰と化する。やがて報知新聞の記者、いまは代議士である、田中萬逸君その人である。反對黨は、ひやかしてやるがいゝ。が、その夜、もう一度怯かされた。眞夜中である。その頃階下に居た學生さんが、みし／＼と二階へ來ると、寢床だつた私の枕もとで大息をついて、「變です。……どうも變なんです——縁側の手拭掛が、ふはりと手拭を掛けたまゝで歩行んです。……トン／＼トン、たゝらを踏むやうに動きましたつけ。おやと思ふと斜かひに、兩方へ開いて、ギクリ、シヤクリ、ギクリ、シヤクリとしながら、後退りをするやうにして、あ、あ、と思ふうちに、スーと、あの縁の突あたりの、戸袋の隅へ消えるんです。變だと思ふと、また目の前へ手拭掛がふはりと出て……出ると、トントントンと踏んで、ギクリ、シヤクリ、とやつて、スー、何うにも氣味の悪さつたらなないので。——一度見てみて下さい。……矢來の猫が、田中君について來たんぢやあないんでせうか知ら。」五月雨はじと／＼

と降る、外は暗夜だ。私も一寸悚然とした。

は、あ、此の怪談を遣りたさに、前刻狸を持出したな。——いや、敢て然うではない。

何う言ふものか、此のごろ私のおともだちは、おばけと言ふと眉を擧める。

口惜いから、紅葉先生の怪談を一つ聞かせよう。先生も怪談は嫌ひであつた。「泉が、又はじめたぜ。」その唯一つの怪談は、先生が十四五の時、うらゝかな春の日中に、一人で留守をして、茶の室にゐらると、臺所のお竈が見える。……竈の角に、らくがきの蟹のやうな、小さなかけめ

があつた。それが左の角にあつた。が、陽炎に乗るやうに、すつと右の角へ動いてかはつた。「唯それだけだよ。しかし今でも不思議だよ。」との事である。——猫が窓を覗いたり、手拭掛が踊つたり、竈の蟹が這つたり、ひよいと賽を振つて出たやうである。春だからお子供衆——に一寸……

……化もの雙六……

なき柳川春葉は、よく罪のない嘘を言つて、うれしがつて、けろりとして居た。——「按摩あ……鍼ツ」と忽ち噛みつきさうに、霜夜の横寺の通りで喚く。「あ、あれはね（吼え按摩）と云つてね、矢來ぢや（鯛こ）とおんなじに不思議の中へ入るんだよ」「ふう」などと玄關で焼芋だつた

ものである。花袋、玉若兩君の名が、そちこち雑誌類に見えた頃、よそから歸つて來るとだしぬけに「きみ、聞いて來たよ。——花袋と言ふのは上州の或大寺の和尚なんだ、花袋和尚。僧正と

もあるべきが、女のために詩人に成つたんだとね。玉若と言ふのは日本橋室町の葉茶屋の若旦那

だとさ。」この人のいふのだからあてには成らないが、いま座敷うけの新講談で評判の鳥選子のお父さんは、千石取の旗下で、攝津守、有鎮とかいて有鎮とよむ。村山攝津守有鎮——邸は矢來の

郵便局の近所にあつて、鳥選とは私たちが懇意だつた。渾名を鳶の鳥選と言つたが、厚眉隆鼻ハイカラのクリスチャンで、そのころ拂方町の教會を背負つて立つた色男で……お父さんの立派な藏

書があつて、私たちはよく借りた。——そのお父さんを知つて居るが、攝津守だか、有鎮だか、こゝが柳川の説だから當には成らない。その攝津守が、私の知つてる頃は、五十七八年の年配、人

品なものであつた。つい、その頃、門へ出て——秋の夕暮である……何心もなく町通りを視めて立つと、箒目の立つた町に、ふと前後に人足が途絶えた。その時、矢來の方から武士が二人來て、

二人で話しながら、通寺町の方へ、すつと通つた……四十ぐらゐのと二十ぐらゐの若侍とで。——唯見るうちに、郵便局の坂を下りに見えなくなつた。あゝ不思議な事かと思ひ出すと、三十幾

年の、維新前後に、おなじ時、おなじ節、おなじ門で、おなじ景色に、おなじ二人の侍を見た事がある、と思ふと、悚然としたと言ふのである。

此は少しくもの凄い。……
初春の事だ。おばけでもあるまい。

春着につけても、一つ艶つぽい處をお目に掛けよう。

時に、川鐵の向うあたりに、(水何)とか言つた天麩羅屋があつた。くどいやうだが、一人前、なみで五錢。……横寺町で、お嬢さんの初のお節句の時、私たちは此を御馳走に成つた。その時分、先生は御質素なものであつた。二十幾年、尤も私なぞは、今もつて質素である。此の段は、勤儉と題して、(大久保)の印を捺しても可い。

その天麩羅屋の、しかも蛤鍋三錢と云ふのを狙つて、小栗、柳川、徳田、私……宙外君が加はつて、大擧して押上つた、春寒の午後である。お銚子は入が悪くつて、しかも高値いと言ふので、式だけ誂へたほかには、町の酒屋から、かけにして番を口説いた一升入の貧乏徳利を誰かが外套(註。おなじく月賦……這個まつくろなのを一着して、のそくと歩行く奴を、先生が嘲つて——月府玄蟬。)の下へ忍ばした勢だから、氣焰と、殺風景推して知るべしだ。……酒氣が天井を衝くのではない、陰に籠つて疊の焼けこげを轉げ廻る。あつ燗で火の如く悪酔闌なる最中。お連様つ——と下階から素頓興な聲が掛ると、「皆居るかい。」と言ふ紅葉先生の聲がした。まさか、壺皿はなかつたが、驚破事だと、貧乏徳利を羽織の下へ隠すのがある、誂子を股へ引挟んで膝小僧をおさへるのがある、鍋へ盃洗の水を打込むのがある。私が手をつけて畏まると、先生にはお客分で仔細ないのに、宙外さんも僅に巻かれて、肩を四角に坐り直つて、酒のいきを、はあはあ

と、専らピンと撥ねた髯を採んだ。

——處へ……せり上つておいでなすつた先生は、舞臺にしても見せたかつた。すつきり男ぶりのいゝ處へ、よそゆきから歸宅のまゝの、りうとした着つけである。勿論留守を狙つて泳ぎ出したのであつたが——揃つて紫星堂(塾)を出たと聞いて、その時々弟子の懐中は見透しによく分る。明進軒か島金、飛上つて常磐(はこが入る)と云ふ處を、奴等の近頃の景氣では——蛤鍋と……當りがついた。「いや、盛だな。」と、缺け火鉢を、鐵火にお召の股へ挟んで、手をかざしながら莞爾して、「後藤君、お樂に——皆も飲みなよ、俺も割で一杯やらう。」殿様が中間部屋の趣がある。恐れながら、此時、先生の風采想ふべしで、「懐中はいゝぜ。」と手を敲かるゝ。手に應じて、へいと、どしんと上つた女中が、次手に薄暗いからランプをつけた、釣ランプ(……あゝ久しいが今だつてランプなしには居られますか。)それが丁ど先生の肩の上の見當に掛つて居た。面疱だらけの女中さんが燐寸を摺つて點けて、挿ぼやをさすと、フツと消したばかり、まだ火のついたまゝの燃さしを、ボンと斜つかひに投げた——(まつたく、お互が、所帯を持つて、女中の此には惱まされた、火の用心が悪いから、それだけはよしなよ。はい、と言ふ口の下から、つけさしのマッチをボンがお定まり……)唯、先生の膝にプスツと落ちた。「女中や、お手柔かに頼むぜ。」と先生の言葉の下に、ゑみわれたやうな顔をして、「惚れた證據だわよ。」やや、

と皆が顔を見る。……「惚れたに遠慮があるものかッてねえ、……てね、……ねえ。」と甘つたれる。——あ、あ、あ危ない、棚の破鍋が落ちかゝる如く、剩へべた／＼と崩れて、薄汚れた紀州ネルを膝から溢出させたまゝ、……あゝ……あゝ……あゝ……行つた！……男振は音羽屋（特註、五代目）の意気に、團十郎の滋味が加つたと、下町の女だちが評判した、御病氣で面瘦せては、あだにさへも見えなすつた先生の肩へ、……あゝ、噛りついた。

よゝつツと、宙外君が堪まらず奇聲と云ふのを上げるに連れて、一同が、……おめでたうと稱へた。

それよりして以來——痼癢でなく、憤りでなく、先生がいゝ機嫌で、しかも警句雲の如く、弟子をならべて罵倒して、勢當るべからざる時と言ふと、つゞき合つて、目くばせして、一人が少しく座を罷り出る。「先生……（水）……」「何。」「蛤鍋へおともは如何で。」「馬鹿を言へ。」「いえ、大分、女中さんがこがれて居りますさうでございまして。」傍から、「えゝ、煩つて居るほどだと申します事ですから。……かねて、おれを思ふ女ならば、目つかちでも鼻つかけでもと言ふ、御主義？であつた。——

紅葉先生、その時の態度は……
采菊東籬下

悠然見南山

湯どうふ

大正十三年二月

昨夜は夜ふかしをした。

今朝……と云ふがお午ごろ、炬燵でうと／＼して居ると、いつも来て囀る、おてんばや、いたづらツ兒の雀たちは、何處へすツ飛んだか、ひつそりと静まつて、チイ／＼と、甘えるやうに、寂しさうに、一羽目白鳥が鳴いた。

いまが花の頃の、裏邸の枇杷の樹かと思ふが、もつと近い。屋根には居まい。ぢき背戸の小さな椿の樹らしいなと、そつと縁側へ出て立つと、その枇杷の方から、斜にさつと音がして時雨が来た。……

品の
椿の梢には、つい此のあひだ枯萩の枝を刈つて、その時引残した朝顔の蔓に、五つ六つ白い實のついたのが、冷く、はら／＼と濡れて行く。
考へても見たが可い。風流人だと、鶯を覗くにも行儀があらう。それ鳴いた、障子を明けたの

では、めじろが熟として居よう筈がない。透かしても、何處にもその姿は見えないで、濃い黄に染まつた銀杏の葉が、一枚ひら／＼と飛ぶのが見えた。

懐手して、肩が寒い。

かうした日は、これから霽にも、雪にも、いつもいゝものは湯豆腐だ。——昔からもの本にも、人の口にも、音に響いたものである。が、……此の味は、中年からでないと分らない。誰方の兒たちでも、小兒で此が好きだと言ふのは餘りなからう。十四五ぐらゐの少年で、僕は湯豆腐が可いよ、なぞは——説明に及ばず——親たちの注意を要する。今日のお茶は豆府と云へば、二十時分のまづい顔は當然と言つて可い。

能樂師、松本金太郎叔父てきは、湯豆腐はもとより、何うした豆府も大のすきで、従つて家中が皆嗜んだ。その叔父は十年ばかり前、七十一で故人になつたが、尙ほその以前……米が兩に六升でさへ、世の中が騒がしいと言つた、諸物價の安い時、月末、豆府屋の拂が七圓を越した。……どうも平民は、すぐに勘定にこだはるやうでお恥かしいけれども、何事も此の方が早分りがある。……豆府一挺の値が、五厘から八厘、一錢、乃至二錢の頃の事である。……食つたな！何うも。……豆府屋の通帳のあるのは、恐らく松本の家ばかりだらうと言つたものである。いまの長もよく退治る。——お銚子なら、まだしもだが、催、稽古など忙しい時だと、ビールで湯

どうふで、見る／＼うちに三挺ぐらゐるべりりと平らげる。當家のは、鍋へ、そのまゝ箸を入れるのではない。ぶつ／＼と言ふやつを、椀に裝出して、猪口のしたちで行る。何十年來馴れたもので、つゆ加減も至極だが、しかし、その小兒たちは、皆知らん顔してお魚で居る。勿論、そのお父さんも、二十時代には、右同斷だつたのは言ふまでもない。

紅葉先生も、はじめは「豆府と言文一致は大嫌だ。」と揚言なすつたものである。まだ我樂多文庫の發刊に成らない以前と思ふ……大學へ通はるゝのに、飯田町の下宿においでの際、下宿の女房さんが豆府屋を、とうふ屋さんと呼び込む——小さな下宿でよく聞える——聲がすると、「媼さん、又豆府か。そいつを食はせると斬つ了ふぞ。」で、豫てこのみの長船の鞘を拂つて、階子段の上を踏鳴らしたと……御自分ではなさらなかつたが、當時のお友だちもよく話すし、おとしよりたちも然う言つて苦笑をされたものである。身體が弱くおなりに成つてからは、「湯豆腐の事だ。……古人は偉い。いゝものを拵へて置いてくれたよ。」と、然うであつた。

品 小
あゝ、命日は十月三十日、……その十四五日前であつたと思ふ。……お二階の病床を、久しぶりで、下階の八疊の縁さきで、風冷かな秋晴に、湯豆腐を召がりながら、「おい、そこいらに糞蟲が居るだらう。……見な。」「はッ。」と言つた昨夜の昨夜のお夜伽から續いて傍に居た、私は、いきな

り、庭へ飛出したが、一寸廣い庭だし、樹もいろ／＼ある。葉もまだ落ちない。形は何處か、影も見えない。豫て氣短なのは知つて居る。特に御病氣。何かのお慰に成らうものを、早く、と思ふが見當らない。蓑蟲戀しく途に迷つた。「其處に居る、……其の百日紅の左の枝だ。」上野の東照宮の石段から、不忍の池を遙に、大學の大時計の針が分明に見えた腫である。かゝる時にも鋭かつた。

睫毛ばかりに附着いて、小さな枯葉をかぶりながら、あの蓑蟲は掛つて居た。そつとつまんで、葉をそのまゝ、ごそりと掌に据ゑて行くと、箸を片手に、おもやせたのが御覽なすつて、「ゆうべは夜中から、よく鳴いて居たよ——ちゝ、ちゝ——と……秋は寂しいな——よし。其方へやつときな。……殺すなよ。」小栗も傍から手をついて差覗いた。「はい、葉の上へ乗せて置きます。」軽く頷いて、先生が、「お前たち、銚子をかへな。」……ちゝ、ちゝ、はゝのなきあとに、ひとへにたのみ參らする、その先生の御壽命が。……玄關番から私には幼馴染と云つてもいい、柿の木の下の飛石づたひに、うしろ向きに、袖はそのまゝ、蓑蟲の蓑の思がしたのであつた。

たゞし、その頃は、まだ湯豆腐の味は分らなかつた。眞北には、此の湯豆腐、たのしみ鍋、あをやぎなどと言ふ名物があり、名所がある。辰巳の方には、ばか鍋、蛤鍋などと言ふ逸物、一類があると聞く。が、一向に場所も方角も分らない。内證でその道の達者にたゞすと、曰く、鍋で

一杯やるくらゐの餘裕があれば、土手を大門とやらへ引返す。第一歸りはしない、と言つた。格言ださうである。皆若かつた。いづれも二十代の事だから、湯豆腐で腹はくちく成らぬ。餅の大切なだるま汁粉、それも一ぜん、おかはりなし。……然らざれば、かけ一杯で、蕎麥湯をだぶだぶとお代りをするのださうであつた。

洒落れた湯豆腐にも可哀なのがある。私の知りあひに、御旅館とは表看板、實は安下宿に居るのがあつたが、秋のながあめ、陽氣は悪し、いやな病氣が流行ると言ふのに、膳に小鯛の焼いたのや、生のまゝの豆腐をつける。……そんな不料簡なのは冷やつことは言はせない、生の豆腐だ。見てもふるへ上るのだが、食はずには居られない。ブリキの鐵瓶に入れて、ゴトリ／＼と煮て、いや、うでて、そつと醬油でなくづしに舐めると言ふ。——恚う成つては、湯豆腐も慘憺たるものである。……

……などと言ふ、私だつて、湯豆腐を本式に味ひ得る意氣なのではない。一體、これには、きざみ葱、たうがらし、大根おろしと言ふ、前裁のつはもの立派な加勢が要るのだけれど、これも生だから私はこまる。……その上、式の如く、だし昆布を鍋の底へ敷いたのでは、火を強くしても、何うも煮えがおそい。ともすると、ちよろ／＼、ちよろ／＼と草の清水が湧くやうだから、豆腐を下へ、あたまから昆布を被せる。即ち、ぐら／＼と煮えて、蝦夷の雪が板昆布をかぶつて

踊を踊るやうな處を、ひよいと扱んで、はねを飛ばして、あつゝと慌てて、ふツと吹いて、するりと頼張る。人が見たらをかきからうし、お聞きになつても馬鹿々々しい。

が、身がつてではない。味はとにかく、ものの生ぬるいよりは此の方が増だ。

時々、婦人の雑誌の、お料理方を覗くと、然るべき研究もして、その道では、一端、慢らしいのの投書がある。たとへば、豚の肉を細くたゝいて、挿鉢であたつて、しやくしで掬つて、掌へおせて、だんごにまるめて、うどん粉をなすつてそれから捏ねて……あゝ、待つて下さい、もしもし……その手は洗つてありますか、爪はのびて居ませんか、爪のあかはありませんか、とひもじい腹でも言ひたく成る、のが澤山ある。

浅草の一女として、——内ぢやあ、うどんの玉をかつて、油揚と葱を刻んで、一所にぐらぐら煮て、ふツ／＼とふいて食べます、あつい處がいゝのです。——何を隠さう、私は此には岡惚をした。

いや、色氣どころか、ほんたうに北山だ。……湯どうふだ。が、家内の財布じりに當つて見て、安直な鯛があれば、……魴鯉でもいい、……希くは菽乳羹にしたい。

しぐれは、いまのまに飲んで、薄日がさす……楓の小枝に残つた、五葉ばかり、もみちのぬれ色は美しい。こぼれて散るのは惜い。手を伸ばせば、狭い庭で、すぐ届く。
本箱をさがして、紫のおん姉君の、第七帖を出すのも仰々しからう。……炬燵をこつてあるきさうな、膝栗毛の續、木曾街道の寢覺のあたりに、一寸はさんで……

二三羽——十二三羽

大正十三年四月

引越しをする毎に、「雀は何うしたらう。」もう八十幾つで、耳が遠かつた。——その耳を熟と澄ますやうにして、目をうつとりと空を視て、火桶にちよこんと小さく居て、「雀は何うしたらうの。」引越しをする毎に、祖母の然う呟いたことを覚えて居る。「祖母さん、一所に越して来ますよ。」當てづつばに氣安めを言ふと、「おゝ、然うかの。」と目敏を深く、ほく／＼と頷いた。其のなくなつた祖母は、いつも佛の御飯の残りだの、洗ひながしのお飯粒を、小窓に載せて、雀を可愛がつて居たのである。

品 小
私たちの一向に氣のない事は——はれて雀のものがたり——それで嵐雪の句は知つて居ても、今朝も囀つた、と心に留めるほどではなかつた。が、少からず愛惜の念を生じたのは、おなじ麴

町だが、土手三番町に住つた頃であつた。春も深く、やがて梅雨も近かつた。……庭に柿の老樹が一株。遺放しに手入れをしないから、根まはり雑草の生えた飛石の上を、ちよこ／＼とよりは、ふよ／＼と雀が一羽、羽を擴げながら歩行いて居た。家内がつか／＼と跣足で下りた。いけずな女で、確に小雀を認めたらしい。チチチチ、チユ、チユツ、すぐに掌の中に入つた。「引摺んぢや不可い、そつと／＼」。此が驚か、かなりやだと、傳統的にも世間體にも、それ鳥籠をと、内にはないから買ひに出る處だけれど、對手が、のりを舐める代もので、お安く扱はれつけて居るのだから、臺所の目筈で其の南の縁へ先づ伏せた。——處で、生捉つて籠に入ると、一時と經たないうちに、すぐに薩摩芋を突ついたり、柿を吸つたりする、目白鳥のやうに早く人馴れをするのではない。雀の兒は容易く餌につかぬと、祖母にも聞いて知つて居たから、此のまだ草にふらついで、飛べもしない、ひよわなものを、餌多さしては成らない。——屹と親雀が来て餌を飼はう。それには、縁では可恐がるだらう。……で、もとの飛石の上へ伏せ直した。母鳥は直ぐに来て飛びついた。もう先刻から庭樹の間を、けた／＼ましく鳴きながら、彼方へ飛び、此方へ飛び、飛騨いでゐたのであるから。障子を開けたまゝで覗いて居るのに、仔の可愛さには、邪険な人間に對する恐怖も忘れて、目筈の周圍を二三尺、はらはらくるくると廻つて飛ぶ。ツ、と筈の目へ嘴を入れたり、颯と引いて

品 小
横に飛んだり、飛びながら上へ舞立つたり。其のたびに、筈の中の仔雀のあこがれやうと言つたらない。あの聲がキイと聞えるばかり鳴き絶つて、引切れさうに胸毛を震はす。利かぬ羽を渦にして抱きつかうとするのは、おつかさんが、嘴を筈の目に、その……ツ、と入れては、ツイと引く時である。
見ると、小さな餌を、蟲らしい餌を、親は嘴に銜へて居るのである。筈の中には、乳離れをせぬ嬰兒だ。火のつくやうに泣立てるのは道理である。處で筈の目を潛らして、口から口へ哺めるのは——人間の方でも其の計略だつたのだから——いと容易い。
だのに、餌を見せながら鳴き叫ばせつゝ身を退いて飛廻るのは、あまり利口でない人間にも的確に解せられた。「あかちゃんや、あかちゃんや、うま／＼をあげませう、其處を出ておいで。」と言ふのである。他の手に封じられた、仔は何うして、自分で筈が抜けられよう？ 親は何うして、自分で筈を開けられよう？ 其の思は何うだらう。
私たちは、しみ／＼、いとしく可愛く成つたのである。
石も、折箱の蓋も撥飛ばして、筈を開けた。「御免よ。」「御免なさいよ。」と、雀の方より、此方が顔を見合はせて、悄氣げつゝ座敷へ引込んだ。
少々極が悪くつて、しばらく、背戸へ顔を出さなかつた。

庭下駄を揃へてあるほどの所帯ではない。玄關の下駄を引抓んで、晩方背戸へ出て、柿の梢の一つ星を見ながら、「あの雀は何うしたらう。」ありたけの飛石——と言つても五つばかり——を漫に渡ると、濕けた窪地で、すぐ上が葱や苔、龍の髻の石垣の崖に成る、片隅に山吹があつて、こんもりした躑躅が並んで植つて居て、垣どりの灯が、ちら／＼と透くほどに二三輪咲残つた……その茂つた葉の、蔭も深くはない低い枝に、雀が一羽、たよりなげに宿つて居た。正に前刻の仔に違ひない。……様子が、土から僅か二尺ばかり。これより上へは立てないので、こゝまで連れて来た女親が、わりなう預けて行つたものらしい……敢て預けて行つたと言ひたい。悪戯を詫びた私たちの心を汲んだ親雀の氣の優しさよ。……その親たちの時は何處？……この嬰兒ちゃんは寂しさうだ。

土手の松へは夜鷹が来る。築土の森では木兎が鳴く。……折から宵月の頃であつた。親雀は、可恐いものの目に觸れないやうに、成るだけ、葉の暗い中に隠したに違ひない。もとより藁屑も綿片もあるのではないが、薄月が映すともなしに、ぼつと、その仔雀の身に添つて、霞のやうな氣が籠つて、包んで圓く明かつたのは、親の情の籠氣ならず、輪光を顯はした影であらう。「一寸」「何さ。」手招きをして、「来て見なよ。」家内を呼出して、兩方から、そつと、顔を差寄せると、じつとしたのが、微に黄色な膚を傾けた。この柔な胸毛の色は、さし覗いたものの襟よりも

白かつた。

夜ふかしは何、家業のやうだから、その夜はやがて明くるまで、野良猫に注意した。彼奴が後足で立てば届く、低い枝に、預つたからである。

朝寝はしたし、ものに紛れた。午の庭に、隈なき五月の日の光を浴びて、黄金の如く、銀の如く、飛石の上から、柿の幹、躑躅、山吹の上下を、二羽縦横に飛んで舞つて居る。ひらく、ちらちらと羽が輝いて、三寸、五寸、一尺、二尺、草樹の影の伸びるとともに、親雀につれて飛び習ふ、仔の翼は、次第に、次第に、上へ、上へ、自由になく成つて、卵の花垣の丈を切るのが、四五度馴れると見るうちに、崖をなぞへに、上町の樹の茂りの中へ飛んで見えなく成つた。

眞綿を黄に染めたやうな、あの翼が、恚う速に飛ぶのに馴れるか。且つ感じつゝ、私たちは飽かずに視めた。

あとで、臺所からかけて、女中部屋の北窓の小窓の小縁に、行つたり、來たり、出入りするの

は、五六羽、八九羽、どれが、その親と仔の二羽だかは紛れて知れない。

——二三羽、五六羽、十羽、十二三羽。こゝで雀たちの數を言つた次手に、それ／＼の道の、學者方までもない、一寸わけ知りの御人に伺ひたい事がある。

別の儀でない。雀の一家族は、おなじ場所では餘り澤山には殖えないものなのであらうか知

ら？ 御存じの通り、稻塚、稻田、粟黍の實る時は、平家の大軍を走らした水鳥ほどの羽音を立てて、騒行き、畔行くものを驚かす、夥多しい群團を爲す。鳴子も引板も、半ば——此がための備だと思ふ。むかしのもの語にも、年月の経る間には、おなじ背戸に、孫も彦も群る筈だし、第一椋鳥と塙を賭けて戦ふ時の、雀の軍勢を思ひたい。よしそれは別として、長年の間には、もう少しと家族が榮えようと思ふのに、十年一日と言ふが、實際、——その土手三番町を、やがて、いまの家へ越してから十四五年になる。——あの時、雀の親子の情に、いとしさを知つて以來、申出るほどの、さしたる御馳走でもないけれど、お飯粒の少々は毎日缺かさず撒いて置く。たとへば旅行をする時でも、……「火の用心」と、「雀君を頼むよ」……だけは、留守へ言つて置くくらゐだが、さて、何年にも、一寸来て二羽三羽、五六羽、總勢すくつて十二三羽より数が殖えない。長者でもない癖に、俄で扶持をしないからだと言はれば其までだけれど、何、私だつて、もう十羽殖えたぐらゐは、それだけ御馳走を増すつもりで居るのに。

何も、雀に託けて身代の伸びない愚癡を言ふのではない。又……別に雀の数の多く成る事はかりを望むのではないのであるが、春に、秋に、現に目に見えて五六羽づゝは親の連れて来る子の殖えるのが分つて居るから、いつも同じほどの数なのは、何處へ行つて、何うするのだらうと思ふからである。

が、何うも様子が、仔雀が一羽だちの出来るのを待つて、その小兒だけを宿に残して、親雀は塙をかへるらしく思はれる。

あの、仔雀が、チイ／＼と、ありつたけを赤く開けて、クリスマスに貰つたマントのやうに小羽を動かし、胸毛をふよ／＼と揺がせて、恠う仰向いて強請ると、あいよ、と言つた顔色で、チチツ、チチツと幾度もお飯粒を嘴から含めて遣る。……食べても強請る。ふくめつゝ、後ねだりをするのを機掛に、一粒銜へて、お母さんは塙の上——（椿の枝下で茲にお飯が置いてある）——其處から、裏露地を切つて、向うの瓦屋根へフツと飛ぶ。とあとから仔雀がふはりと継る。これで、羽を馴らすらしい。また一組は、おなじく餌を含んで、親雀が、狭い庭を、手水鉢の高さぐらゐに舞上ると、その胸のあたりへ附着くやうに仔雀が飛上る。尾を地へ着けないで、舞ひつゝ、飛びつゝ、庭中を翔廻りなどもする、矢張り羽を馴らすらしい。此の舞踏が一齊に三組も四組もはじまる事がある。卵の花を搔亂し、萩の花を散らして狂ふ。……かはいゝの目に目がないから、春も秋も一所だが、晴の遊戯だ。もう些と、綺麗な窓掛、絨毯を飾つても遣りたいが、庭が狭いから、羽とともに散りこぼれる風情の花は澤山ない。却つて羽について来るか、嘴から落すか、植えない葦の紫が一本咲いたり、蓼が穂を紅らめる。

處で、何のなかでも、親は甘いもの、仔はずるく甘つたれるもので。……あの胸毛の白いのが、

見て居ると、そのうちに立派に自分で餌が拾へるやうになる。澄ました面で、コッソリなどと高慢に食べて居る。いたづらものが、二三羽、親の目を抜いて飛んで来て、チユツチユツチユツとつき合の喧嘩さへ遣る。生意氣にも係らず、親雀がスーツと来て叱るやうな顔をする、喧嘩の嘴も、生意氣な羽も、忽ちぐにや／＼に成つて、チイチイ、赤坊聲で甘つたれて、餌を頂戴と、口を張開いて胸毛をふは／＼として待構へる。チチツ、チチツ、一人で食べなと言つても肯かない。頬邊を横に振つても肯かない。で、チイ／＼チイ／＼おなか空いたの。……お、よちよち、と言つた工合に、此の親馬鹿が、すぐにのろく成つて、お飯粒の白い處を——贅澤な奴等で、内のは挽割麥を交ぜるのだが餘程腹がすかないと麥の方へは嘴をつけぬ。此奴等、大地震の時は弱つたぞ——啄んで、嘴で、仔の口へ、押込み揉込むやうにするのが、凡そ堪らないと言つた形で、頬摺りをするやうに見える。

怪しからず、親に苦勞を掛ける。……その癖、他愛のないもので、陽氣がよくて、お腹がくちいと、うと／＼と成つて居睡をする。……さあ／＼一きり露臺へ出ようか、で、塀の上から、揃つてもの干へ出たとお思ひなさい。日のほか／＼と一面に當る中に、聲は噪ぎ、影は踊る。すてきに物干が賑だから、密と寄つて、隅の本箱の横、二階裏の脇掛窓から、まぶしい目をばちくりと遣つて覗くと、柱からも、横木からも、頭の上の小廂からも、暖かな影を湧かし、羽を光

らして、一齊にパツと逃げた。——飛ぶのは早い、裏邸の大枇杷の樹までさしわたし五十間ばかりを瞬く間もない。——(此の枇杷の樹が、馴染の一家族の晴なので、前通りの五本ばかりの櫻の樹(有島家)にも一群巢を食つて居るのであるが、その組は私の内へは来ないらしい、持場が違ふと見える)——時に、女中がいけぞんざいに、取込む時引外したまゝの掛棹が、斜違ひに落ちて居た。硝子一重すぐ鼻の前に、一羽可愛いのが真正面に、ぼかんと留まつて残つて居る。——どうかして、座敷へ飛込んで戸惑ひするのを掴へると、掌で暴れるから、此のくらゐ、しみじみと雀の顔を見た事はない。ふつくりとも、ほつかりとも、細い毛へ一つづゝ日光を吸込んで、お、お前さんは餌で出来て居るのではないかい、と言ひたいほど、とろんとして、目を眠つて居る。道理こそ、人の目と、其の嘴と打撞りさうなのに驚きもしない、と見るうちに、踏へて留つた小さな脚がひよいと片脚、幾度も下へ離れて迂りかゝると、その時はビクリと居直る。……煩つて動けないか、怪我をして居ないかな。……

以前、あしかけ四年ばかり、相州逗子に住つた時(三太郎)と名づけて目白鳥が居た。

櫻山に生れたのを、をとりで捕つた人に貰つたのであつた。が、何處の巢に居て覺えたらう、鶉、駒鳥、あの邊にはよく居る頬白、何でも囀る……ほうほけきよ、ほけきよ、ほけきよ、明か

に鶯の聲を鳴いた。目白鳥としては駄鳥か何うかは知らないが、私には大の、ご祕藏——長屋の破軒に、水を飲ませて、芋で飼つたのだから、笑つて故と(ご)の字をつけておく——またよく馴れて、殿様が鷹を据ゑた格で、掌に置いて、それと見せると、パツと飛んで蟲を退治た。また、冬の日のわびしさに、紅椿の花を炬燵へ乗せて、籠を開けると、花を被つて、蜜を吸ひつゝ嘴を眞黄色にして、掛蒲團の上を押廻つた。三味線を弾いて聞かせると、音に競つて軒で高轉りする。寂しい日に客が来て話をし出すと障子の外で負けまじと鳴きしきる。可愛いもので。……可愛いにつけて、斷じて籠には置くない。秋雨のしよぼ〜と降るさみしい日、無事なやうにと願ひ申して、岩殿寺の觀音の山へ放した時は、煩つて居た家内と二人、悄然として、ツイーツイーと梢を低く坂下りに樹を傳つて慕ひ寄る聲を聞いて、ほろりとして、一人は袖を濡らして歸つた。が、——其の目白鳥の事で。……(寒い風だよ、ちよぼ一風は、しはりごはりと吹いて来る)と田越村一番の若衆が、泣聲を立てる、大根の煮える、富士おろし、西北風の烈しい夕暮に、いそがしいのと、寒いのに、向うみずに、がたりと、門の戸をしめた勢で、軒に釣つた鳥籠をぐわたり、ボタンと撥返した。アツと思ふと、中の目白鳥は、羽ばたきもせず、横木を轉げて、落葉の挾つたやうに落ちて縮んで居る。「しまった、……三太郎が目をまはした。」「まあ、大變ね。」と襷がけのまゝ、庖丁を、投げ出して、目白鳥を掌に取つて据ゑた婦は目に一杯涙を溜めて、「何うしませ

う。其、其の時だ。試に手水鉢の水を柄杓で切つて雫にして、露にして、目白鳥の嘴を開けて含まして、襟をあけて、膚につけて暖めて、しばらくすると、ひく〜と動き出した。あゝ助りました、御利益と、岩殿の方へ籠を開いて、中へ入れると、あはれや、横木へつかまり得ない。おつこちるのが可恐いのか、隅の、隅の、狭い處で小さく成つた。あくる日一日は、些と、ご惱氣と言つた形で、摺餅に嘴のあとを、ほんの筋ほどつけたばかり。但し完全に蘇生つた。

此の經驗がある。

水でも飲まして遣りたいと、障子を開けると、其の音に、怪我處か、わんぱくに、しかも二つばかり廻つて飛んだ。仔雀は、うとり〜と居睡をして居たのであつた。……憎くない。

尤もなか〜の悪戯もので、逗子の三太郎……其の目白鳥——がお茶の子だから雀の口眞似をした所爲でもあるまいが、日向の縁に出して人の居ない時は、籠のまはりが雀どもの足跡だらけ。秋晴の或日、裏庭の茅葺小屋の風呂の廂へ、向うへ櫻山を見せて掛けて置くと、午少し前の、いい天気で、閑な折から、雀が一羽、……丁ど目白鳥の上の廂合の樋竹の中へすぼりと入つて、ちよつと黒い頭だけ出して、上から籠を覗込む。嘴に小さな芋蟲を一つ銜へ、あつち向いて、こつち向いて、ひよい〜と見せびらかすと、籠の中のは、戀人から來た玉草ほどに欲しがつて駆上り飛上つて取らうとすると、ひよいと面を横にして、また、ちよい〜と見せびらかす。いや、

いけずなお轉婆で。……處がはずみに掛つて振つた拍子に、その芋蟲をポタリと籠の目へ、落したから可笑い。目白鳥は澄まして、ペロリと退治た。吃驚仰天した顔をしたが、ぼんと樋の口を突出されたやうに飛んだもの。

瓢箪に宿る山雀、と言ふ語がある。雀は樋の中がすきらしい。五六羽、また、七八羽、横にずらりと並んで、顔を出して居るのが常である。

或殿が領分巡回の途中、菊の咲いた百姓家に床几を据ゑると、背戸畑の梅の枝に、大な瓢箪が釣してある。梅見と言ふ時節でない。

「これよ、……あの、瓢箪は何に致すのぢやな。」

その農家の親仁が、

「へい、山雀の宿にござります。」

「あ、風情なものぢやの。」

能の狂言の小舞の謡に、

いたいけしたるものあり。張子の顔や、練稚兒。しゆくしや結びに、さゝ結び、やましの結びに風車。瓢箪に宿る山雀、胡桃にふける友鳥……
「いまはじめて相分つた。——此少ぢやが餌の料を取らせよう。」

小春の麗な話がある。

御前のお目にとまつた、謡のまゝの山雀は、瓢箪を宿とする。此方人等の雀は、棟割長屋で、樋竹の相借家だ。

腹が空くと、電信の針がねに一座ずらりと出て、ぼち／＼ぼちと中空高く順に並ぶ。中でも音頭取が、電柱の頂邊に一羽留つて、チイと鳴く。これを合圖に、一齊にチイと鳴出す。——塀と枇杷の樹の間に當つて。で御飯をくれると、催促をするのである。

私が即ち取次いで、

「催促てるよ、／＼。」

「せはしないのね。……煩いよ。」

などと言ひながら、茶碗に装つて、婦たちは露地へ廻る。此が此のうへ後れると、勇悍なのが一羽押寄せる。馬に乗つた勢で、小庭を縁側へ飛上つて、ちよん、ちよん、ちよん／＼と、雀あるきに扉を抜けて臺所へ入つて、お籠の前を廻るかと思ふと、上の引窓へパツと飛ぶ。

「些と自分でもお働き、蟲を取るんだよ。」

何も、肯分けるのでもあるまいが、言の下に、萩の小枝を、花の中へすら／＼、葉の上はさらさら……あの撓々とした細い枝へ、塀の上、椿の樹からトンと下りると、下りたなりにすつと迂

つて、一寸末を餘して垂下る。すぐに、くろりと腹を見せて、葉裏を潜つてひよいと攀ぢると、また一羽が、おなじやうに堀の上からトンと下りる。下りると、すつと枝に撓つて、ぶら下るかと思ふと、驪然と傳ふ。又一羽が待兼ねてトンと下りる。一株の萩を、五六羽で、ゆさゆと揺つて、盛の時は花もこぼさず、嘴で銜へたり、尾で跳ねたり、横顔で覗いたり、慥くして、裏おもて、蟲を漁りつゝ、滑稽けてはずんで、ストーンと落ちるかとする、羽をひらりと宙へ踊つて、小枝の尖へひよいと乗る。

水上さんが此を聞いて、莞爾して勧めた。

「鞆を拵へてお遣なさい。」

邸の庭が廣いから、直ぐにこゝへ気がついた。私たちは思ひも寄らなかつた。糸で杉箒を結んで、其の萩の枝に釣つた。……此の趣を乗氣で饒舌ると、雀の興行をするやうだから見合はせる。が、鞆に乗つて、瓢箪ぶつくりこ、などは何でもない。時とすると、堀の上に、いま睦じく二羽啄んで居たと思ふ。その一羽が、忽然として姿を隠す。飛びもしないのに、おや／＼と人間の目にも隠れるのを、……慥く捜すと、いま居た堀の笠木の、すぐ裏へ、頭を揉込むやうにして縦に附着いて居るのである。脚がかりもないのに巧なもので。——然うすると、見失つた友の一羽が、怪訝な様子で、チ、と鳴き／＼、其處らを覗くが、その笠木の一寸した出張りの咽に、頭が

附着いて居るのだから、どつちを覗いても、上からでは目に附かない。チチツ、チチツと少時捜して、パツと枇杷の樹へ飛んで歸ると、そのあとで、密と頭を半分出してきよ／＼と見ながら、嬉しさに、羽を揉んで後から颯と飛んで行く。……惟ふに、人の子のするかくれんぼである。さて、慥うたわいもない事を言つて居るうちに——前刻言つた——仔どもが育つて、ひとりだち、ひとり遊びが出来るやうになると、胸毛の白いのばかりを残して、親雀は何處へ飛ぶのか居なく成る。數は増しもせず、減りもせず、同じく十五六羽どまりで、そのうちには、芽が葉になり、葉が花に、花が實に成り、雀の咽が黒く成る。年々二三度おなじなのである。

……妙な事は、いま言つた、萩また椿、朝顔の花、露草などは、枝にも蔓にも馴れ馴染んで居るらしい……と言ふよりは、親雀から教へられて居るらしい。——が、見馴れぬものが少しでもあると、可憐がつて近づかぬ。一日でも二日でも遠くの方へ退いて居る。尤も、時には此方から、故とおいでを御免蒙る事がある。物干へ蒲團を干す時である。

お嬢さん、お坊ちゃんたち、一家揃つて、いゝ心持に成つて、ふつくりと、蒲團に團樂を試みるのだから堪らない。ぼと／＼と、あとが、ふんだらけ。此には弱る。其處で工夫をして、他所から頂戴して貯へて居る豹の皮を釣つて置く。と枇杷の宿に居すくまつて、裏屋根へ来るのさへ、おつかなびつくり、(坊主びつくり貂の皮)だから面白い。

が、一夏縁日で、月見草を買つて来て、萩の傍へ植ゑた事がある。夕月に、あの花が露を香はせてばつと咲くと、いつも此の黄昏には、一時留り餌に騒ぐのに、ひそまり返つて一羽だつて飛んで来ない。はじめは怪しんだが、二日め三日めには心着いた。意氣地なし、臆病。烏瓜、夕顔などは分けても知己だらうのに、はじめて咲いた月見草の黄色な花が可恐いらしい……可哀相だから植替へようかと、言ふうちに、四日めの夕暮頃から、漸つと出て来た。何、一度味をしめると飛つて露も吸ひかねぬ。

まだある。土手三番町の事を言つた時、卵の花垣をなどと、少々調子に乗つたやうだけれど、まつたく其の庭に咲いて居た。土地では珍しいから、引越す時一枝折つて来てさし芽にしたのが、次第に丈たかく生立ちはしたが、葉ばかり茂つて、蕾を持たない。丁ど十年目に、一昨年卯月の末にはじめて咲いた、それも塀を高く越した日當のいゝ一枝だけ眞白に咲くと、其の朝から雀がバツタリ。意氣地なし。また丁ど其の卵の花の枝の下に御飯が乗つて居る。前年の月見草で心得て、此の時は澄まして居た。やがて一羽づゝ密と来た。忽ち卵の花に遊ぶこと萩に戯るゝが如しである。花の白いのにさへ怯えるのであるから、雪の降つた朝の臆病思ふべしで、枇杷塚と言ひたい、むかうの眞白の木に埋れて、聲さへ立てないで可哀である。梅の葉を拂つても、飛石の上を撥分けても、物干に雪の溶けかゝつた處へ餌を見せても影を見

せない。炎天、日盛の電車道には、焦げるやうな砂を浴びて、蟻の斧と言つた強いのが普通なのに、此はどうしたものであらう。……ははじめ、こゝへ引越したてに、一二年居た雀は、雪などは驚かなかつた。山を兎が飛ぶやうに、雪を裏にして、吹雪を散らして翔けたものを——こゝで思ふ。其の兒、その孫、二代三代に到つて、次第おくり、追續ぎに、おなじ血筋ながら、いつか、黄色な花、白い花、雪などに對する、親雀の申しふくめが消えるのであらうと思ふ。泰西の諸國にて、その公園に群る雀は、パンに馴れて、人の掌にも遊ぶと聞く。何故に、わが背戸の雀は、見馴れない花の色をさへ恐るゝのであらう。實に花なればこそ、些とても變つた人間の顔には、渠等は大なる用心をしなければならぬ。不意の礫の戸に當る事幾度ぞ。思ひも寄らぬ蜜柑の皮、梨の核の、雨落、鉢前に飛ぶのは數々である。牛乳屋が露地へ入れれば驚き、酒屋の小僧が「今日は」を叫べば逃げ、大工が来たと思ればすみ、屋根屋が来ればひそみ、疊屋が来ても寄りつかない。いつかは、何かの新聞で、東海道に何某は雀うちの老手である。並木づたひに御油から赤坂まで行く間に、雀の獲もの約一千を下らないと言ふのを見て戦慄した。空氣銃を取つて、日曜の朝、こゝの露地口に立つ、狩獵服の若い紳士たちは、失禮ながら、犬ころしに見える。

去年の暮にも、鄰家の少年が空氣銃を求め得て高く捧げて歩いた。鄰家の少年では防ぎ難い。おつかひものは、たゞ煎餅の袋だけれども、雀のために、うちの小母さんが折入つて頼んだ。親たちが笑つて、

「お宅の雀を狙へば、銃を没收すると言ふ約條済みです。」

嘗て、北越、俱利伽羅を汽車で通つた時、峠の驛の屋根に、車のとどろくにも驚かず、雀の日光に浴しつゝ、屋根を自在に、樋の宿に出入りするのを見て、谷に咲残つた撫子にも、火牛の修羅の巷を忘れた。——古戦場を忘れたのが可いのではない、忘れさせたのが雀なのである。

モウパッサンが普佛戦争を題材にした一篇の讀みだしは、「巴里は包圍されて饑ゑつゝ悶えて居る。屋根の上に雀も少なくなり、下水の埃も少なくなつた。」と言ふのではなかつたか。

雪の時は——見馴れぬ花の、それとは違つて、天地を包む雪であるから、もし此に恐れたと成ると、雀のためには、大地震以上の天變である。東京のは早く消えるから可いものの、五日十日積るのには何うするだらう。半歳雪に埋もるゝ國もある。

或時も、また雪のために一日形を見せないから、……眞個の事だが案じて居ると、次の朝の事である。ツイ——と寂しさうに鳴いて、目白鳥が唯一羽、雪を被いで、紅に咲いた一輪、寒椿の花に来て、ちら／＼と羽も尾も白くしながら枝を滑つた。

炬燵から見て居ると、しばらくすると、雀が一羽、パツと来て、おなじ枝に、花の上下を、一所に廻つた。續いて三羽五羽、一齊に皆来た。御飯はすぐ嘴の下にある。パツパ、チイ／＼諸きほひに歡喜の聲を上げて、踊りながら、飛びながら、啄むと、今度は目白鳥が中へ交つた。雀同志は、突合つて、先を争つて狂つても、その目白鳥にはおとなしく優しくかつた。そして目白鳥は、欲しさうに、不思議さうに、雀の飯を視めて居た。

私は何故か涙ぐんだ。

優しい目白鳥は、花の蜜に恵まれよう。——親のない雀は、うつくしく愛らしい小鳥に、教へられ、導かれて、雪の不安を忘れたのである。それにつけても、親雀は何處へ行く。——

——去年七月の末であつた。……餘り暑いので、愚に返つて、恚う何うも、おゝ暑いでめげては不可い。小兒の時は、日盛に蜻蛉を釣つたと、炎天に打つかる氣で、そのまゝ日盛を散歩した。その氣の次手に、……何となく、其處等屋敷町の垣根を探して（ごん／＼ごま）が見たかつたのである。此の名からして小兒で可い。——私は大好きだ。スマメノエンドウ、スマメウリ、ズメノヒエ、姫百合、姫萩、姫紫苑、姫菊の蕨たけた稱に對して、スマメの名のつく一列の雜草

の中に、此のごん／＼ごまを、私はひそかに「スマメの蠟燭」と稱して、内々最頂で居る。

分けて、盂蘭盆のその月は、墓詣の田舎道、寺つゞきの草垣に、線香を片手に、此のスマメの蠟燭、ごん／＼ごまを摘んだ思出の可懐さがある。

然も其の癖、卑怯にも片陰を拾ひ／＼小さな社の境内だの、心當の、邸の垣根を覗いたが、前年の生垣も煉瓦にかはつたのが多い。——清水谷の奥まで掃除が届く。——梅雨の頃は、闇黒に月の影がさしたほど、彼方此方に目についた紫陽花も、此の二三年こつち最う少い。——荷車のあとには芽ぐんでも、自動車の轍の下には生えまいから、いまは車前草さへ直ぐには見ようたつて間に合はない。

で、何處でも、あの、珊瑚を木乃伊にしたやうな、ごん／＼ごまは見當らなかつた。——ないものねだりで、尙ほ欲しい、歩行くうちに汗を流した。

場所は言ふまい。が、向うに森が見えて、樹の茂つた坂がある。……私が覺えてからも、むかし道中の茶屋旅籠のやうな、中庭を行抜けに、土間へ腰を掛けさせる天麩羅茶漬の店があつた。——その坂を下りかゝる片側に、坂なりに落込んだ空溝の廣いのがあつて、道には破朽ちた柵が結つてある。其の空溝を隔てた、葎を其のまゝ斜達ひに下る藪垣を、むかう裏から這つて、茂つて、またたとへば、珊瑚で刻んだ、さゝ蟹のやうなスマメの蠟燭が見つかつた。

つかまへて支へて、乗出しても、溝に隔てられて手が届かなかつた。

杖の柄で搔寄せようとするが、迂る。——がさ／＼と遺つて居ると、目の下の枝折戸から——こんな處に出入口があつたかと思ふ——葎戸の扉を明けて、圓々と肥つた、でつぷり漢が仰向いて出た。きびらの洗ひざらし、漆紋の兀げたのを被たが、肥つて大いから、手足も腹もぬつと露出て、ちやん／＼を被つたやうに見える、逞ましい肥大漢の柄に似合はず、おだやかな、柔和な聲して、

「何か、おとしものでもなされたか、拾つてあげませうかな。」

と言つた。四十ぐらゐの年配である。

私は一應挨拶をして、わけを言はなければ成らなかつた。

「はゝあ、ごん／＼ごま、……お薬用か、何か禁厭にでもなりますので？」

とに角、路傍だし、埃がして居る。裏の崖境には、清淨なのが澤山あるから、御休息かた／＼。で、ものの言ひふりと人のいゝ顔色が、氣も隔かせなければ、遠慮もさせなかつた。

「丁ど午睡時、徒然で居ります。」

導かるゝまゝ、折戸を入ると、そんなに廣いと言ふではないが、谷間の一軒家と言つた形で、三方が高臺の森、林に包まれた、ゆつくりした荒れた庭で、むかうに座敷の、縁が涼しく、油蟬

の中に閑寂に見えた。私は一寸其處へ掛けて、會釋で濟ますつもりだつたが、古壘で暑くるしい、せめてのおもてなしと、竹のづんど切の花活を持つて、庭へ出直すと臺所の前あたり、井戸があつて、撥釣瓶の、釣瓶が、虚空へ飛んで猿のやうに撥ねて居た。傍に青芒が一叢生茂り、桔梗の早咲の花が二三輪、たゞ初々しく咲いたのを、茗と一枝、三筋ばかり青芒を取添へて、竹筒に挿して、のつしりとした腰つきで、井戸から撥釣瓶でざぶりと汲上げ、片手の水差しに汲んで、桔梗に灌いで、胸はだかりに提げた處は、腹まで毛だらけだつたが、床へ据ゑて、圓い手で、枝ぶりを一寸撓めた形は、悠揚として、そして軽い手際で、きちんと極つた。掛物も何も見えぬ。が、唯その桔梗の一輪が紫の星の照らすやうに据つたのである。此の待遇のために、私は、縁を座敷へ進まなければならなかつた。

「龜茶を一つ獻じませう。何事も御覽の通りの住居で。……あの、茶道具を、これへな。」と言ふと、次の間の——崖の草のすぐ覗く——竹簀子の濡縁に、むかうむきに端居して……いま私の入つた時、一度ていねいに、お時誼をしたまゝ、うしろ姿で、ちらりと赤い小さなもの、年紀ごろで視て勿論お手玉ではない、糠袋か何ぞせつせと縫つて居た。……島田鬻の艶々しい、きやしやな、色白な女が立つて手傳つて、——肥大漢と二人して、やがて焜爐を縁側へ。……焚つけを入れて、炭を繼いで、土瓶を掛けて、茶盆を並べて、それから、扇子ではた——と焜爐の

火口を煽ぎはじめた。

「あれに澤山ございます、あの、茂りました處に。」

「瀧でも落ちさうな崖です——こんな町中に、あらうとは思はれません。御閑靜で實に結構です。霧が湧いたやうに見えますのは。」

「烏瓜でございます。下闇で暗がりでありますから、日中から、一杯咲きます。——あすこは、いくらでも、ごん／＼ごまがございませうな。貴方は何とかおつしやいましたな、スマメの蠟燭。」

これよりして、私は、茶の煮える間と言ふもの、およそ此の編に記した雀の可愛さを爰で話したのである。時々微笑んでは振向いて聞く。娘か、若い妻か、或は妾か。世に美しい女の狀に、一つはうか／＼誘はれて、氣の發奮んだ事は言ふまでもない。

さて幾度か、茶をかへた。

「これを御縁に。」

「勿論かさねまして、頃日に。——では、失禮。」

「あゝ、しばらく。……これは、貴方、おめしものが。」

……心着くと、おめしものも氣恥しい、浴衣だが、うしろの縫めが、しかも、したゝか綻びて

居たのである。

「こゝもとは茅屋でも、田舎道ではありませんちや。尻端折……飛んでもない。……あゝ、あんな、一寸繕つておあげ申せ。」

「はい。」

すぐに美人が、手の針は、まつげにこぼれて、目に見えぬが、糸は優しく、皓齒にスツと含まれた。

「あなた……」

「あゝ、これ、紅い糸で縫へるものかな。」

「あれ——おほゝゝ。」

私が左のつそりと突立つた裾へ、女の脊筋が絡つたやうに成つて、右に左に、肩を曲ると、居勝手が悪く、白い指がちら／＼倒れる。

「恐縮です、何とも何うも。」

「恠う三人と言ふもの附着いたのでは、第一私が此の肥體ぢや。お暑さが堪らんわい。衣服をお脱ぎなさつて。……ささ、それが早い。——御遠慮があつては成らぬ——が、お身に合ひさうな着替はなしぢや。……これは、一つ、亭主が素裸に相成りませう。それならばお心安い。」

きびらを剃いで、すつぱりと脱ぎ放した。春禪の肥大裸體で、

「それ、貴方。……お脱ぎなすつて。」

と毛むくじやらの大胡坐を搔く。

呆氣に取られて立すくむと、

「おゝ、これ、あなた、あなたも衣ものを脱ぎなさい。みな裸體ぢや。然うすればお客人の遠慮がなう成る。……はゝはゝ、それが何より。さ、脱ぎなさい／＼。」

串戯にしてもと、私は吃驚して、言も出ぬのに、女はすぐに幅狭な帯を解いた。膝へ手繰ると、袖を両方へ引落して、雪を分けるやうに、するりと脱ぐ。……膚は蔽うたよりふつくりと肉を置いて、脊筋をすんなりと、撫肩して、白い脇を乳が覗いた。それでも、脱ぎかけた浴衣を尙ほ膝に半ば挟んだのを、おつ、と這ふと、あれ、と言ふ間に、亭主がずる／＼と引いて取つた。

「はゝゝは。」

と笑ひながら。

既にして、朱鷺色の布一重である。

私も脱いだ。汗は垂々と落ちた。が、憚りながら禪は白い。一輪の桔梗の紫の影に映えて、女はうるほへる玉のやうであつた。

その手が糸を曳いて、針をあやつつたのである。

縫へると、帯をしめると、私は胸を折るやうにして、前のめりに木戸口へ駆出した。挨拶は済ましたが、咄嗟のその早さに、でつぶり漢と女は、衣を引掛ける間もなかつたらう……あの裸體のまゝ、井戸の前を、青すゝきに、白く摺れて、人の姿の怪しい蝶に似て、すつと出た。その光景は、地獄か、極樂か、覺束ない。

「あなた……雀さんに、よろしく。」

と女が莞爾して言つた。

坂を駆上つて、ほつと呼吸を吐いた。が、しばらく茫然としてゐんだ。——電車の音はあとさきに聞えながら、方角が分らなかつた。直下の炎天に目さへくらむばかりだつたのである。

時に——目の下の森につゝまれた谷の中から、一セイして、高らかに簫の笛が雲の峯に響いた。……話の中に、稽古の弟子も歸つたと言つた。——あの主人は、簫を吹くのであるか。……然ういへば、餘りと言へば見馴れない風俗だから、見た目をさへ疑ふけれども、肥大漢は、はじめから、裸體に成つてまで、烏帽子のやうなものをチョンと頭にのせて居た。

「奇人だ。」

「いや、……崖下のあの谷には、魔窟があると言ふ。……その種々の意味で。……何しろ十年ばかり前には、暴風雨に崖くづれがあつて、大分、人が死んだ處だから。」——

と或友だちは私に言つた。

炎暑、極熱のための疲労には、みめよき女房の面が赤馬の顔に見えたと言ふ、むかし武士の話がある。……霜が枝に咲くやうに、汗——が幻を描いたのかも知れない。が、何故か、私は、……實を言へば、雀の宿にもなはれたやうな思ひがするのである。

かさねてと思ふ、日をかさねて一月にたらず、九月一日のあの大地震であつた。

「雀たちは……雀たちは……」

火を避けて野宿しつゝ、炎の中に飛ぶ炎の、小鳥の形を、眞夜半かけて案じたが、家に歸ると、轉げ落ちたまゝ底に水を残して、南天の根に、ひゞも入らずに残つた手水鉢のふちに、一羽、ちよんと傳つて居て、顔を見て、チイと鳴いた。

後に、密と、谷の家を覗きに行つた。近づく胸は轟いた。が、たゞ焼原であつた。

私は夢かとも思ふ。いや、雀の宿の氣がする。……あの大漢のまる顔に、口許のちよぼんとしたのを思へ。卵の毛で胡粉を刷いたやうな女の膚の、どこか、頤の下あたりに、黒いあざはなかつたか、うつむいた島田髻の影のやうに——

をかした事は、その時摘んで来たどん／＼ごまは、いつ何うしたか定かには覚えないうのに、秋の草に生えて、塀を傳つて居たのである。

「何うだい、雀」

知らぬ顔して、何にも言はないで、南天燭の葉に日の當る、小庭に、雀はちよん、ちよんと遊んで居る。

玉川の草

大正十三年十月

——これは、そぞろな秋のおもひである。青葉の雨を聞きながら——

露を其のまゝの女郎花、淺葱の優しい嫁菜の花、藤袴、また我亦紅、はよく伸び、よく茂り、慌てた蛙は、蒲の穂と間違へさうに、(我こそ)と咲いて居る。——添へて刈萱の濡れたのは、藁にも織らず、折からの雨の姿である。中に、千鳥と名のあるのは、蕭々たる夜半の風に、野山の

水に、蟲の聲と相觸れて、チリチリ鳴りさうに思はれる……その千鳥刈萱。——通稱はツリガネニンジンであるが、色も同じ桔梗を薄く絞つて、俯向けにつら／＼と連り咲く紫の風鈴草、或は曙の釣鐘草と呼びたいやうな草の花など——皆、玉川の白露を鏤めたのを、——其の砦の里に實家のある、——町内の私のすぐ近所の白井氏に、殆ど毎年のやうに、土産にして頂戴する。其年も初秋の初夜過ぎて、白井氏が玉川べりの實家へ出向いた歸りだと云つて、——夕立が地雨に成つて、しと／＼と降る中を、まだ寝ぬ門を訪れて、框にしつとりと置いて、歸んなすつた。慣れても、眞新しい風情の中に、其の釣鐘草の交つたのが、わけて珍らしかつたのである。

楠木清方さんが——まだ濱町に居る頃である。塵も置かない綺麗事の庭の小さな池の縁に、手で一寸劃られるばかりな土に、紅蓼、露草、蚊帳釣草、犬ぢやらしななど、雑草なみに扱はるゝのが、野山路、田舎の状を髣髴として、秋晴の薄日に亂れた中に、——其の釣鐘草が一莖、丈伸びて高く、すつと咲いて、たとへば月夜の村芝居に、青い幟を見るやうな、色も灯れて咲いて居た。遣水の音がする。……

品 小
萩も芙蓉も、此の住居には頷かれるが、縁日の鉢植を移したり、植木屋の手に掛けたものとは思はれない。

「あれは何うしたのです。」

と聞くと、お照さん——鍋木夫人——が、

「春ね、皆で玉川へ遊びに行きました時、——まだ何にも生えて居ない土を、一かけ持つて来たんですよ。」

即ち名所の土の傀儡師が、箱から氣を咲かせた草の面影なのであつた。

さら／＼と風に露が散る。

また遣水の音がした。

金をかけて、茶座敷を營むより、此の思ひつき至つて妙、雅にして而して優である。

……其の後、つくし、餅草摘みに、私たち玉川へ行つた時、眞似して、土を、麴一枚ばかりと、折詰を包んだ風呂敷を一度ふるつては見たものの、土手にも畦にも河原にも、すく／＼と皆氣味の悪い小さな穴がある。——釣鐘草の咲く時分に、振袖の蛇體なら好いとして、黄領蛇が、によるによる、などは肝を冷すと何だか手をつけかねた覺えがある。

「何を振廻はして居るんだな、早く水を入れて遣らないかい。」

でん／＼太鼓を貰へたやうに、馬鹿が、嬉しがつて居る家内のあとへ、私は縁側へついて出た。

「これで済むもの、どつさりあつて……枝も葉もほごしてからでない、何ですかね、蝶々が入つて寝て居さうで……いきなり桶へ突込んで氣の毒ですから。」

へん、柄にない。

フ、ンと苦笑をする處だが、此處は一つ、敢て山のかみのために辯じたい。

秋は、これよりも深かつた。——露の凝つた秋草を、霜早き枝のもみぢに添へて、家内が麴町の大通りの花政と云ふのから買つて歸つた事がある。

……其時、おや、小さな木兎、雑司ヶ谷から飛んで来たやうな、木葉木兎、青葉木兎とか稱ふるのを提げて来た。

手広い花屋は、近まはり近在を求るだけでは間に會はない。其處で、房州、相模はもとより、甲州、信州、越後あたりまで——持主から山を何町歩と買ひしめて、片つ端から鎌を入れる。朝夕の風、日南の香、雨、露、霜も、一齊に貨物車に積込むのださうである。——其年活けた最初の錦木は、奥州の忍の里、龍膽は熊野平碓氷の山岨で刈りつゝ下枝を透かした時、晝の半輪の月を裏山の峰にして、ぽかんと留まつたのが、……其の木兎で。

若い衆が串戯に生捉つた。

こんな事はいくらもある。

「洒落に持つてつて御覽なせえ。」と、花政の爺さんが景ぶつに寄越したのだと言ふのである。

げに人柄こそは思はるれ。……お嬢さん、奥方たち、婦人の風采によつては、驚、かなりや、

……せめて頬白、鴛子鳥ともあるべき處を、よこすものが、木兎か。……あゝ人柄が思はれる。

が、秋日の縁側に、ふはりと懸り、背戸の草に浮上つて、傍に、其のもみぢに交る檜の枝に、

團栗の實の轉けたのを見た時は、恰も買つて来た草中から、ぽつと飛出したやうな思ひがした。

いき餌だと言ふ。……牛肉を少々買つて、生々と差しつけては見たけれど、恚う、嘴を伏せ、

翼をすぼめ、あとじさりに、目を据ゑつゝ、あはれに悄氣て、ホ、と寂しく、ホと弱く、ホポ！

と眞晝の夢に魘されたやうに鳴く。

その眞黄な大きな目からは、玉のやうな涙がぼろ／＼と溢れさうに見える。山懐に抱かれた稚

い媛が、悪道士、邪仙人の魔法で呪はれでもしたやうで、血の牛肉どころか、吉野、龍田の、彩

色の菓子、墨繪の落雁でも啄みさうに、しをらしく、いた／＼しい。

……その菓子の袋を添へて、駄賃を少々。特に、もとの山へ戻すやうに、と云つて、花屋の店

へ返したが。——まつたく、木の葉草の花の精が顯はれたやうであつた。

こゝに於て、蝶の宿を、秋の草にきづかつたのを嘲らない。

「あゝ、ちら／＼。」

手にほごす葉を散つて、小さな白いものが飛んだ。障子をふつと潜りつゝ、きのふ今日蚊帳を

除つた、薄搔卷の、袖に、裙に、ちら／＼と舞ひまうたのは、それは綿よりも軽い蘆の穂であつ

た。

火の用心の事

大正十五年四月—五月

紅葉先生在世のころ、名古屋に金色夜叉夫人といふ、若い奇麗な夫人があつた。申すまでもな

く、最大なる愛讀者で、宮さん、買一でなければ夜も明けない。

——髪ならではと見ゆるまでに結做したる圓髻の漆の如きに、珊瑚の六分玉の後挿を點じたれ

ば、更に白襟の冷豔、物の類ふべき無く——

とあれば、髪ならではと見ゆるまで、圓髻を結なして、六分玉の珊瑚に、冷豔なる白襟の好み。

——貴族鼠の縹高縮緬の五紋なる單衣を曳きて、帯は海松地に装束切模の色紙散の七絲……淡

紅色紋緞の長襦袢

とあれば、かくの如く、お出入の松坂屋へあつらへる。金色夜叉中編のお宮は、この姿で、雪見燈籠を小楯に、寒きつゝじの茂みに裯を隠して立つのだから——庭に、築山がかりの景色はあるが、燈籠がないからと、故らに据ゑさせて、右の装ひでスリツパで芝生を踏んで、秋空を高く睫毛に澄して、やがて雪見燈籠の笠の上にくづほれた。

「お前たち、名古屋へ行くなら、紹介をして遣らうよ。」

今、兜町に山一商會の杉野喜精氏は、先生の舊知で、その時分は名古屋の愛知銀行の——何うも私は餘り銀行にはゆかりがないから、役づきは何といふのかわらないが、追つてこの金色夜叉夫人が電話口でその人を呼だすのを聞くと、「あゝ、もし、御支配人、……」だから御支配人であつた。——一年先生は名古屋へ遊んで、夫人とは、この杉野氏を通じて、知り合に成んなすつたので。……お前たち。……故柳川春葉と、私とが編輯に携はつて居た、春陽堂の新社、社會欄の記事として、中京の觀察を書くために、名古屋へ派遣といふのを、主幹だつた宙外さんから承つた時であつた。何しろ、杉野の家で、早午飯に二人で牛肉なべをつゝいて居ると、ふすま越に（お相伴）といふ聲がしたと思ひな。紋着、白えりで盛装した、艶なのが、茶わんとはしを兩手に持つて、目の覺めるやうに黙れて、すぐに一切れはさんだのが、その人さ。和出來の猪

八戒と沙悟淨のやうな、變なのが二人、鯉の城下へ轉げ落ちて、門前へ齋に立つたつて、右の度胸だから然までおびえまいよ。紹介しよう。……（角はま）にも。」角はまは、名古屋通で胸をそらした杉野氏を可笑しがつて、當時、先生が御支配人を戯れにあざけつた渾名である。御存じの通り（様）を彼地では（はま）といふ。……

私は、先生が名古屋あそびの時の、心得の手帳を持つてゐる。餘白が澤山あるからといつて、一冊下すつたものだが、用意の深い方だから、他見然るべからざるペイチには剪刀が入つてゐる。覺の残つてゐるのに——後で私たちも聞いた唄が記してある。

味は川文、眺め前津の香雪軒よ、

席の廣いは金城館、愉快、おなやの奥座敷、一寸二次會、

河喜樓。

また魚半の中二階。

品小

近頃は、得月などといふのが評判が高いと聞く、が、今もこの唄の趣はあるのであらう。その何家だか知らないが、御支配人がズツと先生を導くと、一つ多ぐらうといふ數寄屋がかりの座敷へ、折目だかな女中が、何事ぞ、コーヒー入の角砂糖を捧げて出た。——シユウとあわが立つて、黒いしるの溢れ出るのを匙でかきまはす代ものである。以來、ひこつの名古屋通を、（角はま）と

言ふのである。

おなじ手帳に、その時のお料理が記してあるから、一寸御馳走をしたいと思ふ。

(わん。)津島ぶ、隠元、きす、鳥肉。(鉢。)たひさしみ、新菊の葉。甘だい二切れ。(鉢。)

えびしんじよ、銀なん、かぶ、つゆ澤山。土瓶むし松だけ。つけもの、かぶ、奈良づけ。

かごにて、ぶだう、梨。

手帳のけいの中ほどに、二の膳出づ、と朱がきがしてある。

その角はま、と夫人とに、紹介状を頂戴して、春葉と二人で出かけた。あゝ、この紹介状なりせば……思ひだしても、げつそりと腹が空く。……

何しろ、中京の殖産工業から、名所、名物、花柳界一般、芝居、寄席、興行ものの状態視察。

あひなるべくは多治見へのして、陶器製造の模様までで、滞在少くとも一週間の旅費として、一人前二十五兩、注におよばず、切もちたつた一切づゝ。——むかしから、落人は七騎と相場は極

つたが、これは大國へ討手である。五十萬石と戦ふに、切もち一つは情ない。が、討死の覺悟も

せずに、血氣に任せて馳向つた。

日露戦争のすぐ以前とは言ひながら、一圓づゝに算へても、紙幣の人数五十枚で、金の誠に

拮抗する、勇氣のほどはすさまじい。時は二月なりけるが、剩さへ出陣に際して、陣羽織も、よろひもない。有るには有るが預けてある。勢ひ兵を分たねば成らない。暮から人質に入つてゐる外套と羽織を救ひだすのに、手もなく八九枚討取られた。黄がかつた袖の羽織に、鉦仙の茶じまを着たのと、石持の黒羽織に、まがひ琉球のかすりを着たのが、しよぼく雨の降る中を、夜汽車で立つた。

日の短い頃だから、翌日旅館へ着いて、支度をする、もうそちこち薄暗い。東京で言へば浅草のやうな所だと、豫て聞いて居た大須の觀音へ詣でて、表門から歸れば可いのを、風俗を視察のためだ、と裏へまはつたのが過失で……大福餅の、焼いたのを頬張つて、婆さんに澁茶をくんでもらひながら「やあ、この大きな鐸をがらん／＼と驅けて行くのは、號外ではなささうだが、何だい。」婆さんが「あれは、ナアモ、藝妓衆の線香の知らせでナアモ。」そろ／＼風俗を視察におよんで、何も任務だからと、何樓かの前で、かけ合つて、値切つて、引つけへ通つて酒に成ると、階子の中くらゐのお上り二人、さつぱり持てない。第一女どもが寄着かない。おてうしが一二本、遠見の傍示ぐひの如く押立つて、廣間はガランとして野の如し。まつ赤になつた柳川が、黄なるお羽織……これが可笑い。京傳の志羅川夜船に、素見山の手の(きふう)と稱へて、息子も何ぞうたはつせえ、と犬のくそをまたいで先へ立つ男がゐる。——(きふう)は名だ。け

だし色の象徴ではないのだが、春葉の羽織は何ういふものか、不斷から、件くだんの素見山すけんざんの手の風ふうがあつた。——そいつをパツと脱いで、角力すまふを取らうと言ふ。僕は角力すまふは嫌ひだ、といふと、……小さな聲で、「示威運動せゐうんどうだから、式ばかりで行くんだ。」よし来た、と立つと、「成りたけ向うからはずみをつけて驅けて来てポンと打つかりたまへ、可いか。」すとんと、呼吸こきふで、手もなく投なげられる。可いか。よし来た。どん、すとん、と身上しんしやうも身も軽い。けれども家鳴震動やなりしんどうする。遣手やりても、仲居なかみも、女どもも驅けつけたが、あきれて廊下ろうかに立つばかり、話はなしに聞いた芝天狗しばてんぐと、河太郎かはたろうが、紫川むらさきがはから化けて来たやうに見えたらう。恐怖おそれをなして遠巻とほまきに巻いてゐる。投なげる方も、投なげられる方も、へとくになつてすわつたが、酔つた上の騒劇さうげきで、目がくらんで、もう別嬪べつべんの顔かほも見えない。財産家の角力すまふは引ついで取るものだ。又来るよ、とふられさうな先を見越して、勘定かんぢやうをすまして、潔く退いた。が、旅宿りしゆくへ歸つて、雙方顔さうほうかほを見合せて、ためいきをホツと吐いた。——今夜こんや一夜の籠城ろうじやうにも、剩すところの兵糧ひやうらうでは覺束おぼつかない。角力すまふなど取らねば可かつた。夜半よなかに腹はらの空いた事こと。大福だいふくもちより、きしめんにすれば可かつたものを、と木賃きちんでしらみをひねるやうに、二人とも財布さいふの底そこをもんで歎たんじた。

この時、神通じんつうを顯して、討死うちじを窮地きうぢに救つたのが、先生の紹介せうかい状じやうの威徳ゐとくで、従つて金色夜叉こんじきやしゃ又夫またおとこ人の情なさけであつた。

翌日は晩とも言はず、午ひるからの御馳走ごちそう。杉野氏すぎのしの方も、通勤つうきんがあるから留主るすで、同夫人どうふじんと、夫人ふじん同士の御招待ごせうたいで、即ちすなはち(二の膳出づ)である。「あ、旨い、旨い、が、驚いた、この、鯛たひの腸はわたは化けて居る。」よして頂戴ちやうだい、見つともない。それはね、ほら、鯛たひのけんちんむしといふものよ。」何を隠さう、私はわたしうまれて初めて食べた。春葉しゆんははこれより先さき、ぐち、と甘鯛あまだひの區別くくべつを知つて、薬門えいもん中の食通しよくつうだから、弱つた顔かほをしながら、白い差味さしみにわさびを利きかして苦笑くせうをして居た。

その時だつてか、あとだつたか、春葉しゆんはと相あひひとしく、まぐろの中脂ちゆうあぶらを、おろしで和あへて、醬油しやうゆを注いで、令夫人れいふじんのお給仕きよひつきの御飯ごはんへのつけて、熱い茶ちやを打ぶつかけて、さくさく、おかはり、と又退治またいぢるのを、「頼たのもしいわ、私たちの主人しゆじんにはそれが出来ないの。」と感状かんじやうに預あづかつた得意とくいさに、頭づにのつて、「僕はね、お彼岸ひがしのぼたもちでさへお茶ちやづけにするんですぜ。」「まあ、うれしい。……」何なにうもあきれたものだ。

おきれいなのが三人ばかりと、私わたしたち、揃そろつて、前津まへつの田畝たんぼあたりを、冬霧ふゆぎりの薄紫うすむらさきにそゞろ歩あるきして、一寸ちよつとした茶屋ちややへ憩やすんだ時だ。「ちらしを。」と、夫人ふじんが五ごもくずしをあつらへた。

つい今しがた牡丹亭ぼたんていとかいふ、廣庭ひろにはの枯草かれくさに霜しもを敷しいた、人氣ひとげのない離れ座敷はなれざしきで。——鬘かつらならではと見ゆるまでに結ゆひなしたる圓鬘まるまげに、珊瑚さんごの六分玉ろくぶたまのうしろざしを點てんじた、冷豔れいゑん類たぐひふべきなき

と、この名物だと聞く、小さなとこぶしを、青く、銀色の貝のまゝ重ねた鹽蒸を肴に、相對して、その時は、雛の瞬くか、と顔を見て酔つた。——「今しがた御馳走に成つたばかりです、もう、そんなには。」いゝから姉さんに任せてお置き。」紅葉先生の、實は媛友なんだから、といつて、女の先生は可笑しい。……たゞ奥さんでは氣にいらす、姉ごは失禮だ。小母さんも變だ、第一「嬌嗔」を發しようし……そこんところが何となく、いつのまにか、むかうが、姉が、姉が、といふから、年紀は私が上なんだが、姉さんも、うちつけがましいから、そこで、「お姉上。」——いや、二十幾年ぶりかで、近頃も逢つたが、夫人は矢張り、年上のやうな心持がするとか言ふ。「第一、二人とも割前が怪しいんです。」とその時いふと、お姉上も若かつた。箱せこかと思ふ、錦の紙入から、定期だか何だか小さく疊んだ愛知の銀行券を絹ハンケチのやうにひら／＼とふつて、金一千圓也、といふ楷書のところを見せて、「心配しないで、めしあがれ。」ちらしの金主が一千圓。この意氣に感じては、こちらも、くわつと氣競はざるを得ない。「ありがたい、お茶づけだ。」と、いま思ふと汗が出る。……鮎茶漬を嬉しがられた禮心に、このどんぶりへ番茶をかけて搔つ込んだ。味は何うだ、とおつしやるか？ いや、話に成らない。人參も、干瓢も、もさ／＼して咽喉へつかへて酸いところへ、上置の鯨の、ふんと生臭くしがらむ工合は、何とも言へない。漸と「どんぶり、それでも我慢に平げて、「うれしい、お見事。」と賞められたが、歸途に路が暗

く成つて、溝端へ出るが否や、げつといつて、現實立所に暴露におよんだ。愛想も盡かさず、こいつを病人あつかひに、邸へ引取つて、柔かい布團に寝かして、寒くはないの、と袖をたゝいて、清心丹の錫を白い指でパチリ……に至つては、分に過ぎたお厚情、私はその都度、「先生の威徳廣大、先生の威徳廣大。」と唱へて、金色夜叉の愛讀者に感銘した。翌年一月、親類見舞に、夫人が上京する。ついでに、茅屋に立寄るといふ音信をうけた。ところで、いま更狼狽したのは、その時の厚意の萬分の一に報ゆるのに手段がなかつたためである。手段がなかつたのではない、花を迎ふるに蝶々がなかつたのである。……何を何う考へたか、いづれ周章てた紛れであらうが、神田の従姉——松本の長の姉を口説いて、實は名古屋ゆきに着てゐた琉球だつて、月賦の約束で、その従姉の顔で、羅吳服を借りたのさへ返さない……にも拘らず、鯨に對して、錢なしでは、初松魚……とまでも行かないでも、夕河岸の小鯨の顔が立たない、とかうさへ言へば「あいよ。」と言ふ。……少しばかり巾着から引だして、夫人にすゝむべく座布團を一枚こしらへた。……お待遠様。——これから一寸薄どろに成るのである。おごつた、黄じまの郡内である。通例私たちが用ゐるのは、四角で薄くて、ちよぼりとして居て、腰を載せるとその重量で、少し溢んで、膝でべたんと成るのだが、そんなのではない。疊半疊ばかりなのを、大きく、ふはりとこしらへた。私はその頃牛込の南榎町に住んで居たが、水

道町の丸屋から仕立上りを持込んで、御あつらへの疊紙の結び目を解いた時は、四疊半唯一間の二階半分に盛上つて、女中が細い目を圓くした。私などの夜具は、むやみと引張つたり、被つたりだから、胴中の綿が透切れがして寒い、裾を膝へ引包めて、袖へ頭を突込むで、こと／＼蟲の形に成るのに、この女中は、また妙な道樂で、給金をのこらず夜具にかける、敷くのが二枚、上へかけるのが三枚といふ贅澤で、下階の六疊一杯に成つて、はゞかりへ行きかへり足の踏所がない。おまけに、もえ黄の夜具ぶろしきを上被りにかけて、包んで寝た。一つはそれに對する敵愾心も加はつたので。……先づ奮發した。

——所で、夫人を迎へたあとを、そのまま押入へ藏つて置いたのが、思ひがけず、遠からず、紅葉先生の料に用立つた。

憶起す。……先生は、讀賣新聞に、寒牡丹を執筆中であつた。横寺町の梅と柳のお宅から三町ばかり隔たつたらう。私の小家は餘寒未だ相去り申さずだつたが——お宅は來客がくびすを接しておびたゞしい。玄關で、私たち友達が留守を使ふばかりにも氣が散るからと、お氣にいりの煎茶茶碗一つ。……これはそのまゝ、いま頂戴に成つて居る。……ふる敷包を御持參で、「机を貸しな。」とお見えに成つた。それ、と二三つほこりをたゝいたが、まだ干しも何うもしない、美し

い夫人の移り香をそのまゝ、右の座布團をすゝめたのである。敢てうつり香といふ。留南木のかをり、香水の香である。私はずまれて、親どもからも、先生からも、女の肉の臭氣といふことを教へられた覚えがない。従つて未だに知らない。汗と、わきがと、湯不精を除いては、女は——化粧の香料のほか、身だしなみのいゝ女は、臭くはないものと思つて居る。憚りながら鼻はきく。空腹へ、秋刀魚、焼いもの如きは、第一にきくのである。折角、結構なる體臭をお持合せの御婦人方には、相すまぬ。が……従つて、拂ひもしないで、敷かせ申した。壁と障子の穴だらけな中で、先生は一驚をきつして、「何だい、これは。——田舎から、内證で嫁でもくるのかい。」「へい。」「馬のくらに敷くやうだな。」「えへ。」「私も弱つて、だらしなく頭をかいた。」「茶がなかつたら、内へ行つて取つて來な。鐵瓶をおかけ。」「と小造な瀬戸火鉢を引寄せて、ぐい、と小机に向ひなすつた。それでも、せんべい布團よりは、居心がよかつたらしい。……五日ばかりおいでが續いた。

暮合の土間に下駄が見えぬ。

「先生は?……」

通りへ買物から、歸つて聞くと、女中が、今しがたお歸りに成つたといふ。矢來の辻で行違つた。……然うか、と何うも冴え返つて恐ろしく寒かつたので、いきなり茶の間の六疊へ入つて、

祖母が寝て居た行火の裾へ入つて、尻まで潜ると、祖母さんが、むく／＼と起きて、火をかき立ててくれたので、ほか／＼いゝ心持になつて、ぐつすり寝込むだ。「柳川さんが、柳川さんが見えになりました。」うつとりと目を覺すと、「雪だよ、雪だよ、大雪に成つた。この雪に寝て居る奴があるものか。」と、もう枕元に長い顔が立つて居る。上れ、二階へと、マツチを手探りでランプを點けるのに馴れて居るから、いきなり先へ立つて、すぐの階子段を上つて、ふすまを開けると、むツと打つ煙に目のくらむより先に、机の前に、眞紅な毛氈敷いたかと、戸袋に、雛の幻があるやうに、夢心地に成つたのは、一はゞ一面の火であつた。地獄へ飛ぶやうに迂り込むと、青い火鉢が金色に光つて、座布團一枚、ありのまゝに、萌黄を細く覆輪に取つて、朱とも、血とも、るつぽのたゞれた如くにとろけて、燃抜けた中心が、薬研に窪んで、天井へ崩れて、底の眞黒な板には、ちら／＼と火の粉がからんで、ぱち／＼と煤を焼く、炎で舐める、と一目見た。「大變だ。」私は夢中で、鐵瓶を噴火口へ打覆けた。心利いて、すばやい春葉だから、「水だ、水だ。」と、もう臺所で呼ぶのが聞えて、私が驅おりのと、入違ひに、狭い階子段一杯の大丸まげの肥満つたのと、どうすれ合つたか、まげの上を飛おりたか知らない。下りさまに、おゝ、一手桶持つて女中が、と思ふ鼻のさきを、丸々とした脚が二本、吹きおろす煙の中を宙へ上つた。すぐに柳川が馳違つた。手にバケツを提げながら、「あととは、たらひでも、どんぶりでも、……水瓶にまだあ

る。」と、この手が二階へ届いた、と思ふと、下の座敷の六疊へ、ざあーと疎に、すだれを亂して、天井から水が落ちた。さいはひに、火の粉でない。私は柳川を恩人だと思ふ——思つて居る。もう一步來やうが遅いと、最早言を費すにおよぶまい。

敷合せ疊三疊、丁度座布團とともに、その形だけ、ばさ／＼の煤になつて、うづたかく重なつた。下も煤だらけ、水びたしの中に畏つて、吹きつける雪風の不安さに、外へ出る勇氣はない。勞を謝するに酒もない。柳川は巻煙草の火もつけずに、ひとりで蕎麥を食ふるとて歸つた。

女中が、つぶぬれの疊へ手をついて、「申譯がございません。お寒いので、炭をどつさりお繼ぎ申しあげたものですから、先生様はお歸りがけに、もう一度よく埋けなよ、と確に御注意遊ばしたのでございますものを、つい私が疎雑で。……炭が刎ねまして、あのお布團へ。……申譯がございませぬ。」祖母が佛壇の輪を打つて座つた。私も同じやうに座つた。「……兄、これからも氣をつけさつしやい、内では昔から年越しの今夜がの。……」忘れて居た、如何にもその夜は節分であつた。私が六つから九つぐらゐの頃だつたと思ふ。遠い山の、田舎の雪の中で、おなじ節分の夜に、三年續けて火の過失をした、心さびしい、もの恐ろしい覺えがある。いつも表二階の炬燵から。……一度は職人の家の節分の忙しさに、私が一人で寝て居て、下がけを踏込んだ。一度

は雪國ゆきくにでする習慣なはし、濡ぬれた足袋たびを、やぐらに干ほした紐ひもの結びめが解とけて火ひに落おちたためである。もう一度は覺おぼえて居ゐない。いづれも大事だいじに至いたらなかつたのは勿論もちろんである。が、家中いんちゆう水を打うつて、燈ひも氷こつた。三年目さんねんめの時の如ごときは、翌朝よくあさの飯めしも汁じゆも凍こえて、軒のきの氷柱つらが痛いたかつた。

番町ばんちやうへ越こして十二年じふにさんねんになる。あの大地震おほちしんの前の年の二月四日にふわつよつかの夜は大雪おほゆきであつた。二百十日もおなじこと、日記にっきを誌しるす方々かたぐは、一寸日ちよつとひづけを御覽ごらんを願ねがふ、雨あめも晴はれも、毎年まいねんそんなに日ひをかへないであらうと思おもふ。現げんに今年ことし、この四月しぐわつは、九日ここのか、十日とつか、二日ふつか續つけて大風おほかせであつた。いつか、吉原よしはらの大火たいくわもおなじ日ひであつた。然しかもまだ誰だれも忘わすれない、朝あさからすさまじい大風おほかせで、花はなは盛りだしたやうな眞赤まつかな砂煙すたけむりに、咽喉のどを詰つまらせて歸かへりがけ、見付みつけの火ひの見櫓みやぐらの頂邊てつせんで、かう、薄赤うすあかい、おぼろ月夜つきよのうちに、人影ひとかげの入亂いりみだれるやうな光景くわうけいを見たが。——淺草邊あさくさへんへ病人びやうじんの見舞みまひに、朝あさのうち出でかけた家内かたが、四時頃よじごろ、うすぼんやりして、唯今たいまと歸かへつた。見舞みまひに持もつて出でた、病人びやうじんの好きさうな重詰ちゆうづめものと、いけ花いけはなが、そのまゝすわつた前かけの傍そばにある。「おや。」「どうも、何なんだつて大變たいへんな人で、とても内うちへは入れません。」「はてな、へい？……」いかに見舞客みまひきゃくが立込たてこんだつて、まはりまはつて、家いへへ入れないとは變へんだ、と思おもふと、戶外かみてを吹ふきさぶ風かぜのまぎれに、かすれ聲こゑを咳せきして、いく度たびか話はなしが行違ゆきちがつて漸やうと分わかつた。大火事おほいふじだ！そこへ號外ごうがいが駈かまはる。……それにし

ても、重詰ちゆうづめを中味ななかみのまゝ持もつて來こる事ことはない、と思おもつたが、成程なるほど、私わたしの家内かただつて、面おもはどうでも、髪かみを結ゆつた婦をんなが、「めしあがれ。」とその火事場くわじばの眞中まなかに、重詰ちゆうづめに花はなを添そへて突つだしたのでは狂人きやうじんにされるより外ほかはない……といつた同じ日おなじひの大風おほかせに——あゝ、今年ことしは無事ぶじでよかつた。……

品 小

所で地震前ちしんまへのその大雪おほゆきの夜よるである。晚食ばんしょくに一合いちがふで、いゝ心持こゝろもちにこたつて寢込ねこんだ。ふすま一重茶いちじゆうちやの室まで、濱野はまのさんの聲こゑがするので、よく、この雪ゆきに、と思おもひながら、ひよいと起きて、ふらりと出でた。話はなしをするうちに、さく／＼と雪ゆきを分わける音おとがして、おん厄拂やくはらひましましな、厄落やくおとし。……妹背山いもせやまの言立いひたてなんぞ、芝居しばゐのは嫌きらひだから、青あをものか、魚さかなの見立みたてで西にしの海うみへさらり、などを聞きくと、又またさつ／＼と行ゆく。おん厄拂やくはらひましましな、厄落やくおとし。……遙はるかに聲こゑが消きえると、戶外かみてが宵よひの口くちだのに、もう寂寞しんとして、時々ときどきびゆうと風かぜが騒さわぐ。何なんだか、どうも、さつきから部屋へやへ氣きがこもる。玄關境げんくわんざかひのふすまを開あけたが、矢張やっぱり息いきがこもる。そのうち、香かほしいやうな、遠とほくで……海か藻そうをあぶるやうな香かほが傳つたはる。香かほは可厭にほひではないが、少すこしうつたうしい。出窓でまどを開あけた。おゝ、降ふる／＼、壯さかんに白しろい。まむかうの黒くろべいも櫻ざくらがかぶさつて眞白ましろだ。さつと風かぜで消けしたけれども、しめた後は又またこもつて咽むせつぽい。濱野はまのさんも咳せきして居ゐた。寒餅かんもちでも出だす氣きだつたか、家内かたが立たつて、この時とき、はじめ、座敷ざしきの方ほうのふすまを開あけた、……と思おもふと、ひし／＼と疊たたみにくひ込こん

で、そのくせ飛ぶやうな音を立てて、「水、水……」何と、立つと、もう／＼として、八疊は黒い吹雪。

煙の波だ。荒磯の巖の炬燵が眞赤だ。が此時燃抜けては居なかつた。後で見ると、櫓の兩脚からこたつの縁、すき間をふさいだ小布團を二枚黒焦に、下がけの裾を焼いて、上へ抜けて、上がけの三布布團の綿を火にして、表が一面に黄色にいぶつた。もう一呼吸で、燃え上るところであつた。臺所から、座敷へ、水も夜具も布團も一所に打ちまけて、こたつは忽ち流れとなつた。が屈強な客が居合せた。女中も働いた。家内も落つた。私は一人、おれぢやあない、おれぢやあない、と、戸惑ひをして居たが、出しないに、踏込んだに相違ない。この時も、さいはひ何處の窓も戸も閉込んで居たから、きなつ臭いを通り越して、少々小火の臭いするのが屋根々々の雪を這つて遁げて、近所へも知れないで、申譯をしないで済んだ。が、寒さは寒し、こたつの穴の水たまりを見て、胴震ひをして、小くなつて畏まつた。夜具を背負はして町内をまはらせられないばかりであつた。あいにく風が強くなつて、家の周囲を吹きまはる雪が、こたつの下へ吹たまつて、パツと赤く成りさうで、一晩おびえて寝られなかつた。——下宿へ歸つた濱野さんも、どうも、おち／＼寝られない。深夜の雪を分けて、幾度か見舞はう、と思つたほどだつたさうである。これが節分の晩である。大都會の喧騒と雑音に、その日、その日の初るものは、いつか、魔

界の消息を無視し、鬼神の隠約を忘却する。……

五年とは経たぬのに——浮りした。
今年、二月三日、點燈頃、やゝ前に、文藝春秋の事について、……齋藤さんと、菅さんの時々見えるのが、その日は菅さんであつた。小稿の事である。——その夜九時頃濱野さんが来て、茶の間で話しながら、ふと「いつかのこたつ騒ぎは、丁度節分の今夜でしたね。」といふのを半聞くうちに、私はドキリとした。總毛立つてぞつとした。——前刻、菅さんに逢つた時、私は折しも紅インキで校正をして居たが、組版の一面何行かに、ヴェスピヤス、噴火山の文字があつた。手近な即興詩人には、明かにエズキオと出て居るが、これをそのままには用ゐられぬ。いさゝか不確かな所を、丁度可い。教へをうけようと、電氣を點けて、火鉢の上へ、あり合せた白紙をかざして、その紅いインキで、ヴェスピヤス、ヴェスピヤス、ヴェスヴィヤス、ヴェスピヤス、どれが正しいのでせう、と聞き／＼——彩り記した。

あゝ、火のやうに、ちら／＼する。

品小
私は二階へ驅上つて、その一枚を密と懐にした。
冷たい汗が出た。

濱野さんが歸つてから、その一枚を水に浸して、そして佛壇に燈を點じた。謹んで夜を守つたのである。

眞夏の梅

大正十五年九月

梅や漬梅——梅や漬梅——は、……茄子の苗や、胡瓜の苗、……苗賣の聲とは別の意味で、これ、世帯の夏の初音である。さあ、そろ／＼梅を買はなくては、と云ふ中にも、馴染の魚屋、八百屋とは違つて、此の振賣には、値段に一寸掛引があつて、婦たちが、大分外交を要する。……去年買ったのが、もう今に来るだらう、あの聲か、その聲か、と折から降りみ降らずみの五月雨に、きいた風流ではないが、一ぱし、聲のめき／＼をしよう量見が、つい、ものに紛れて、うか／＼かと思つた。三日四日、一日に幾度も續いたのが、ばつたり来なくなる。うつかりすると、もう間に合はない。……だら／＼急で、わざ／＼八百屋へ注文して取寄せる時分には、青紅、黄青、それは可、皺んで堅いのなど、まじりに成つて、粒は揃つても質が亂れる。然も、これだと梅つける行事が、奥様、令夫人のお道楽に成つて、取引がお安くは参らない。お慰みに遊ばす、

品小

お臺所ごつことは違ふから、何でも、早い時、「たかいぢやないかね、お前さん、」で、少々腕まくりで談判する、おつかあ、山のかみの意氣でなくては不可い。で、億劫だから買ひはぐす事が毎度ある。それに、先と違つて、近頃では、其の早いうちに用意をしても、所々の寄せあつめ、の、樹の雑種が入交つて、紅黄、青玉の如くあるべきが、往々にして烏合の砂利なるが少くない。久しい以前、逗子に居た時、坂東二番の靈場、岩殿寺觀世音の庵の梅を分けて貰つた事がある。圓澤、光潤、傳へきく豊後梅と云ふのが此だらうと思ふ名口口であつた。旅行して見るに、すべて、京阪地は梅が佳い。南地の艶の家といふので、一座の客は、折からの肉羹に添へて、ぎうひ昆布で茶漬るのに、私は梅干を頼んだが、實に佳品で、我慢ではない、敢て鯛の目を羨まなかつた。場所がらの事だし、或は漬もの屋から臨時に取寄せたものかも知れないが、紅潤にして、柔軟、それで舌にねばらない。瓶詰ものの、赤い汁がばしやばしやと溢れて、嚙むとガリ、と来て、肉と核との間から生暖い水の、ちゆうと垂れるのとは撰が違ふ。京都大宮通お池の舊家、小川旅館のも、芳香尚ほ一層の名品であつた。東北地方のは多く乾びて堅い。汽車の輕井澤の辨當には、御飯の上に、一粒梅干が載せてある。小さくて堅い、が清く潔い事に異論はない。最もつい通り旅人が、道中で味ふのは、多くは賣品である。すべて香のものの中にも、梅は我が家に於て漬けるのを、色香ともに至純とする。

うろ覚えの、食鑑曰。――

凡梅干者。上下日用之供、上有鹽梅相和義。下有收蓄貨殖之利而。不可無者也。至其清氣逐邪之性。以可通清明。

含めば霧を桃色に披いて、月にも紅が照添はう。さながら、食中の紅玉、珊瑚である。

またそれだけに、梅を漬けるのは、手軽に、胡瓜、茄子、即席、漬菜のやうには行かない。最も、婦人は身だしなみ、或場合つゝしみを要する、と心あるものは戒める。蓋し山妻野娘のうけたまはる處、――モダンの淑女たちが漫ろに手をつけたまふべきものではない。何も意固地に鼻の先ばかり白うして、爪の垢が黒いからとは言はない。ちやんと清めてかゝらないと、汗、膏はおろかな事、香水、白粉の指をそのまゝに、梅の實を洗つて、鹽を淹した桶の中へ觸れると、立處に黴が浮く。斷髪もじやもじやの抜毛を落すこと憚るべく、バタ臭い手などが入ると、忽ち藻が朽ちたやうに濁つて、甚しき敗に及ぶ。……

だから、梅漬けると言へば、髪も梳り、沐浴もし、身を清めて、たゞ躰は薄化粧か。友禪か紅い禪。……いづれ暑い頃の事だから、白地、瓶のぞきの姉さんかぶりの姿を思はせて、田植をはじめ、簞籠、茶摘の風情とは又異つた、清楚な風情を偲ばせる。……昔からの俳句にも、町家の行事の低うした景趣が多いのである。

――内では、此の二三年、伊豆の修善寺にたよりがあるので、新井に頼んで、土地の梅林の梅を取寄せる。粒はやゝ小さいが、肉厚く、皮薄く、上品とする。よく洗つて、雫を切つて、桶に入れ、鹽にする。日を経て、水の上つた處で、深く蔽つた蓋を拂ふと、つらりと澄み切つた水の其の清さ、綺麗さよ。ひやりと冷く、いゝ薫が、ぱつとして、氷室を出でた白梅の粧である。

「御覽なさい、今年もよく漬りました。」

此の時ばかりは、みそかに濁る顔でなく、女房の色も澄んでゐる。

「いや、ありがたう。」

野郎どのも、一步を譲つて、女房の背中から、及腰に拜見する。何うも意地ぎたなに、おつまなどと、桶の縁へも觸れかねる。くれぐれも、内證で撮むべからずと、懇談に及ばれて居た女中も、禁が解けて、吻として、

「まあ、おいしさうでございますこと。」

と世辭を言ふ。

煤けた屋根裏で、鶯が鳴きさうな氣もするのである。

これから紫蘇に合はして置いて、土用の第一の丑の日を待つて、はじめて、日に乾すのが、一

般の仕来りに成つて居る。大抵いゝ工合に、其の頃は照が續く。暑い／＼と言ふうちに、此の日は、炎天、大暑、極暑、日盛と、字で見ても、赫と目の眩むやうなのが却て頼もしい。吹きさらし……何うも些と吹きさらしは可笑いけれども、日光直射などと言ふより、吹きさらしの方が相應しい……二階の物干が苦に成らない。

「いゝ色だなあ。」

芳紅にして、鮮潤也。思はず唇に蜜を含むで、

「すてき〜。」

と又こゝでも一步を譲つて、裏窓から覗くと、目を射る、炎天の物干では、あまり若くはないが、姉さん被りで、箆に上げたのを一つ一つ、眞紅の露の垂る處を、青いすだれに並べて居る。無論、夕立は禁物だが、富士から、筑波から、押上げる凄じい雲の峰も、梅を干すには、紫の衝立、墨繪の雪の屏風に見えて、颯と一面の紅は、烙られつゝも高山のお花畑の、彩霞、紅氷の色を思はせる。

見る目も潔く、邪を拂つて、蚊も、蟻子も近づかない。——蜂は赤く驚き、蝶は白く猶豫ふ。が、邪悪を蠢かす蠅だけは、此の潔純にも遠慮しない。隙を狙つてはブーンと来て、穢濁を採みつけること、御存じの如しだから、古式には合はないが、並べた上へ、もう一重、白い布を一杯

に蔽ふ事にして居る。たゞし蠅は、布の上へ、平気で留まつて、布の目越しに、無慚に梅の唇を吸ふのである。

家内が工風して、物干の横木から横木へ、棹竹を渡して、絲を提げて、團扇をうつむけに、柄を結んで、梅を干した上へ掛ける事にした。

「では、頼みましたよ。」

此をはじめから、最う三四年馴染だから、つい心安だてに、口を利いて、すつかり、支度を爲澄ましたあとを、手を離して、とんと窓を疊へ下りる、と、もう團扇子は驟然と動く。

ひらりと動いて、すつ／＼と、右左へ大きく捌けて、一つくる／＼と廻るかと思ふと、眞中でスーッと留まつて、又ひらりと翻る。

「うまいよ。」

などと、給金の出ない一枚看板だから、頻に賞めて、やがて又洗濯もののしきのしなやかに、とん／＼と下階へ下りて行く。いや、あとは勝手放題……ふら／＼、ひよい／＼、ひよい、ばさばさ、ばさ、ばツばツと、働く、働く。風が吹添はうものなら、ほん／＼と飛んで、干棹を横ばたきに、中空へツツと上つて、きり／＼きり／＼と舞流しに流れて戻り、スツと下りて、又ひら／＼と舞ひ上り、ポンとはずんで、きり／＼きりと舞つて来る。舞ひ上るかと思ふれば舞ひ

下りる。ともすれば柄を尾に巻いて、化鳥の羽搏く如く、或は、大く鰭を伸して、怪魚の状してゆらりと泳ぐ。如何に油早だと云つても物乾だから風はある。そよりとも、また吹かない時も、梅の香の立つかと思ふばかり、團扇は、ふはくと、揺れて居る。

風はおのづから律をなして、その狂ひかた、舞ひぶりは、なまじつかなダンスより遙におもしろい。且は毒蟲を拂ふのである。私は、疊二疊ばかり此方に、安價な藤椅子に、枕から摺下つて、低い處で、腰を掛けて、ひとりで莞爾々々して今年も見居た。氣味を悪がつては不可い。斷じて家内の工夫に就いてでない、團扇の風の舞振である。

去年であつた。……をかしかつたのは、馴染の雀で。……親たちから、まだ申傳がなかつたと見える。物干の下に小屋根を隔てた、直ぐ其の板塀の笠木へ、朝から——これで四五度めの御馳走をしめに來た七八羽の仔雀が、其の年の最初の事だから、即ち土用の丑の日。團扇がひらひらと舞ふと、ばつと音を立てて飛上つた。慌てたのは、峙の枇杷の樹へまじぐらに飛んだし、中くらゐなのは、路次裏の棟瓦へ高く遁げる、一寸落着いたのが、其の廂へ絶つた。はずんで、電信柱の素天邊へ驅上つて、きよとんとして留まつて居たのがある。遁足は見事だが、いづれも食しん坊だから、いつまでも我慢が出来ない。見るうちに、しばらくすると、ばら、ばらばら、ちよんくと寄せて來て、笠木の向う上に、其の裏家の廂の樋竹に半分潜んで、づらりと並

んで、横におしたり、押しかへしたり、てんでに、圓い頬、かはいく嘴を出して尖がらかつて、お飯粒と、翩翩たる團扇とを等分に窺つた。

家内が笑ひながら見て居た。

「可恐くはないんだよ。」

「馬鹿だな、此奴等、此の野郎たち。」

娘も、いやお嬢さんも交つては居るのだらうが、情ない事にお邸の手飼でない。借家の野放しだから、世につれて、雀も自から安つばい。野郎よばはりをして、おたべ、と云つても、きよろきよろして居る。

勇悍なのが一羽——不思議に年々大膽なのが一羽だけ屹と居る——樋を、ちよんと出たと思ふと、物干と摺れ／＼に立つた隣屋の背戸なる、ラジオの、恚う撓つた竹棹へ、ばつと付いて、羽で抱くやうに留つたが、留つて、しばらくして、する／＼と、段々に上へ傳つて、最も近い距離から、くる／＼と舞ひ、ぱつ／＼と躍る團扇に、熟と目を据ゑて、毛が白く見ゆるまで、ぐいと、ありつたけ細く頸を伸ばした。

處へ、ポンとはずんだ團扇の面に、ハツと笑つた、私たちの聲を流石に、忽ち、チチツと鳴いて、羽波を大きく、Uを描いて、樋竹を切つて飛ぶと、悠然と笠木の餌に下りた。

連れて集つたのは言ふまでもない。

今年は、初めから、平気で居る。時々團扇を上下に、チチツと鳴いて遊んで居る。

……いや、面白い。暑さを忘れる。……何うかすると、飛びすぎ、舞ひすぎに、草臥れたやうに、短く糸を巻いて、團扇子、小廂に乗つて、休んで居る時がある。

「御苦勞でした、また明日。……」

實際、見て居て氣の毒に成るほど、くる／＼きり／＼、ボンと飛び、颯と翻つて、すき間なく、よく働く。式亭三馬、製する處の、風見の鳥の、高く留つて、——ぶら／＼と氣散じスで、町を行く美婦を見て樂みながら、笄の値ぶみをする、不良な奴さへ、いたづら小僧に尾を折つべしよられたと聞けば、痛さうだし、夕風が吹いて来て——さあ／＼さあ、俺は此からが忙しい、アレアレ又吹いて来た、とくるりと廻つて、あ、又くるりと廻るのさへ、氣の毒らしいのに

藤のを使つた事がある。繪によつては、いた／＼しい……遠慮して今年は、町の消防頭の配つた水車の繪を使つた。物干にぱつと威勢よく、水玉の露を飛ばす。

梅を干さない時も……月夜など嘸と思ふ。私は夜どほし此の團扇を、物干に飛ばして居たい。——もの知が不可い、と言ふ。

「魔がさしさうだから。——」

成程。……かりに、團扇の繪を女の大首にでもして見るか、ばアと窓から覗きもしようし、雲暗ければ髪も散らさう。

——のりつけほうほう——

町内の、あの、大銀杏で、眞夜中に梟が鳴くと、

「誰さ？……」

と、ぴたりと、靜に其の團扇の面を。……稻妻遠き、物干にて。……

もしそれ、振袖をきせて、二三枚、花野に立たせて見るが可い、團扇は人を呼ぶであらう。

麻を刈る

大正十五年九月—十月

品 小

明治十二年頃の出版だと思ふ——澤村田之助曙双紙と云ふ合巻ものの、淡彩の口繪に、黒縮緬の羽織を撫肩に引つ掛けて、出の衣装の袂を取つた、座敷がへりらしい、微醉の婀娜なのが、俵の傍にイずんで、春たけなはに、夕景色。瓦斯燈がほんのり點れて、あしらつた一本の青柳が、

裾を曳いて、姿を競つて居て、唄が題してあつたのを覚えて居る。曰く、(金子も男も何にも入らぬ微酔機嫌の人力車)——少々間違つて居るかも知れないが、間違つて居れば、其の藝妓の心掛で、私の知つた事ではない。何しろ然うした意気が唄つてあつた。或は俾のはやりはじめの頃かも知れない。微酔を春の風にそよ／＼吹かせて、身體がスツと柳の枝で宙に靡く心持は、餘程嬉しかつたものと見える。

今時バアで酔拂つて、タクシイに踏掛け込んで、いや、どツこいと腰を入れると、がた、がたと揺れるから、脚を慕の如く踏張つて——上等のは知らない——屋根が低いから屈み腰に眼を据ゑて、首を虎に振るのは圖が違ふ。第一色氣があつて世を憚らず、親不孝を顧みざる輩は、男女で相乗をしたものである。敢て註するに及ばないが、俾の上で露呈に丸髻なり島田なりと、散切の……悪くすると、採上の長い奴が、肩を組んで、でれりとして行く。些と極端にたとへれば、天鵞絨の寢臺を縦にして、男女が處を、廣告に持歩行いたと大差はない。自動車に相乗して、堂々と、淺草、上野、銀座を飛ばす、當今の貴婦人紳士と雖も、これを見たら一驚を吃するであらう。誰も口癖に言ふ事だが、實に時代の推移である。だが其のいづれの相乗にも、齊しく私の關せざる事は言ふまでもない。とにかく、色氣も聊か自棄で、穩かならぬものであつた。

——(すきなお方と相乗人力車、暗いとこ曳いてくれ、車夫さん十錢はずむ、見かはす顔に、その手が、おつだね)——恠う云ふ流行唄さへあつた。おつだね節と名題をあげたほどである。何にしる人力車はすくなからず情事に交渉を持つたに相違ない。

金澤の人、和田尙軒氏著。郷土史談に採録する、石川縣の開化新開、明治五年二月、其の第六號の記事に、

先頃大阪より歸りし人の話に、彼地にては人力車日を追ひ盛に行はれ、西京は近頃までこれなき所、追々盛にて、四百六輛、伏見には五十一輛なりと云ふ。尙ほ追々増加するよし……其處で、東京府下は總數四萬餘に及ぶ。

と記して、一車の税銀、一ヶ月八匁宛なりと載せてある。勿論、金澤、福井などでは、俵藤太も、頼光、瀧夜叉姫も、まだ見た事もなかつたらう。此の東京の四萬の數は多いやうだけれども、其の頃にしろ府下一帯の人口に較べては、辻駕籠ほどにも行渡るまい、然も一ヶ月税銀八匁の人力車である。なか／＼以て平民には乗れさうに思はれぬ。時の流行といへば、別して婦人が見得と憧憬的にする……的となれば、金銀相輝く。弓を學ぶものの、三年凝視の瞳には的の風も其の大きき車輪である。従つて、其の頃の巷談には、車夫の色男が澤山あつた。一寸岡惚をされることは、やがて田舎まはりの賣藥行商、後に自動車の運轉手に譲らない。立志美談車夫の何とか

がざらにあつた。

しばらくの間に、俵のふえた事は夥しい。

人力車——腕車が、此の1に車と成つた、字は紅葉先生の創意であると思ふ。見附を入つて、牛込から、飯田町へ曲るあたりの帳場に、(人力)を附着けて、一寸(分)の字の形にしたのに、車をつくり添へて、大きく一字にした横看板を、通りがかりに見て、それを先生に、私が話した事がある。「そいつは可笑しい。一寸使へるな。」と火鉢に頼杖をつかれたのを覚えて居る。

……更めて言ふまでもないが、車賃なしの兵児帯でも、辻、巷の盛り場は申すまでもない事、待俵の、旦那御都合で、を切抜けるのが、てくの身に取大苦勞で。どやどやどや、がら／＼と……大袈裟ではない、廣小路なんぞでは一時に十四五臺も取巻いた。三橋、雁鍋、達摩汁粉、行くさき眞黒に目に餘る。「こいつを樂に切抜けないぢや東京に住めないよ。」と、よく下宿の先輩が然う言つた。

十四五年前、いまの下六番町へ越した頃も、すぐ有島家の黒塀外に、辻車、いまの文藝春秋社の前の石垣と、通を隔つた上六の角とに向ひ合ひ、番町學校の角にも、づらりと出て居て、もの一二町とはない處に、其のほかに尙ほ宿車が三四軒。

——春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、續いて、秋の新仁和賀には、十分間に車の飛ぶこと、此の通りのみにて七十五輛。

と、大音寺前の姉さん、一葉女史が、乃ち袖を巻いて拍子を取つた所以である。

——十分間に七十五輛、敢て大音寺前ばかりとは云はない。馬道は俵で填まつた。淺草の方の、悉い事は、久保田さん(万ちゃん)に聞くが可い。……山の手、本郷臺。……切通しは堰を切つて俵の瀧を流した。勿論、相乗も渦を巻いて、人とともに舞つて落ちる、江智勝、豊國あたりで、したゝかな勢に成つたのが、ありや／＼、と俵の上で、蛸の手で踊つて行く。でつかんしよに、愉快ぶし、妓夫臺談判破裂して——進めツ——いよう、御壯、どうだい隊長と、喚き合ふ。——どうも隊長。……まことに御壯。が、はずんで下りて一淀みして廻る處から、少し勢が鈍くなる。知らずや、仲町で車夫が、小當りに當るのである。「澄まねえがね、旦那。」甚しきは楫を留める。彼處を抜けると、廣小路の角の大時計と、松源の屋根飾を派手に見せて、又は始める。「ほんの蠟燭だ、旦那。」さて、最も難場としたのは、山下の踏切の處が、一坂下らうとする勢を、故と線路で沮めて、ゆつくりと強請りかゝる。處を、辛うじて切抜けると、三島様の曲角で、又はじめで、入谷の大池を右に、ぐつと暗くなるあたりから、次第に凄く成つたものだ——と聞く。……實は聞いただけで。私の覺えたのは……そんな、そ、そんな怪しからん場所ではない。國

へ往復の野路山道と、市中も、山まはりの神社佛閣ばかり。だが一寸こゝに自讃したい事がある。酒は熱燗のぐい呷り、雲助の風に似て、茶は番茶のがぶ飲み。料理の食べ方を心得ず。お茶碗の三葉は生煮えらしいから、そつと片寄せて、山葵を生きもののやうに可恐がるのだから、われながらお座がさめる。さゝ身の煮くたらしを、ほう／＼と吹いてうまがつて、焼豆腐ばかりを手元へ取込み、割前の時は、鍋の中の領分を、片隅へ、群雄割據の地圖の如く劃つて、真中へ埋た臍もつを、箸の尖で穴をあけて、火はよく通つたでござらうかと、遠目金を覗くやうな形をしたのでは大概岡惚も引退る。……友だちは、反感と輕侮を持つ。精々同情のあるのが苦笑する。と云つた次第だが……たゞ俾に掛けては乗り方がうまい、と——最も御容子ではない——曳いてる車夫に讚められた。拾ひ乗だと、樹の下、塀續きなぞで、わざ／＼振向いて然う言つた事さへある。

乗るのがうまいと言ふ下から、落ちることもよく落ちた。本郷の菊坂の途中で徐々と横に落ちたが寺の生垣に引掛つた、怪我なし。神田猿樂町で、幌のまゝ、打倒れた、ヌツと這出る事は出たが、氣つけの寶丹を買ふつもりで藥屋と間違へて汁粉屋へ入つた、大分茫としたに違ひない、が怪我なし。眞夏、三宅坂をぐん／＼上らうとして、車夫が膝をトンと支くと蹴込みを迂つて、ハツと思ふ拍子に、車夫の背中を跨いで馬乗りになり留まつて「怪我をしないかね。」は出来が可い。師

趕の算段に駆け廻つて五味坂で投出された、此の時は、懐中げつそりと寒うして、心、慮なるが故に、路端の石に打撞かつて足の指に怪我をした。最近は……尤も震災前だが……土橋のガード下を護謨輪で颯と言ふうちに、アツと思ふと私はポンと俾の外へ眞直に立つて、車夫は諸膝で、のめつて居た。蓋し、期せずして、一つ宙返りをして車夫の頭を乗越したのである。拂ふほど砂もつかない、が、此れは後で悚然とした。……實の處今でもまだ吃驚してゐる。

要するに——俾は落ちるものと心得て乗るのである。而して、悪道路と、坂の上下は、必ず下りて歩行く事——

これ、當流の奥儀である、と何も矢場七、土場六が、茄子のトントンを密造する時のやうに秘傳がるには及ばない。——實は、故郷への往復に、其の頃は交通の必要上止むを得ず幾度も長途を俾にたよつたため、何時となく乗るのに馴れたものであらうと思ふ。……

品 小
汽車は、米原を接續線にして、それが敦賀までしか通じては居なかつた。「むき蟹」「殼附。」などと銀座のはち巻で旨がる處か、ヤターでも越前蟹(大蟹)を誂へる……わづか十年ばかり前までは、會席の膳に恭しく袴つきで罷出たのを、今から見れば、嘘のやうだ。けれども、北陸線の通じなかつた時分、舊道は平家物語、太平記、太閤記に至るまで、名だたる荒地山、歸、虎杖坂、中河内、燧ヶ嶽。——新道は春日野峠、大良、大日枝の絶所で、其の敦賀金ヶ崎まで、これ

を金澤から辿つて三十八里である。蟹が歩行けば三年かゝる。

最も、加州金石から——蓮如上人縁起のうち、嫁おどしの道場、吉崎の港、小女郎の三國へ寄つて、金ヶ崎へ通ふ百噸以下の汽船はあつた。が、事もおろかや如法の荒海、剩へ北國日和と、諺にさへ言ふのだから、浪はいつも穩かでない。敦賀は良津ゆゑ苦勞はないが、金石の方は船が沖がかりして、波の立つ時は、端舟で二三里も採まれば成らぬ。此だけでも命がけだ。冬分は往々敦賀から來た船が、其處に金石を見ながら、端舟の便がないために、五日、七日も漾ひつゝ、果は佐渡ヶ島へ吹放たれたり、思切つて、もとの敦賀へ逆戻りする事さへあつた。

上京するのにもう一つの方法は、金澤から十三里、越中伏木港まで陸路、但し俱利伽羅の嶮を越す——其の伏木港から直江津まで汽船があつて、すぐに鐵道へ續いたが、申すまでもない、親不知、子不知の沖を渡る。……此の航路も、おなじやうに難儀であつた。もしこれを陸にしよるか。約六十里に餘つて遠い。肝心な事は、路銀が高値い。

其處で、暑中休暇の學生たちは、むしろ飛驒越で松本へ嶮を冒したり、白山を裏づたひに、夜叉ヶ池の奥を美濃路へ渡つたり、中には佐々成政のさら／＼越を尋ねた偉いものさへある。……現に、廣島師範の……閣下穂科信良は——こゝに校長たる其の威嚴を傷つけず禮を失しない程度で、

祝意に少し抑捺を含めた一句がある。本来なら、別行に認めて、大に俳面を保つべきだが、悪口の意地の悪いのがちき近所に居るから、謙遜して、二十字づめの中へ、十七字を割込ませる。曰く、千兩の大禮服や土用干。——或は曰く——禮服や千兩を土用干——此の大禮服は東京で出來た。が、帽を頂き、劍を帯び、手套を絞ると、坐るのが變だ。床几——といふ處だが、——親類の家で——其の用意がないから、踏臺に鬼然として腰を掛けた……んぢや、と笑つて、當人が私に話した。夫人、及び學生さん方には内證らしい。——その學生の頃から、閣下は學問も腹も出來て居て、私のやうに卑怯でないから、泳ぎに達しては居ないけれども、北海の荒浪の百噸以下を恐れない。恐れはしないが、不思議に船暈が人より激しい。一度は、餘りの苦しさに、三國沿岸で……身を投げて……いや、此だと女性に近い、いきなり飛込んで死なうと思つた、と言ふほどであるから、一夏は一人旅で、山神を驚かし、蛇を踏んで、今も人の恐るゝ、名代の天生峠を越して、あゝ降つたる雪かな、と山蛭を袖で拂つて、美人の孤家に宿つた事がある。首尾よく岐阜へ越したのであつた。

道は違ふが——話の次でだ。私も下街道を、唯一度だけ、伏木から直江津まで汽船で渡つた事がある。——後にも言ふが——いつもは件の得意の俵で、上街道越前を敦賀へ出たのに——爾時は、旅費の都合で……聞いて、眞實にはなさるまい、伏木の汽船が、兩會社で激しく競争して、

乗客争奪の手段のあまり、無賃銀、たゞでのせて、申會社は手拭を一筋、乙會社は繪端書三枚を景物に出すと云ふ。……船中にて然やうな事は申さぬものだが、龍宮場末の活動寫眞が宣傳をするやうな風説を聞いて、乗らざるべけんやと、旅費の苦しいのが二人づれで驅出した。

此の同伴は、後の校長閣下の事ではない。おなじく大學の學生で暑中休暇に歸省して、糠鯨……易くて、量があつて、舌をピリ、と刺戟する、糠に漬込んだ鯨……に親んで居たのと一所に、金澤を立つて、徒歩で、森下、津幡、石動。……それよりして、俱利伽羅に掛る、新道天田越の峠で、力餅を……食べたかつたが澁茶ばかり。はツツと漸と越して、漫々たる大きな川の……それは庄川であらうと思ふ——橋で、がっかりして弱つて居た處を、船頭に半好意で乗せられて、流れくだりに伏木へ渡つた。様子を聞くと、汽船會社の無錢で景物は、裏切られた。何うも眞個ではないらしいのに、がっかりしたが、此の時の景色は忘れない。船が下流に落ちると、暮雲岸を籠めて水天一色、江波渺茫、達く蘆が靡けば、戀々として鷺が佇み、近く波が動けば、ア、鯨か？ 鵜が躍つた。船頭が辨當を使ふ間、しばらくは船は漂蕩と其の流るゝに任せて、やがて、餉を澄まして、ざぶりと舷に洗ひ状に、割籠に掬むとて掻く水が、船脚よりは長く尾を曳いて、動くもののない江の面に、其船頭は悠然として、片手で櫂を繰りはじめながら、片手で其の水を

飲む時、白鷺の一羽が舞ひながら下りて、舷に留まつたのである。

いや、そんな事より、力餅さへ食はぬ二人が、辨當のうまさうなのに、ごくりと一所に唾をのんでお腹が空いて堪らない。……船頭の茶も糠鯨で。……

これには鯨もある——糠鯨、且つ恐るべきものに河豚さへある。這個糠漬の大河豚。

何と、此の糠河豚を、紅葉先生に土産に呈した男がある。たゞものに掛けては、中華亭の娘が運ぶ新栗のきんとんから、町内の車夫が内職の駄菓子店の鐵砲玉まで、趣を解しないでは置かない方だから、遅い朝御飯に茶漬で、さら〜。しばらくすると、玄關の襖が、いつになく、妙に靜に開いて、懷手で少し鬱した先生が、

「泉。」

「は。」

「あの、河豚は、お前も食つたか。」

「故郷では、惣茶にしますんです。」

「おいら、少し腹が疼むんだがな。」

「先生、河豚に中害つて、疼む事はないんださうです。」

「あゝ、然うか。」

すつと、其のまゝ二階へ、――

いま、我が瀧太郎さんは、目まじろがず、一段と目玉を大きくして、然も糠にぶく／＼と熟れて甘い河豚を食ふから驚く。

新婚當時、四五年故郷を省みなかつた時分、穂科閣下は、あゝ糠練が食ひたいな、と暫々言つて繰返した。

「食はれるものかね。」

「いや、然うでない、あれは珍味ぢやぞ。」

その後歸省して、新保村から歸つて、

「食つたよ。――食つたがね、……何うも何ぢや、思つたほどでなかつたよ。」

然うだらう。日本橋の砂糖問屋の令嬢が、圓髷に結つて、あなたや……鯨の新ぎれと、夜行の鮭を教へたのである。糠練がうまいものか。

さて、其の晩は伏木へ泊つた。

夜食の膳で「あゝあ、何だい此れは？」給仕に居てくれた島田髷の女中さんが、「鯨ですの。」
鯨の魚肝、冷たい綿屑を頬張つた。勿論、宿錢は廉い。いや、糞も食はず、鯨を吐いた。洒落で

はなしに驚いた。港を前に鯨の皿、うらなつて思ふに、しげだなあ。――風の模様は……まあ何うだらうと、此弱蟲が悄々と、少々ぐらつく欄干に凭りかゝると、島田がすつと立つて……九月

初旬でまだ浴衣だつた、袖を掻い込むで、白い手を海の上へさしのべた。手の半帕が屋根を斜に山の端へかゝつて颯と靡いた。「此の模様では大丈夫です。」私は嬉しかつた。

おなじ半帕でも、金澤の貸本屋の若妻と云ふのが、店口の暖簾を肩で分けた半身で、でれりと坐つて、いつも半帕を口に啣へて、うつむいて見せた圖は、永洗の口繪の艶冶の態を眞似て、大に非なるものであつたが、これは期せずして年方の挿繪の清楚であつた。

處で汽船は――うそだの、裏切つたのと、生意氣な事を言ふな。直江津まで、一人前九錢也。

……明治二十六年頃の事とこそいへ、それで、午餉の辨當をくれたのである。器はたとへ、蓋なしの鉢力で、石炭臭い茶が、車麩の煮たの三切にして、「おい來た。まだ、そつちにもか――そら來た。」で、帆布綿の幕の下に、ごろ／＼した連中へ配つたにせよ。

日一杯……無事に直江津へ上陸したが、時間によつて汽車は長野で留まつた。扇屋だつたか、藤屋だつたか、土地も星も暗かつた。よく覺えては居ないが、玄關へ掛ると、出迎へた……お太

鼓に結んだ女中が跪いて――ヌイと突出した大學生の靴を脱がしたが、べこぼこんと弛んで、其癖、硬いのがごそりと脱げると……靴下ならまだ可い「何、體裁なんぞ、そんな事。」邊幅を修し

ない男だから、紺足袋で、おや指の尖に大きな穴のあいたのが、油蟲を挟んだ如く顯はれた。…
渠は金釦の制服だし、此方は袴なしの鳥打だから、女中も一向に構はなかつたが、いや、何し
ても、靴は羊皮の上等品でも自分で脱ぐ方が可ささうである。少し氣障だが、色氣があるのか、
人事ながら、私は恥ぢた。

…思ひ出す事がある。淺草田原町の裏長屋に轉がつて居た時、春寒い頃…足袋がない。…
最も寒中もなかつたらしいが、何うも陽氣に向つて、何分か色氣づいたと見える。足袋なしで
は仲見世へ出掛け憎い。押入でふと見附けた。裏長屋のあると言ふのが醫學生で、内證で怪い
脈を取つたから、白足袋を用ゐる、その薄汚れたのが、片方、然も大男のだから私の足なんぞ二
つ入る。細君に内證で、左へ穿いた——で仲見世へ。…晝間出掛けられますか。夜を待つて路
次を出て、觀世音へ參詣した。御利益で、怪我もしないで御堂から裏の方へうか／＼と廻つて、
象と野兎が歩行ツくら、と云ふ珍な形で行くと、忽ち灯のちらつく暗がりに、眞白な顔と、青い
半襟が兩側から、

「ちよいと、ちよいと、ちよいと。」

「白足袋の兄さん、ちよいと。」

私は冷汗を流して、「生足袋を断たうと思つた。」

後に——丸山福山町に、はじめて一葉女史を訪ねた歸り際に、襟つき、銀杏返し、前垂掛と云
ふ姿に、部屋を送られて出ると、勝手元から、島田の十八九、色白で、脊のすらりとした、これ
ぞ——つい此の間なく成つた——妹のお邦さん、はら／＼と出て、

「お鹿末様。」

と、手をつかれた時は、足が縮んだ。其の下駄を穿かうとする、足袋の尖に大きな穴があつた
のである。

衣類より足袋は目に着く。江戸では女が素足であつた。其のしなやかさと、柔かさと、形の好
さを、春信、哥麿、誰々の繪にも見るが可い。就中、意氣な向は湯上りの足を、出しなにも、もう
一度熱い湯に浸してぐいと拭き上げて、雪にうつすりと桃色した爪さきに下駄を引掛けたと言ふ。
モダンの淑女…きものは不斷着でも、足袋は黄色く汚れない、だぶ／＼しない皺の寄らないの
にしてほしい。練出す時の事である。働くと云へば、説が違ふ。眞黒だつて破れて居たつて、煤
拂、大掃除には構ふものか、これもみぐるしからぬもの、塵塚の塵である。

—時に、長野泊りの其の翌日、上野へついて、連とは本郷で分れて、私は牛込の先生の玄關
に歸つた。其年父をなくした爲めに、多日、横寺町の玄關を離れて居たのであつた。駈け込むや

うに、門外の柳を潜つて、格子戸の前の梅を覗くと、二疊に一人机を控へてた書生が居て、はじめて逢つた、春葉である。十七だから、髯なんか生やささない、五分刈の長い顔で、仰向いた。

「先生。……奥さんは。……唯今、歸りました。」

「あ、泉君ですか。……先生からうかゞつて存じて居ります。何うも然うらしいと思ひました。僕は柳川と云ふものです。此頃から參つて居ります。」

「や、ようこそ、……何うぞ。」

懇懃で、なが可い。これから秋冷相催すと、次第に、焼芋の買ひっこ、煙草の割前で睨み合つて喧嘩をするのだが、——此の一篇には預る方が至當らしい。

處で——父の……危篤……生涯一大事の電報で、其の年一月、節いまだ大寒に、故郷へ駈戻つた折は、汽車で夜をあかして、敦賀から、俣だつたが、武生までで日が暮れた。道十一里だけけれども、山坂ばかりだから抄取らない。其の昔、前田利家、在城の地、武生は柳と水と女の綺麗な府中である。

佐久間玄蕃が中入の懈怠のためか、柴田勝家、賤ヶ嶽の合戦敗れて、此の城中に一息し湯漬を所望して、悄然と北の莊へと落ちて行く。ほどもあらず、勝に乗つたる秀吉が一騎驅けに馬を

寄せると、腰より采を抜き出し、さらりと振つて、此れは筑前守ぞや、又左、又左、鐵砲打つなと、大手の城門を開かせた、大鬧大得意の場所だが、そんな夢も見ず、悶々明かした。翌朝まだ薄暗かつたが、七時に乗つた俣が、はずむ酒手もなかつたのに、其の日の午後九時と云ふのに、金澤の町外れの茶店へ着いた。屈竟な若い男と云ふでもなく年配の車夫である。一寸話題には成らうと思ふ、武生から其の道程、實に二十七里である。——深川の俣は永代を越さないのを他に見得にする……と云つたもので、上澄のいゝ處を吸つて萍を譲る。客から極めて取つた賃銀を頭でつかちに掴んで尻つこけに仲間に落すのである。そんな辣腕と質は違つても、都合上、勝手よろしき處で俣を替へるのが道中の習慣で、出發點で、通し、と極めても、そんな約束は通さない。が、親切な車夫は、その信ずるものに會つて、頼まれた客を渡すまでは、建場々々を、幾度か物色するのが好意であつた。で、十里十五里は大抵曳く。廿七里を日のうちに突つ切つたのは始めて出逢つた。……

品 小
不忍の池で懸賞づきの不思議な競争があつて、満都を騒がせた事がある。彼の池は内端に廻つて、一周圍一里強だと言ふ。彼の池を、朝の間から日没まで、歩調の遅速は論ぜぬ、大略十五時間間に、幾廻りか、其の回数が多いのを以て勝利とする。……間違つたら、許しっこ、たしか、當、時事新報の催しであつたと思ふ。……二人ともまだ玄關に居たが、こんな事は大好だから柳

川が見物、參觀か、參觀した。「三人ばかり倒れて寝たよ、驅出すのなんざ一人も居ない、……皆な恚う腕を組んで、のそり／＼と草を踏んで歩行して居たがね、あの草を踏むのが祕傳ださうだよ、中にはぐつたりと首を垂れて何とも分別に餘つたと云ふ顔をして居たのがあります。見物は山も町も一杯さ。けれども、何の機掛もなしに、てくり／＼だから、見て居て變な氣がした。——眞晝間、憑ものがしたか、魅されてでも居るやうで、そのね、鬱ぎ込んだ男なんざ、少々氣味が悪かつた。何しろ皆顔色が眞つ蒼です」——此時、選手第一の賞を得たのは、池をめぐること三十幾回、翌日發表されて、年は六十に餘る、此の老神行太保戴宗は、加州小松の住人、もとの加賀藩の飛脚であつた。

頃日聞く——當時、唯一の交通機關、江戸三度と稱へた加賀藩の飛脚の規定は、高岡、富山、泊、親不知、五智、高田、長野、碓氷峠を越えて、松井田、高崎、江戸の板橋まで下街道、百二十里半——丁數四千三十八を、早飛脚は満五日、冬の短日に於てさへこれに加ふること僅に一日二時であつた。常飛脚の夏（三月より九月まで）の十日——満八日、冬（十月より二月まで）の十二日——満十日を別として、其の早の方は一日二十五里が家業だと言ふ。家業を奮發すれば、あと三里五里は走れようが、それにしても、不忍池の三十幾回——況んや二十七里を日づけの車

夫は豪傑であつた。乗つたものに徳はない。が、殆ど奇蹟と言はねばならない。が、其の顔も覺えず、惜むらくは苗も聞かなかつたのは、父のなくなつた爲めに血迷つたばかりでない。幾度か越前街道の往來に馴れて、賃さへあれば、俵はひとりで驅出すものと心得て居たからである。しかし、此の上下には、また随分難儀もした。

炎天の海は鉛を溶かして、とろ／＼と瞳を射る。風は、そよとも吹かない。斷崖の巖は鹽を削つて舌を刺す。山には木の葉の影もない。草いきれは幻の煙を噴く。八月上旬……火の敦賀灣、眞上の礪礪たる岨道を、俵で大日枝山を攀たのであつた。……

上京して、はじめの歸省で、それが病氣のためであつた。其頃、學生の肺病は娘に持てた。書生の脚氣は年増にも向かない。今以て向きも持てもしないだらうから、御婦人方には内證だが、實は脚氣で……然も大分手重かつた。重いほど、ぶく／＼とむくんだのではない、が、乾性と稱して、その、瘦せる方が却て質が悪い。

品 小
午飯に、けんちんを食べて吐いた。——夏の事だし、先生の令夫人が心配をなすつて、お實家方がお醫師だから、玉章を頂いて出向くと、診察して、打傾いて、又一封の返信を授けられた。寸刻も早く轉地を、と言ふのだつたさうである。私は、今もつて、決してけんちんを食はない。

江戸時代の草紙の裡に、松もどきと云ふ料理がある。たづぬるに精しからず、宿題にした處、近頃神田で育つた或婦が教へた。茄子と茗荷と、油揚げを清汁にして、薄葛を掛ける。至極經濟な惣茶ださうである。聊かけんちんに似て居るから、それさへも遠く慮る。

重湯か、薄粥、或は麵麩を少量と言はれたけれども、汽車で、そんなものは得られなかつた。乗通しは危険だから。……で、米原で泊つたが、羽織も着ない少年には、粥は煮てくれぬ。其の夜から翌日。

——いま、俣で日盛りを乗出すまで、殆ど口にしたものはない。直射する日の光りに、俣は坂に惱んで幌を掛けぬ。洋傘を持たない。身の楯は冬の鳥打帽ばかりである。私は肩で呼吸を喘いだ。剩へ辿り向ふ大良ヶ嶽の峰裏は——此方に蛾ほどの雲なきにかゝはらず、巨濤の如き雲の峰が眞黒に立つて、怨靈の鉞形の差覗いては消えるやうな電光が山の端に空を切つた。——動悸は躍つて、心臓は裂けむとする。

私は、先生が夏の嘉例として下すつた、水色の絹べりを取た、はい原製の涼しい扇子を、膝を緊めて、胸に確と取つて車上に居直つた。而して題を探つて極暑の一文を心に案じた。咄！心頭を滅却すれば何とかで、悟れば悟れるのださうだけれど、暑いから暑い。悟ることなんぞは今もつて大嫌ひだ。……

汝、炎威と戦へ、海も山も草も石も白熱して、汝が眼眩まんとす。起て、其の瘦軀をかつて、袖を翳して病魔に楯せよ。隻手を拂つて火の箭を斬れ。戦ひは弱し。脚はふるふとも、心は空を馳よ。然らずんば……

などと、いや何うも氣恥かしいが、其處で倒れまいと、一生懸命に推敲した。このために、炎天に一滴の汗も出なかつたのは、敢て歌の雨乞の奇特ではない。病める青草の萎えむとして水の涸いたのであつた。

けれども、冬の鳥打帽を被つた久留米緋の小僧の、四顧人影なき日盛りを、一人雲の峰に抗して行く其の勇氣は、今も愛する。

心は空を馳よ。然らずんば——苦しいから、繰返して、
汝、炎威と戦へ。海も山も、草も石も白熱して汝が眼眩まんとす。起て……
うゝ、と意氣込むと、車夫が流るゝ汗の額を振つて、

「あんたも暑からうなあ——や、青い顔をして……も些ツとで茶屋があるで、水など飲まつせえ。」

品 小
水を……水を唯云つたのに、山蔭に怪しき伏屋の茶店の、若き女房は、優しく砂糖を入れて硝子盃を與へた。薬師の化身の様に思ふ。人の情は、時に、あはれなる旅人に恵まるゝ。若いも

のは活返つた。

僥倖に雷は聞こえなかつた。可憐い夕立雲は、俣の行くにつれて、峠をむかう下りに白刃を北に返した電光とともに麓へ崩れて走つたが、たそがれの大良の茶屋の蚊柱は凄じかつた。片山家は灯の遅い縁柱の暗中に、刺しに刺して、悶えて揮ふ腕からは、血が垂れた。其の惱ましさを、崖の瀧のやうな紫陽花の青い叢の中に突つ込むで身を冷しつゝ、且つもの狂はしく其の大輪の藍を抱いて、恰も我を離脱せむとする魂を引緊むる思ひをした。……紫陽花の水のやうな香を知つた。——一夕立して過ぎながら、峠には水がなかつたのである。

やがて、星の下を雨とともに流れの走る、武生の宿に着いたのであつた。一宿り。一宿りして、こゝを、又こゝから立つて、大雪の中を敦賀へ越した事もある。俣はきかない。俣夫が朝まだき提灯で道案内に立つた。村へ掛ると、降積つた大竹藪を弓形に壓したので、眞白な隧道を潛る時、雀が、ばら／＼と千鳥に兩方へ飛交して小糞を糺す其の翼に、藍と萌黄と紅の、臘燭に亂れたのは、鴉、山雀、鸞、目白鳥などの假の峙を驚いて起つのであつた。峠に上つて、案内に分れた。前途は唯一條、峰も谷も、白き宇宙を細く縫ふ、それさへまた降りしきる雪に、見る／＼、歩一歩に埋もれ行く。

絡つた毛布も白く成つた、人は冷たい粉蝶と成つて消えむとする。

むかし快菴禪師と云ふ大徳の聖おはしましけり。總角より教外の旨をあきらめ給ひて、常に身を雲水にまかせ給ふ……

殆ど暗誦した雨月物語の青頭巾の全章を、雪にむせつゝ高らかに朗讀した。

禪師見給ひて、やがて禪杖を拿なほし、作麼生何所爲ぞと一喝して、他が頭を撃たまへば、たちまち氷の朝日に逢ふが如く消え失せて、かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとゞまりける。

あたりは蝙蝠傘を引つ擔いで、や聲を掛けて、卍巴を、雑立て雑立て驅出した。三里の山道、谷間の唯破家の屋根のみ、鷺の片翼折伏した状態のを見たばかり、人らしいものの影もなかつたのである。二つめの峠、大良からは、岨道の一方が海に吹放たれるので雪が薄い。俣は敦賀まで、漸と通じた。

此の街道の幾返。さもあらばあれ、苦しい思ひばかりはせぬ。

紺青の海、千仞の底よりして虹を縦に織つて投げると、玉の走る音を立てて、俣に、道に、さらさらと紅を掛けて敷く木の葉の、一つ／＼其のまゝに海の影を尙ほ映して、尾花、枯萩も青い。月ならぬ眞晝の緋葉を潛つて、仰げば同じ姿に、遠く高き峰の緋葉は蒼空を舞つて海に散る……